六五八

八月十六日　金　午後八時―九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　千葉縣海上郡高神村犬若犬若
館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

君の御蔭にて閑庭未だ花絶えず日々寂寥を慰す。昔人曰熱時には閣梨ヲ熱殺スト漱石ハ然ラズ
擧シテ云フ熱時ニハ閣梨ヲ凉殺ス

六五九

八月十七日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　大分縣大分郡松岡村吉嵜寛也へ　〔はがき〕

四海同胞の好みを以て御書被遣拜見致候處美人草の人物の名二葉亭氏に有之由御注意難有候實
は其面影をよまず夫が爲めかゝるコントラストを生じ候先は御答迄　草々

六六〇

八月十八日　日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　松山市一番町十九番地池内
内高濱浩へ

濱で御遊びの由大慶に存じます大きな鼓を御うちの由是も大慶に存じます。松本金太郎君はど
こにゐますか。私のゐる所からあまり遠方では少々恐れ入ります。謠の道にかけては千里を遠し
とする程の不熱心ものであります。專門の學問をしに倫敦へ參つた時ですら遠くつて〳〵弱り切

りました。
金太郎君へ入門の手續はどうしますか月謝はいくらですか。相成るべくは相互の便宜上師弟差
向ひで御稽古を願ひたい。敢て同門の諸君子を恐るゝにあらず。度胸が据らざるが爲めなり。
あなたは二十日頃御出京と承はりました。然し御令兄の御病氣ではいけますまい。どうか御大
事になさい。
人の惡口を散々ついてあとからあれは奬勵の爲めだと云ふのは面白いですね。六號活字の三行
批評家や中學生徒に奬勵されちやたまらない。　以上

八月十九日　金
虛子先生

謠の件は近々御歸り迄待ちましてもよろしう御座います。いそぐ事ではありません

六六一

八月十九日　月　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　千葉縣海上郡高神村犬若犬若
館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

おとつさんが肺病になつた由御氣の毒なり。森田の兒が死んで川下江村は小田原で倒る。――
吾等は難有く其日を送る。幸福なり。
其代りうちの下女は主人をおびやかしにかゝる。異な事なり。漱石下女の爲めに人生觀を易へ
る事あらば漱石と下女とは同程度の人物なるべし　呵々。

八月十九日

六六二

八月十九日　月　（時間不明）本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

君が歸京前最後の手紙としてこれをかく。三重吉と一所にこしらへてくれた花壇は未だに花が絶えぬ御蔭で日々慰めになる。處美人草をかく時にも大なる注意物となつた。筆を以て漫然とあの花畠を見てゐる。暑があけて秋が來て朝夕は涼しい。小供が蟲籠を軒へかけた。蟲がなく。少し書物が讀みたい。此夏も江山の氣を得ずに籠城して仕舞さうだ。三重吉のおとつさんが肺病になる。川下江村といふ人が卒業してすぐ死んでしまつた。

世の中は妙な考を持つてゐるものだ。殿下樣が漱石の敵だと云へば漱石はすぐ恐れ入るかと考へてゐる。至極呑氣に出來てゐる。殿下樣はえらいかも知れないが、漱石がさう安つぽく出來てゐた日にや小說なんかかく必要がなくなつて仕舞ふ。尤も甚しい例は漱石の文は時候後れだと云へばすぐ狼狽して文體をかへるかと思つてる。漱石は獨乙が讀めないと云つて冷評すれば漱石は翌日から性格を一變するかと心得てゐる。どう考へても世の中は呑氣だなあ、豐隆子。こんな人間がごろ〳〵してゐるうちは漱石もいさゝか心丈夫だ。

島からの端書到着。石は何で出來てゐると聞いた人は傑作家に違ない。

君が歸る迄は花壇に花があるだらう。小說は今月中には方づくだらう

八月十九日　金

豐隆樣

六六三

八月二十日　火　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　麻布區笄町柳原邸內松根豐次郎へ　〔はがき　署名に「夏目道易禪者」とあり〕

問ふて曰く男女相惚の時什麼

漱石子筆ヲ机頭ニコロガシテ曰ク天笠ニ向ツテ去レ

讃　曰

春の水岩ヲ抱イテ流レケリ

問ふテ曰ク相思の女、男ヲ捨テタル時什麼

漱石子筆ヲ机頭ニ竪立シテ良久曰ク日々是好日

讃　曰

花落チテ碎ケシ影ト流レケリ

六六四

八月二十一日　水　午後三時—四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　麻布區笄町柳原邸內松根豐次郎へ　〔はがき〕

心中するも三十棒

朝貌や惚れた女も二三日
心中せざるも三十棒
垣間見る芙蓉に露の傾きぬ
道へ道へすみやかに道へ
秋風や走狗を屠る市の中

六六五

八月二十三日　金　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕

野村さん二十五日に朝日新聞へ給料をとりに行つて呉れないか。どうせひまだらう。午後がよろしい。以上

六六六

八月二十六日　月　午後三時—四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　小石川區原町十番地寺田寅彦へ〔はがき〕

玉稿ハ新聞ヘ屆ケタリ。天陰、滿庭コトゴトク蟬聲。漫然トシテ座ス。興趣無盡。理科ノ不平ヲヤメテ白雲裡に一頭地ヲ拔キ來レ

六六七

八月二十八日　水　午前(以下不明　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

大水にて大騒一寸見物に行きたい樣が致すがもう三四日は慶美人草故外出を見合せる時に君も朝日へ入社の由大慶一人でも知つた人が這入るのは喜ばしい

御舍弟の御病氣の事は森田氏より承はりたり。御氣(の)毒と思ふ。

「うきふね」は二三の書店へ話丈はして置いたが只今出版界不景氣だからと云ふので春陽堂抔は一寸逃げた。かうでもしたらどうだらう。君が「うきふね」持參大倉へ行つて原平吉に逢ふ僕が是非出版してくれといふ添狀をかく。其後は君の談判に任せる。

それからまだこんな事がある。昨夕も森田に話したのだが。僕は月給の約束で明治大學で三十圓宛取つて居た。所が朝日へ這入るに就て明治大學も辭職した。その月(卽ち三月か四月と思ふ)の月給をくれない。そこで一應は内海月杖君に催促したら先生は早速會計に申して取計ふといふ返事丈よこしてまだ寄こさない。君僕の代理として君の事情を打明けて之を内海氏からとるか上田敏君から受取つて貰ふかする勇氣があればその三十圓を君に上げる。

夫で歸國の旅費が足りなければ十月十日になると僕は二三百圓金が這入るそのうち二十圓位なら君にやつてもいゝ。昨夜は森田君に貳拾圓かし。其他へもチョイ〳〵貸シタリやツタリスルノガ重ナルト何ダカ心細イ。然シ十月迄待テバソノ位ナ勇氣は回復スル

右一應御返事迄
兎に角九月初旬に一寸來給へゆつくり相談をする
八月二十八日　夏目金之助
中村蓊様

六六八

九月二日　月　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　小石川區久堅町七十四番地
菅虎雄へ

此間は失敬うちの家賃を三十五圓にするといふ三十五圓ぢやいやだから出る積だどこか好い所はないかね。無暗向不見に家賃を上げる家主は御免だ。御もよりに相當なのを御聞及なら一寸しらせてくれ玉へ　頓首
九月二一日　金
虎雄様

六六九

九月二日　月　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕

野村さん。家主が家賃を三十五圓にするといふ。今月中に越すつもり好いうちがあるなら心掛けて敎へて呉れ玉へ
九月二日

六七〇

九月二日　月　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　千葉縣一の宮一の宮館畔柳都太郎へ

端書拜見肺せんかたるの疑ありとの事大した事も有之間敷けれど隨分勉强して遊んだらよからうと思ふ僕も小說が脫稿に及んだから出掛て二三日馬鹿話でもしたいがどうも一の宮とあつては一寸行く氣にならん。實は此間大塚に誘はれて別莊地見分の爲め參つたのでね。一の宮より稻毛の方がよくはないか。

家賃を三十五圓にするといふから只今逃亡の仕度最中だ。君いゝうちを知らないか。〇〇は無暗に借りろ／＼といふ。あんなのは何だか氣味がわるい。實際僕の崇拜者でもないものが家を貸す爲に崇拜者になるなんて怪しからん譯だ。

僕例の立派な湯屋へ行つて體量をはかるに十二貫半である。今日かゝつた〔ら〕十二貫の半の半である。家賃と體量は反比例するものかと思ふ。今に家賃が百圓位になれば體量〇卽ち大往生の域に達する事だらう。胃が惡クテイケナイ。之を稱してキツツエンカタールト名ケル。一の宮位ぢや中々癒らない。火葬場のストーブで煖めないと到底全治しないさうだ。

先は御返事迄　匆々頓首

九月二日

畔柳様　　金

六七一

九月二日　月　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ

殘暑にも拘らず御機嫌よきや小生不相變消光小説は漸く脱稿せり。先日佐治君が來て明治學院を斷つたと云ふ。其代の野村も斷つたといふ。其代はもう出來たのかね。もし出來なければ森田米松を入れてやつてくれないか。尤も君も時間が可成澤山持つ方がいゝから餘つたらば餘つた丈を周旋してやつてくれないか先は用事迄　匆々頓首

九月二日

眞綱様　　金

六七二

九月四日　水　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

爾後御疎遠に打過申候不相變御清穆奉賀候小生漸く小説を脱稿今暫く小康をむさぼる積に候偖突然ながら曙町でも何でもよろしきが小生の這入る位の貸家は無之やもし御見當り又は御聞及ならば端書にて御一報願上度實は今月中に此家を引拂はねばならぬ事と相成候につきもしやと思ひ唐突ながら伺上候　以上

九月四日

繞石詞兄　　金之助

六七三

九月四日　水　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

淨土宗の方は先約にて森卷吉氏にきまる明治學院の方は國史科の何とかいふ人が出來た由此人愛知人にて無暗に利巧に立ち廻り學院の方でも難有なき由なれば森田君が覺召がある事が今少し早く分つてゐれば譯なかつたのにと野間から云つて來た

右の次第にて雙方共駄目也。但し森卷吉は瀧の川の耶蘇夜學校をやめる筈だらうと思ふ。夜中瀧の川迄通ふ勇氣があれば聞き合せて見るが如何

九月四日

米松様　　金

六七四

九月四日　水　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下大久保仲百人町百五十

三番地戸川明三へ

拜啓先日は郊外生活の件につき一寸申上候處早速御返事にて却つて恐縮致候
偖甚だ唐突ながら其郊外生活の儀につき御迷惑ながら伺ひ上げ候が小生の家主家賃を上げる事に堪能なる人物にて二十七圓を忽ちに三十圓と致し今や三十圓を三十五圓に致さんと準備最中にて此方にも御同樣立退の準備を取り急ぎ候。そこで斯樣な立ち入つた話を致し候も實は貴君御住居の近邊に適當なる立退場　御承知にもやと存じての御願の前置に候とくに御探しを願ふと申す樣な横着心にては萬々無之、もし御心づきの貸家も有之候はゞ何卒端書にて御一報被下間鋪候や御多忙中甚だ失禮を申上候何卒御用原捨被下度候　匆々頓首

九月四日　夏目金之助

戸川秋骨様

金魚は面白く拜見致候

六七五

九月七日　土　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　千葉縣一の宮一の宮館畔柳都太郎へ

僕の胃ガン君の肺尖竹風の美的生活早稲田の自然主義大抵同程度なものだらう何れも心配するに及ばず。

あの繪は傑作だ。あの音楽も大結構だ。タンホイゼル位な所だ。海邊へ行くとシーインスピレ

ーションの御蔭で色々なものが出來る

昨夜机の上に載せて置いたニツケルの時計と鋏と小刀を盗まれた。隨分安直な泥棒だ。

四方に檄を飛ばして貸家を捜がしてゐる。君の所を二軒かりるもいゝが庭はまるで無いぢやないか

虞美人草脱稿後來客ストリームの如く流れ來る。主人ひと攻めとなる。

東京は中々暑い暑いのと人が來るので書物は一枚もよめない。グー／＼寝る。寝る事は免許以上の腕前だね。

大阪の新聞で虞美人草を一回ぬかして濟して掲載してゐる。呑氣な不都合もあるもんだ。讀者は何とも云はない。氣のついたのは作者ばかりだらう

中川は一體熊本へ行くのかな何だか些とも分らない

まづ此位でやめる。

もう一つある。體量は十二貫半から半の半に減じた翌日から急に十三貫に増して昨日は十三・一あつた。此樣子で見ると體量と家賃は正比例するものと見て差支ない右正誤迄　草々

九月七日　金之助

芥舟先生

六七六

九月八日　日　午後三時—四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番

地内海方野上豐一郎へ

拝啓

此間中から八重子さんが御病氣の由大した事もないだらうと思つてゐたら昨日鈴木の話では熱が四十度もある由それでは普通風邪位な事ではないのだらう中々大病で君も看病に骨が折れる事だらうと思ふ一寸見舞に行かうと思ふが此あついので僕も大分弱つてゐるそこへ朝から人ばかり來るので益弱るばかりそれで手紙で失敬する何か不便な事があるならして上げる云ふて來給へ

以上

九月八日

豐一郎様

金之助

六七七

九月八日 日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より 府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三へ

御面倒の御願を致した處早速御返事頂戴難有存候

御地近邊に一二軒は空屋有之よしいざとならばまかり出たくと存候。實は意外に繁殖力多き家族にて大供五人プラス小供五人の大景氣故五六間にては少々間に合ふまじかとそれが心配に候然し家賃頗る廉なるに免じて少々の我慢も致しかねまじき趨勢いざとなればなにかど御厄介になる事と存候

小生も御近邊にて時々御邪魔でも致す方を望み居候何だが西片町邊はエラ過ぎる樣に相成候郊外生活は洪水の爲め一時御中止のよしもう大分退いた樣子故又御始めにならん事を希望致します

先は御禮迄 匆々

九月八日

秋骨先生

金之助

六七八

九月八日 日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より 小石川區原町十番地寺田寅彦へ

「やもり」まあ負けて面白いとする。欠點は一初めは御房さんが山になる樣だ(二)所が荒物屋が主になつて仕舞つた。(三)そこでツギハギ細工の樣な心持がする(四)始からやもりに關する記臆をツナゲル體で讀者に是が中心點だと思はせない樣に兩者を並列する心得があれば此矛盾は防げたらうに(五)さう云ふ態度で並べた話ならもつと渾然としてくる。如何となればいくつ並べてもやもりで貫いてゐるから。——又文章の感じが一貫してゐるから である。

文章の感じは君の特長を發揮してゐる。矢張ドングリ感、龍舌蘭感である。此種の大人しくて憐で、しかも氣取つてゐなくつて、さうして何となくつやつぽくつて、底にハイカラを含んでゐる感じは外の人に出しにくい。君には是より以外に出せないかも知れない。先は一口評迄。早速虚子に送る

九月八日

寅　　彦　　金

六七九

九月十日　火　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區駒込千駄木町五十七番地

齋藤阿具へ

拜啓

御手紙拜見處美人草を出版したき人有之由實はあれはもうとくの昔に約束濟にて既に最初の方は活版に組み込んで今日から校正が來た位故何とも致しがたく先方へよろしく御斷り願候。それから僕が君のうちへ引き越したのは判然何月か覺えてゐない。何でも正月歸國して夫から方々家を探がして漸く君のうちへ這入ると間もなく四月になつて學校へ出勤した樣に記憶してゐる。其時うちを消毒した事があるそれを僕は見分に行つた其時の感じは何でも嚴寒の候ではない。だから三月頃だと思ふ。只今山妻不在歸つたら聞いて見る女は年月をよく覺えてゐるものだから。

以上

九月九日

齊藤學兄　　金之助

六八〇

九月十日　火　午後六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

先刻は御多用の所御邪魔失禮致候御親切に御案内被下候段難有奉謝候偖眞宗大學の口は喜んで應ずる人は澤山可有之と存候が早速思ひつき候人を二三御紹介及候古きかた御望の由につき

(一)戸川明三。是は明治學院出にて英文撰科卒業。山口高等學校教授廢校後出京。御存じの秋骨君に候

(二)名須川　良。是は熊本高等學校教授たりし所衝突の結果出京

(三)野間眞綱　是は前の二人と違ひ門弟に候四年許前に卒業只今明治學院の教師先達士官學校をやめたり

其他御望とあれば猶二三人はあるべし。新しくて濟めばいくらでも有之候

先方へ問ひ合す前に一寸御意向を伺ひ置候先は右御返事迄　匆々頓首

九月十日

大谷様　　金之助

六八一

九月十四日　土　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

拜啓戸川君の信仰事件は小生も知りませんが一つきいて見ませう。きいて耶蘇信者だと云つた

ら仕方がないが。信者だらう丈でやめるのは少々殘念ですから。

家の事色々御盡力難有く存じます廣瀨君のうちは落成せぬうちから借りろ〳〵といふ好意でしたが實はまだ行つて見ません。名須川君の新居はどこか知りませんどこですか。其近所のうちは何だかよさゝうに思ひますが。御世話序にもう少し聞いて下さいませんか。出來ればこゝ五六日うちに極めて下旬には引き移る事に致す積です。もうどこへでも飛んで行く積です。以上

九月十四日　夏目金之助

繞石兄

六八二

九月十四日　土　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三へ

拜啓先日はわざ〳〵御光來被下ました處何の風情もなくまことに失禮致しました。偖大谷君から直接に御照會になつたさうですが例の眞宗大學授業の件ですが實は小生も大兄を推擧して置いた處昨日大谷君から手紙で當局者のいふには戸川君は耶蘇教ぢやないだらうかさうすると京都の頑固連に對して困るといふ返事ださうです。そこで大谷君があなたの信仰の有無を私へ聞き合せに來たのですが私はそんな事は一切知らないから——まあ戸川君に聞いて見るから待つてくれと大谷君に今手紙をかいた所です。

それで大兄があまり御望にならんものを信仰の有無など問ひ正す樣なホジクリは不必要と認めますが萬一目下の御事情該校出稼御希望なればだまつて其儘にして置いては却つて御不便宜かと存じ入らぬ事ながら一寸伺ひます。尤も直接に大谷さんの方へ御返事をなさつてもよろしう御座います。先は用事まで　匆々

九月十四日　金之助

秋骨樣

六八三

九月十四日　土　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

寶生新君件委細難有候。早速始めたいが轉宅前はちと困ります。轉宅後も遠方になると五圓では氣の毒に思ひます。いづれ落付次第又御厄介を願ひませう

六八四

九月十四日　土　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　下谷區谷中清水町五番地橋口清へ

拜啓其後は御無沙汰偖今般大塚さんの奥さんが萬朝に連載した露と題する小說を文淵堂から出版するに就てあなたに表紙の意匠を願ひ度と申しますがどうか御面倒でも一つ書いて下さいませんか。口繪は滿谷さんに賴むさうですが出來るなら滿谷さんの繪を御宅へ持つて行く樣にします

からそれと調和する様にやつて見て下さい。いづれ表向は文淵堂が參りますが私は個人として大塚さんの代りに御願申して置きます。

私も小説が濟んで少々閑になつたから其うち上がります。あなたの繪はどうですかまだ忙がしいですか

貢さんによろしく

今月中に轉宅をしなければならんので方々聞き合せ中です　先は用事迄　匆々頓首

九月十四日　金

橋口清様

六八五

九月二十三日　月　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

今日千駄ケ谷を探索君の家(卽ち石門)を見んと存ぜし處千駄ケ谷も隨分廣い所にて何とも蚊とも相分らず。代々木代々幡抔をぶらついて大に健康を養成致候

それで念の爲めもう一遍石門館を見たいと思ひ候が御慈悲に明日御連被下間敷や尤も明日は社の運動會が玉川にある。三時に散會といふ御布令だから其前に御免を蒙つてもよろしい故どこか御出張を願つて待ち合せたいと思ふが適當の場所と時を御指定願ひたい。それとも都合によりては運動會を御免蒙つてもよろしい。

猶都合によつては石門館の番地町名を御報にあづかりたい左すれば小生一名にて出掛候　以上

九月二十三日夜　夏目金之助

森田綠苹先生

六八六

九月二十八日　土　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ　〔はがき〕

私の新宅は

牛込早稲田南町九番地原

デアリマス。アシタ越シマス

六八七

九月二十八日　土　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ　〔はがき〕

家の事にて種々御心配恐縮漸く左記の處へ本月中に移轉の都合に相成候右御禮旁御通知迄・匆々

牛込區早稲田南町九番地原

九月二十八日

六八八

九月二十八日　土　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

小生明日左記の處へ轉居す

牛込區早稲田南町九番地

九月二十八日

六八九

九月二十八日　土　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　下谷區谷中清水町五番地橋口清へ　〔はがき〕

先達は家の事で御面倒相願難有候今度牛込區早稲田南町九番地へ轉居する事に相成今月中に引移る事に致候右御禮旁御報迄　匆々

六九〇

九月二十八日　土　午後零時―一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ　〔はがき〕

明日曜牛込早稲田南町九へ轉居ヒマナラ彌次馬に乘ツテ御出征如何

六九一

九月二十八日　土　午後零時―一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ　〔はがき〕

明日曜牛込區早稲田南町九へ轉居の筈ヒマガアルナラ見物旁手傳に來ラレンコヲ希望

六九二

十月二日　水　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　小石川區原町百二十番地行德俊則へ〔はがき〕

家屋の儀色々御世話にあづかり難有候今月より表記の所へ移り候間右御通知申上候　以上

十月二日

六九三

十月四日　金　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

拜啓爾來等閑に打過候段怠慢の罪ひとへに御海恕願上候御惠送〔の〕鮑今日着寒厨一段の芳味を秋夜に添へ可申御好意奉萬謝候

新居僻遠にていづ方へも御無沙汰閑人ならでは參るものなき邊鄙に有之候へどももし御上京の節御氣でも向き候へば御枉駕被下度待上候

虞美人草御讀被下候由本月末にて完了の筈御批評願上候
今度の引越につき始めて借家の拂底を感じ書物が邪魔になり殆んどいやになり申候昔の人は自分の家藏を持たねば一人前でないとか申居候漂浪を分とする小生如きものも成程と思ひ當り候漸漸郊外へ退却の外無之我ながら憫笑
先は御返事かた〴〵御禮迄匆々如斯候　以上

十月初四

夏目金之助

渡邊　様

六九四

十月四日　金　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

拜啓また御面倒なる事につき一書を呈する事と相成候
勸業銀行の有尾敬重氏の息子が今度中學を卒業して高等學校へ這入る迄英語の練習をして貰ひたいとの申込を引受候處意外の遠方へ引うつりたる爲めどう〔か〕近邊なる大兄に紹介して呉れぬかとの事に候(同氏は富士前町住に候)
小生は一週に一兩度ひまな時にはと申置候が其位の御閑は出來不申候や。實は大兄の御多忙の事も一應申置候。又御都合次第にては甚だ失禮ながら相應の御報酬を差出す様に致すだらうと存候
實は御面倒で申上るのも甚だ恐縮とは存ぜしも小生移轉の爲め平生交際ある友人(醫學士尼子

氏)の依頼をもだしがたくかく御難題を吹きかけ申候
御遠慮なき處御返事被下候はゞ幸甚　頓首

十月四日

夏目金之助

大谷正信様

六九五

十月六日　日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ〔はがき〕

御多忙の處御好意難有候早速有尾氏へ通知致す事に取計ひ可申、或は先方より直接に御願に出るやも計りがたく其節はよろしく御相談願上候

六九六

十月七日　月　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拜啓御手紙の趣承知致候實は十月十日に銀座貳丁目服部書店より猫の印税殘部貳百七十圓持參の筈故そのうちを貳拾圓君に用立て様と思つて居た然し十日に君が出立するとなると間に合はない故封入の僕の名刺を持つて同店に行つて談判して一日でも早く取つてくれてそのうち二十圓差引いて殘りのうちで七十圓三十錢(九月丸善から取りに來た書代)を丸善へ拂つて殘りの百八十圓

を僕の所へ持つて來て呉れゝば好都合である
もし服部が十日でなければ出來ぬといふならば君の出立日を一二日延べるより致方あるまい
序だが右猫印税の受取も入れて置く引替に渡してくれ給へ

十月七日　夏目金之助

中村君

六九七

十月八日　火　牛込區早稲田南町七番地より　府下青山原宿二百九番地森次太郎へ

祝滿洲日々新聞創刊

朝日のつと千里の黍に上りけり

昨日は失敬御約束の句右の如くにて御免蒙り候尤も御取捨は御隨意に候　以上

十月八日　夏目金之助

森様

六九八

十月八日　火　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓寶生の件は御急ぎに及ばずいづれ落付次第此方へ招待仕る方雙方の便宜かと存候實はケチな事ながら家賃が五圓增した上に月謝が五六圓出ると少々答へる故一寸樣子を伺つた上に致さう

かと逡巡仕る也
魯庵氏への紹介狀別封差上候間御使可被下候
先は用事迄　匆々頓首

十月八日　金

虛子先生

六九九

十月八日　火　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

御小兒御病氣如何もし御樣子よくば木曜の夕芋飯を食ひに御出掛下さい尤も飯の外には何もなき由人間は連中どや〳〵參る事と存候紹介狀サツキ郵便で出しました

七〇〇

十月九日　水　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

拜啓先日願候有尾氏子息稽古の件につき同氏より先生の御出にては恐縮故此方よりまかり出で御教授にあづかり度と申出られ候御迷惑の次第とは存じ候へども右にて御聞入被下間敷候や。小生は直接に有尾氏を知らず只小生に依頼せる知人の言によれば同氏は平民的なる謙遜家なりと云へば子弟の教育上より家庭へ先生を呼びつける如き仰山な所置を好まぬ爲とか手紙にて申越候色

色御面倒なる事のみ願失敬千萬に候へども何とか今一應御熟考を煩はし度と存候　以上

十月九日　　夏目金之助

大谷學兄

七〇一

十月九日　水　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

服部件種々御盡力難有候同店主人本人小生方へ持參の由なれどどうせ其うちより君に上げるものを出す譯故君の方で受取つてくれた方が便利に御座候主人もわざ〳〵早稲田迄出張する迷惑がはぶけて便利な筈に候。よつて御面倒ながら本日君が行つて取つて下さい。其方が雙方の便利であり且つ確かである　以上

十月九日　　夏目金之助

中村翁様

七〇二

十月九日　水　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區本町三丁目博文館内巖谷季雄、田山錦彌へ〔はがき〕

謹啓西園寺侯爵招待の日どり御變更につき又〻御通知を煩はし御手數恐縮の至に候當日は生憎

差支にて出席仕かね候間左樣御承知被下度右折返し御返事迄匆〻

七〇三

十月十日　木　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ〔はがき〕

御依頼の件御親切に御引受被下難有候早速先方へ申つかはし候定めて喜ぶ事と存候

先〔は〕御禮迄　匆々

七〇四

十月十日　木　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區内山下町東洋協會内森次太郎へ

拝啓先日願上候人の履歴別紙の如くに候間御廻送申上置候につきもし本人相當の事も有之候はば可然御周旋被下度先は當用のみ　草々頓首

十月十日　　夏目金之助

森賢臺

七〇五

十月十一日　金　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三へ

拜啓玉稿拜受難有候早速社の方へ廻付致置候輪廓文學は面白く拜見致候
偖御匿名の件は過般御面會の節は一應面白きかとも存じ候ひし處よく考へ候に矢張公然の方可然と愚考仕り且つモデル問題八釜敷際あとにてあれは秋骨君だといふ事が分つてはモデル問題に關係深き大兄が却つて他より入らざる揣摩を受けらるゝ事あらんかと存じ專斷を顧みず公然と雅號拜借致候一應は御相談の上可取計處左程の大事件にても有之間敷(寄稿の内容より察して)と存じ一存にて取計申候もし不都合なれば後日御面會の節御叱責を甘受可仕候　以上

十一日

秋骨兄　　夏目金之助

七〇六

十月十三日　日　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

拜啓過般來毎々御面倒相顯候有尾氏令息授業の件につき御紹介及候間御面會被下度委細は拜眉の上萬々可申述候　以上

十月十三日

大谷様　　金之助

七〇七

十月十四日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下大久保仲百人町百五十三番地

戸川明三へ

拜啓モデル問題朝日社より返附致來候につき御廻送申上候御改作の分出來候節は頂戴可仕と存候

右當用迄　草々

十月十四日

戸川様　　金之助

七〇八

十月十六日　水　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ　〔はがき〕

蓄音器を買ふ樣な餘裕のある人に金を寄附するなんて勿體ない。蓄音器どころではないセツパ詰つて借りに來る人がある。さう云ふ時に貸す方が有効で有益である。だから寄附は御免蒙り候

七〇九

十月二十一日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豐次郎へ

拜啓尾崎より別紙參り候間供御高覽候返事は直接に同人へ御つかはし相成〔度〕候

二十一日　　金

豐次郎様

宿所は廣島市水主町三六に候

七一〇

十月二十六日　土　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方

森田米松へ

草雲雀の序遲延無申譯漸く半日の閑を偸んで書き了る。あまり御氣に入りますまいがこゝいらで御勘辨を願度候

十月二十六日　　金之助

草平大人座下

七一一

十月二十八日　月　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　鳥取縣西伯郡境町谷尾長へ

貴翰拜誦拙著御愛讀被下候よし難有存候御尋ねの箇所相しらべ候處小生の分は「枕を」の次の行に

「外して居る。凡そ人間に於て何が見苦しいと云つて口を開けて寐る程の不」

の一行有之夫より「不休裁云々」に接續致居候。小生の分は九版に候。御取寄の本に間違はなき筈なれども如何致せるものにや書店へ御懸合御引替可然かと存候先は右御返事迄早々頓首

十月二十八日

谷尾長様　　夏目金之助

七一二

十月二十九日　火　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

啓先日霽月に面會致候處御幼兒又々御病氣の由にて御看護の由嘸かし御心配の事と存候

偖別封（小說葦切）は佐瀨と申す男の書いたもので當人は是をどこかへ載せたいと申しますからホトヽギスはどうだらうと思ひ御紹介致します尤も當人貧乏にて多少原稿料がほしい由に候

御一覽の上もし御氣に入らずば無御遠慮御返却相成度ほかを聞いて見る事に致します　先は用事迄　匆々

二十九日　　金之助

虛子先生

七一三

十一月二日　土　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　京都市外下加茂村葵橋東詰北入厨川辰夫へ〔はがき〕

御紙面拜見京都へ御轉任の事はかねて聞及候御地は熊本より萬事好都合の事と存候先々結構に

候小野さんのモデル事件は小生も新聞にて讀み候。勝手な事を申すやからに候。定めし御迷惑の事と存候。勝手な事を勝手な連中が申す事故小生も手のつけ様なく候

七一四

十一月二日　土　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

〔はがき〕

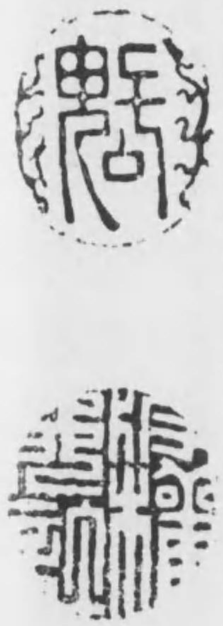
拜啓乙骨君の事難有存候同君の御隨意にてよろしき事と存候同君の宿所がわかれば改めて社員がまかり出萬事正式に御依頼致すべくと存候小生も參りて直接に參上の上御頼を致してもよろし

七一五

十一月五日　火　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　小石川區久堅町七十四番地菅虎雄へ

〔はがき〕

古道具屋で左の印を買つて來た處何と讀むやら分らず教へてもらひたい



七一六

十一月六日　水　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　姫路市外平野村三百十五番地池内松太郎へ

拜復此前御つかはしの御書狀は大坂の社より廻送し來候へども書中の意味は二三の來客に示し候へどもとんと不得要領其儘に打棄置候

今度のには姓名住所判然と御書入につき御返事致候小生は大坂の社には居らず表面の處にまかりあり

貴兄の御差出の書面は(十餘回)と承はれど一回も受取りたる事なし貴兄の作物月見草其他も未だ拜見も致さず通知も受けず候。是は大坂社より御受もどし可然と存候但し書面には簡明直截に用事と姓名住所を御認め可然然らざれば又々社の方で取り合はぬ事と存候

右御返事迄　匆々

七一七

十一月八日　金　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ

〔はがき〕

御手紙毎度難有八重子様より妻への書面も屆申候下女の義御心配奉謝候是は妻より何とか御返事致し可申と存候先は御返事迄　匆々

七一八

十一月九日　土　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　小石川區久堅町七十四番地菅虎雄へ

〔はがき〕

篆字を調べてもらつた處はいゝが版權免許は驚ろいたね元來何に使つたものだらうどうも御苦勞さま難有いがつまらない

七一九

十一月十日　日　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地上田敏へ

拜啓其後は御無沙汰御海恕被下度候偖植村正久氏所屬教會の婦人を以て組織せられたる家族講話會にて貴兄に一場の御話を願度旨同君より依頼につき御紹介申上候につき可相成は御面會の上御便宜を與へられ度願上候實は植村君自身御訪問の上相願ふべくの處色々多忙にて或は會員代理にて參上致すやも計りがたく候につき右御含み迄に申上候　匆々頓首

十（原）月十日　夏目金之助

上田學兄

七二〇

十一月十一日　月　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清

〈

先日は失禮御依頼の序文をかきました御氣に入るかどうだか分りませんがまあ御覽に入れます。ゆふべ大體の見當をつけて今朝十時頃から正四時迄かゝりました。然し讀み直して見ると詰らない然し大分奮發して書いたのは事實であります。そこを御買ひ下さい　頓首

十一月十日　金

虛（原）子　様

當分序分ハカヽナイ事ニシマス。ドウモ何ヲカイテ好イカ分ラナイ。

然シアナタノ作ヲ讀ムノハヒマガ入ラナカツタ。アレデハ頁ガ多クナリマセンヂ

七二一

十一月十三日　水　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　山形縣飽海郡酒田濱町伊藤悦太郎へ

〔はがき〕

拜啓御地製の黑柿紙卷莫入は先日到机右へ備へ日夕撫摩致居候右御禮迄　匆々

十一月十二日

七二二

十一月十五日　金　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓久しく拜顏を得なかつた處御手紙で虞美人草の批評をかいて居られる由承知右皆々へ披露致候斯樣に御丹精御研究の上御批評あらんとは思ひも寄らぬ所たとひ虞美人草が夫程の價値なきにせよ又其批評が褒貶いづれに向ふにせよ小生は心中より深く君の好意を感謝致候大喜雀躍は單に自分の爲のみならず近來の批評は寄席へ行つて女義太夫を評する格にて文壇の爲め頗る物足らぬ節有之所へ君が出て一批評をかく爲めに露西亞派を研究獨乙の哲學を研究、最後にシラーの傳迄しらべるに至つては其嚴正の態度堂々の獻立敬服の外なくしかも夫程骨を折つて貰ふ作物はといふと僕のかいたものに候故一層嬉しく思はれ候。君の批評を先鋒として日本の批評が從來の態度を一新する樣になつたら嘸よろしからうと存候深田庚算(原)が獨乙から手紙にて僕の作物を評したいことに文學論と其外の議論文の學界に未だ甞つてあらざりし所以を述べて精細なる批評を試みたいと申し來候。かゝる人がかゝる態度にて拙著を取扱つてくれるのはまことに心嬉しきものに候。もし夫れ大町桂月君の夏目漱石論に至つてはいくらほめられても小生の爲にも批評界の爲にもならぬ事と存候委細は拜眉を期候。うれしき故一筆御禮を申上置度と存じ此ふみ入御覽候一日も早く批評拜見致し度と存候中には隨分手痛き所も有之べく夫は承知故可成堂々とあゝやつたりやつたりと云ふ風に立派に眞の批評らしく御やり被下度候　以上

十一月十五日

草平先生

金之助

七二三

十一月十八日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓讀賣の白雲子の事抔でわざ〳〵端書を寄こす必要があるものか寄こすなら御笑ひ草として寄こすべし。あれで胸糞がわるくなると申すは讀賣新聞自身に云ふべき事なり讀者は面白がつて然るべき論文也。

あの白雲子なる人はかつて僕の處へ話をきゝに來て僕が玄關先で返(原)した趣味の男の由。至つて大人しい口も碌にきけさうもなき神經質の男也。それだからあゝ云ふ事をかく。あゝ云ふ男が相應の學問をしないであゝ云ふ事をかく時は少し氣が變になつて居る時分である。恐るべき事だ。あの人は生涯あれで蒼い顏で苦しんでさうして人から馬鹿にされて死んで仕舞ふ　穴賢

十一月十八日

豐隆樣

金

七二四

十一月十八日　月　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ　〔はがき〕

昨日は御馳走になりました私は廿二日入場の文藝協會の演藝會の特等の招待券をもらひました。(壹圓五十錢)あなたはもらひませんか。もし行くなら一所に行きませう。一人ならそんなに行き度もない

七二五

十一月十八日　月　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目一番地戸田方
松根豐次郎へ　〔はがき〕

昨夜君の處へ行かうと思つたら途中で虚子と牛肉を食つて遲くなつてやめにした。不愉快ださうで御見舞に行く所であつた。讀賣を君もよむと見える。何と思つてあんなものをかいたのかな。氣の毒な

七二六

十一月二十四日　日　使ひ持參　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓明日上田敏氏送別會にて午後四時頃迄に上野精養軒へ參り候につき甚だ御迷惑ながら例のもの「朝日」社にて御受取置被下度行きがけに頂戴に立ち寄り可申候

右御依頼迄　匆々頓首

十一月二十四日

豐　隆　様

七二七

十二月二日　月　牛込區早稲田南町七番地より　下谷區谷中清水町五番地橋口清へ

金之助

拜啓其後御無沙汰拙作表紙も御蔭にて出來上り候由春陽堂より承はり御手數の段奉謝候

偖當夏中願上置候大塚楠緒女子著「露」愈出版の運びに至候に就てはかねての通表紙模樣御面倒ながら御認め被下度願上度候

此手紙持參の人は萬朝記者本橋氏にて卽ち該書出版者に御座〔候〕へば御面會の上可然御協議被下度候先は右用事迄　匆々不一

十二月二日

橋口清様

夏目金之助

七二八

十二月九日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上八重へ　〔はがき〕

玉稿二篇とも拜見。「紫苑」は少々觸れ損ひの氣味にて出來榮あまりよろしからず。「柿羊羹」の方面白く候。是も非難を申せば吉田さんが不自然の自然に出來上つて居り候へども、大體の處桔梗（原）に御座候。いづれを新小説いづれをホトヽギスとなると私にも判斷がつき不申候。たゞ柿羊羹の方が上等の代物と覺召し御取計可然候　以上

七二九

十二月十日　火　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館鈴木三

重吉へ　〔はがき〕

小説を御脱稿のよし大慶不過之候。樗陰は有卦に入り可申候。小生も三十日つゞきのものを只今たのまれた許りに候。小説と行かなくても三十日はつゞける義務が出來候。可相成は二十九日位で御勘辨を願はんかと存候。御風邪の趣折角御養生專一に候。小子奥方も風邪にて伏せり居候。從つて御見舞にもあがりかね候。羊羹は勿論の事御あきらめ可然候。八重子さんは小説を二つかき候。新小説とホトヽギスへ出す由に候。風呂が洩りて湯がたゝぬ由。何だか湯に這入り度候。風が吹き候。存外あたゝかに候。地震も有之候。

十二月十日

七三〇

十二月十三日　金　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓乙骨三郎君の美學の論文の載つてゐる哲學雜誌(近刊のもの二冊)今度御出の節本郷にて御求め御持參願上候　以上

七三一

十二月十六日　月　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

ケラーの小説を十圓で御求めの由ケラーと〔は〕何者なるや一向存ぜぬ名前に候。近頃は妙な名前がポツ/＼出て來て時々寐耳を驚かし候よくなき事に候。クツの紐御求め被下候由、哲學雜誌も御買被下難有候。小生矢張り執筆中。毎日二三回かく豫定

文債に籠る冬の日短かゝり

七三二

十二月十八日　水　午後四時—五時　牛込區早稲田南町七番地より　神奈川縣小田原在早川村淸光館林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

御轉地〔の〕よし精々御養生可然候もし手紙を出す氣分でも出たらひまな時御送被下度候。何でも氣を長く平氣に御暮し可被成候。小生執筆にて多忙。東京は寒く候。御地は如何。風を引かぬ樣御注意あるべく候　以上

七三三

十二月二十二日　日　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

毎度用事を御たのみ申相濟まぬ事と存候御禮は此世では六づかしき故いづれ未來にてうんと可仕候故氣を長く御待可被下候。フオルケルトは隨分高いね。讀まなければ莫大な損だ

七三四

十二月二十四日　火　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

啓上社へ俸給をもらひに行つてくれる時は預けてある見とめの印を持て行く方安全に候。今日の平凡の御糸さんはうまいね。あゝは中々かけないよ　以上。

二十四日

七三五

十二月二十八日　土　午後五時―六時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓又銀行へ御使を願ひたいものですが明日午前中に可成早く來て頂きたいですが。どうも恐れ入ります。

明治四十一年

七三六

一月八日〔？〕　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓また御迷惑ながら明日早く來て野田先生の處へ原稿をもつて行つてくれ玉はぬか。「坑夫」は諸君子妨害の爲一向不進歩

七三七

一月十日　金　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より　麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

昨日は失敬斑原女には大弱り〔に〕弱り候。偖本朝本間久と申す人別紙原稿をよこしホト、ギスか中央公論へ周旋してくれぬかとの依頼故先づ以て原稿を供貴覽候御氣に入り候はゞ御掲載の榮を賜はり度候

本人の申條に曰くある雜誌記者曰く本間久は翻譯ばかりして創作は出來ぬ男だと是に於て此作ありと、即ち敵愾心の結果になれるものと覺候

原稿の價値は大したものにあらず少々物足らぬ樣也然し折角の希望故御紹介致し候　以上

正月十日

虚子方丈下

金

七三八

一月十日　金　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

拜啓又御願が出來候。今日坑夫氏來り又話を聞いたら僕の間違を發見した。シキと申すのは坑の事を、銅山の構内と思ひ違へて無暗に使つたから、大に恐縮して正誤しやうと思ふんだが、君もう一遍九浦先生の所へ行つて原稿を持つて來てくれ玉へ。尤もシキと云ふ字の出初めは銅山へ着したすぐ前からだから此間の原稿の仕舞の方になる。同數ぢや一寸分らないが、何でも長藏さんが坑夫に向つて「左りがシキだよ」と云ふ所がある。そこからさきを貰つてきてくれゝばいゝ。是は仕舞の方だから一寸持つて歸つても野田君の迷惑にはならない。それから、すぐ直して又持つて行つてもらひたい。どうも度々君子を煩はし奉つて恐縮千萬

七三九

一月二十日　月　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

拜啓御惠投の鑵詰今日着段々の御好意深く奉鳴謝候小子疎慵常にいづ方へも御無沙汰ことに舊

臈より例の小説をたのまれたる上三女とも病氣にて病院開業の有樣ほとんど閉口今以て看護婦を一人頼み居候始末厄介無此上候大兄も御病氣の由然し大した事にも無之趣先以て安心然し御養生專一と存候淺井畫伯は惜しき事致候小生いつか同君の水彩を楣間にかけ度と存居候ひしにまだたのみもせぬうちに故人となられ候。家がないから畫などたのんだつて駄目だと思つてるうちに畫の方が駄目に相成候。同君歸朝後の事業半途にて遠逝畫界のため深く惜むべき事に候不折もよろしからぬ由心痛致候小生も本年は四十二の厄年故どうなるか知れず。例の胃もよろしからず候

御惠投の鑵づめは平生參り候諸君子へすゝめて一餐の快をともにする積に候

坑夫かき上げる迄は氣がせいてなまけてゐながら忙しく困居候

先は右御禮旁雜況迄　匆々頓首

正月二十日

渡邊様

金

七四〇

一月二十二日　水　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より　小石川區久堅町七十四番地菅虎雄へ

拜啓其後は御無沙汰小説がまだ濟まないんで何處へも出ない。時に僕例の胃病で一寸醫者に見てもらつたら小便を試驗して是は糖分があるといふコイツには參つたね。それで自宅には器械がないから糖分ノベルセントを大學で調べてもらつてくれろといふんだがね。僕の療治法は其ベルセントで極るんださうだ。そこで色々頼む人も考へればあるが君の親類の人に見てもらつてくれ

ないかな。承知して呉れるなら時間と日どりを極めて小便をビールの瓶に入れて大學へ持たせてやる早い方が此方の便宜だ否や御廻答を願ひます

それから去月から病人ばかりで今は小供が口腔炎とかいふものを煩つて口が腫れてヒー／＼泣いて氣毒でたまらない。此泣聲をきくと小說が一枚も書けなくなる。そこへ妻が寐ちまつた。仕方がないから看護婦を二人又雇つた。それでも雇へる丈が幸福だ

君のうちの病人は如何御大事になさい　以上

二十一日　　金之助

虎雄様

七四一

一月二十四日　金　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より　芝區高輪南町三十番地中牟田方中村蓊へ

拜啓先日は失敬。三四日前小生方へ別封をよこしたるものあり書中の人は君の近所のもの故入御覽候。尤も新聞の種になるや否やは知らず候　以上

二十四日　　金之助

中村蓊様

七四二

一月二十六日　日（時間不明）牛込區早稲田南町七番地より　下谷區西黒門町二丁目一番地高橋方市川文丸へ

拜啓先夜は失禮其節は好物御持參御蔭にて諸君子一夕の歡を添へ申候十和田山諸景寫眞數葉是亦御親切に御寄贈難有御禮申上候豐年祭は面白き事と存候出來るなら御供致し度然し種々用事も控居候事故是非の御約束も仕かね候先は右御禮迄　匆々頓首

一月二十六日　　夏目金之助

市川文丸様

七四三

一月二十八日　火　午後二時—三時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

拜啓別紙の樣なものゝ捌き方をたのまれ候

もし慈善兼御保養の御覺召もあらば御出被下度候。もし御いやなら其儘御打棄置願上候

岐阜訓盲院といふ小生友人の父なる人の創立せるもの此男中年明を失ひ此事業に從事。今回の事はおもに其薫陶を受けたる人の發起に候。先は用事迄　匆々

一月二十八日　　金之助

渡邊和太郎様

演藝會は六日八日の兩日のよしこゝろみに兩日の分二葉宛差上候もし御入用ならそれを御取

りあとは御都合にて小生方へ御返し被下るか又は賣りつけて被下候へば猶難有候

七四四

二月一日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三へ

拝啓本日は久々にて參上致候處御留守にて不本意千萬に存候玉稿薄謝ながら社より封の儘相屆候につき御査收願上候

夫から例の朝日文學欄につき玄耳氏と篤と相談致たる處此三四月に至り紙面擴張の意見實行出來れば附錄ごとに文學もの入要なれどそれまでは閑文字の入れ所なき由に候

小生も右文學欄の出來るのを待ち居候へども是は單に編輯者の一存故主權者の方ではどうなるやら分らず候

もし左樣の改革も實行出來候曉には先日御話しの通小生知人に依賴面白きもの書いて頂き度と存じ居候其節は是非御盡力相願度と存候

先づ夫迄は小生は先日申上候位のナマニエの體で打過ぎる了簡故大兄も御投稿は一先づ御控え被下度候

先は右用事迄　匆々

二月一日

秋骨老兄

金之助

御令閨より拝聞の上歸途横井氏の門内に這入り申候未だ赴任なき由故遠慮して家のなかは見ずに參り候

七四五

二月四日　火　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區大久保余丁町馬場勝彌へ

拝啓本日趣味を一寸のぞき候處例のリードルの件と思ひの外小生の人格に對し大々的御辯護の勞を辱ふし甚だ嬉しく候實は小生も云へば云ふ事はいくらでも候へども白雲子なるものゝ態度傍若無人故相手になるのを差控へ候始末。然しあれに對しそれ程の御同情を得んとは存じも寄らず。一兩〔度〕御目にかゝり候のみにて小生の心事深く御承知なき昨今別して知己の感に堪へず。茲に謹んで御禮を申述候

先日御紹介の早稲田學生に面會來意も判然其うち御邪魔にまかり出度と存候先は右迄　匆々

二月四日

孤蝶樣

侍曹

金之助

七四六

二月四日　火　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎へ

拝復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まとめ願上候

虞美人草は既にとくの昔より一冊も無之先般御申込の節も既に出拂の姿に候へばあしからず
夏目漱石論が來月の中央公論に出る由聊か恐縮致候。先達中より大分漱石論が出で申候。もう澤山に候。出來得べくんば百年後に第二の漱石が出て第一の漱石を評してくれゝばよいとのみ思ひ居候
坑夫御氣に召さぬ由已を得ざる次第に候。九十六回にて完結致候尤も東京朝日では祭日休刊を補ふ爲め二回一所に載する事ある故九十三回位にて終る事と存候　先は右迄

二月四日　　夏目金之助

瀧田樗陰様

七四七

二月五日　水　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　神奈川縣大磯角半方渡邊和太郎へ　〔はがき〕

拜啓御病中をも顧みず御無禮の事相願恐縮の至。大磯では例の切符も何の御役にも立つまじく甚だ御氣の毒に存候。昨今の御模樣如何に御座候や。折角御養生專一に候。先は御禮迄　匆々頓首

七四八

二月七日　金　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區早稲田南町四番地森卷吉へ

啓上
御老人御逗留定めて御多忙の事と存候例の切符は先方の人大磯へ病氣療養の轉地中にて賣り損へり。然し御愛嬌に一枚は買つて呉れ候。小生も一枚頂戴致候
土曜には參る筈なれど小宮が行きたさうだから切符をやり申候あゝ云ふ處は若い人の方が出席する資格多きかと存じ割愛致候
此次の木曜に寶生氏を頼む積なり。尤も三時頃からみんなが來て遊ぶ由御出待ち候
切符代は大磯より爲替のまゝ差上度どうか御面倒ながら御受取願度夫から小生の分は現ナマにて封じ入候御落手願候
御老人へ御挨拶の爲め參上致す筈の處御混雜中と云ひ且つ御迷惑と存じ差控居候あしからず御容赦
先は右迄　匆々

二月七日　　金之助

森卷吉様

右の外に訓盲院の爲めに寄附金など御募りの計畫あらば多少は喜捨仕るべく又發起人として送附を受けたる切符四枚購買の義務有之ば無論あと二枚は受持可申御遠慮なく御申聞被下度候

七四九

二月七日　金　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

啓上謠本五冊わざ〳〵御持たせ御遣はし御懇切の段感謝致候小生萬事不案内につき御仰の通り寶生先生と相談の上御指定のうちを願ひ可申候今夜班女は少しにて濟む事と存候もし御都合もつき候へば御入來御兩人にて一番御謠あらまほしく候　先は御禮迄　匆々

二月七日

高濱様

金

七五〇

二月十日　月　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　芝區白金志田町十五番地野間眞綱へ

拜啓其後は御無沙汰小生も小説をかいて仕舞ふと共間にたまつた用事を片付けねば〔な〕らず片付けてゐるとあとからすぐ雜誌やら何やら追かけてくる實に身體丈は閑であたまは多忙を極めてゐるのでついどこへも出ずず昨日久しぶりで十二社へ行つて夫から銀世界を廻つて歸つて來た。梅は二三本開いてゐた。

妻君を國へ御歸しの由承知それで地方へ出かせぎの件も承知。小島へ依頼の件も承知萬事承知致候。是から此墨で手紙を十數通(端がきとも)かく。其内で小島氏へも認める所也

坑夫は面白い由面白ければ難有い仕合せ。虞美人草はわからぬ由是は少々困つた事也。もう少し賞めてもらひたい。高田が報知でほめてくれた。逢つた時よろしく願ひます。

今度の木曜に來るなら皆川君と來ぬか。(午後より)晩には寶生新が來て謠をうたつてみんなにきかせる筈。君謠がきらひなら仕方がない。

野村のうちは多勞御客があるさうだ　以上

二月十日

野間眞綱様

夏目金之助

七五一

二月十日　月　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　松山市松山中學校小島武雄へ

拜啓漸々春暖の候に相成候處愈御清勝奉賀候却説御知り合ひの英文卒業生野間眞綱事事情あつて地方へ出かせぎに參り度由にて大兄の三月限り松山を去らるゝ由を傳聞しどうか小生から其後任として推擧ある樣依頼致候につき御手紙を差上る事に相成候

もし大兄の退松が事實に候はゞどうか野間君を御周旋願度ものに候。同君は御存じの通の好人物學問も小生保證致し候。履歴は陸軍士官學校、明治學院其他の英語教師に候

先は右御願迄　匆々

二月十日

小島武雄様

夏目金之助

七五二

二月十日　月　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　神奈川縣小田原在早川村清光館林原(當時岡田)耕三へ

拜啓過日御出京の砌は御忽々にて失禮其節橋本醫士の診斷にては肺部に異狀もなき由何よりの事此上は頭の方を精々御療養御歸京相成度候小生の糖尿もさしたる事も無之比例は〇・二に候へば當分死ぬ恐も無之候。大いなる蒲鉾わざ〳〵御送難有御禮申上候來る木曜には諸君子弊廬に會する約あり一きれ宛みんなに振舞はんと存候先は右迄　匆々

夏目金之助

二月十日

岡田耕三様

七五三

二月十日　月　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ〔はがき〕

此次の木曜には諸君子三時頃參りてごた〳〵に飯をくふ由。晩には寶生氏美聲にて三山實盛を謠はれ候

二月十日

七五四

二月十六日　日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓青木健作氏論文拜見致候ホトヽギスへ掲載之儀は如何樣にてもよろしかるべきか是非共のせるべき程の名論文とも存じ不申然し載せてはホトヽギスの資格に害を與ふるとは無論思ひ不申候。昨日青年會舘にて演舌今日之を通讀問題が大に似たる處有之興味を感じ申候　以上

二月十五日原

夏目金之助

高濱老兄

七五五

二月十七日　月　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　芝區白金志田町十五番地野間眞綱へ

拜啓本日小島氏より返事到來一足違にて後任相きまり御氣の毒の由後任は深江種明の由に候。故に君がもし越後高田を望むならば小島よりすぐに掛合ふ故電報(可相成)にて小島氏へ依頼ある樣申來り候。萬〔一〕越後の校長深江を手放さぬか又は松山難治の爲め深江の方で辭退すれば直ちに大兄を推擧可致旨に候。先は右御答迄　匆々頓首

二月十七日

夏目金之助

野間眞綱様

七五六

二月十八日　火　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ〔はがき〕

拜啓「御隣り」拜見仕舞の方は頗る面白く候。惜むらくは前が左程にあらず。もつと詰めたら

どうだらう。然しあれでもいゝかも知れぬ

七五七

二月二十四日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

朝日の講演速記は未だ參らず如何なり候にやかゝりは中村蓊に候。金曜に鼓を以て御出結構に存候。湯望致候。ホト、ギスへ出す時には訂正致し度と存候。時間ガアレバアヽ云フ者デマトマツタモノヲ書キ度候

鼓打ちに參る早稲田や梅の宵

七五八

二月二十六日　水　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區西片町十番地畔柳都太郎へ〔はがき〕

啓新米は仰の方正しからんと存候御注意難有候講演會の筆記は朝日で出さなければホト、ギス四月號に出る筈です夫でなければ講演集を出すさうですが多分今度は講演集は出ますまい

七五九

二月二十九日　土　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大家楠

緒へ

拝復

夫から夫へと用事が出てくるので御無沙汰をして居ります。かねて願ひました小説は正月から掲載の筈の處色々な事情が出來上りまして私が大阪の方へかく事になり夫を東京へも載せる事になりました。夫が爲めあなたの方も夫ぎりに放り出して置いた譯で甚だ申譯がありません

一週間程前社の玄耳といふ男が旅行から戻りまして面會の上あなたの小説の事に就て同人も心配してゐましたんで相談の結果近日社から人を御宅へ出して改めて願ふ事に致して置きました。其時同人の話では書きかけて下さつたのは家庭ものだらうか夫ならば繪入の方へ出しても御承知下さるだらうか、又一ヶ月もあれば纏まるだらうか抔と申して居りました。

右の譯でありますから御葉書を玄耳の方へすぐ廻して社のものを御宅へ伺は〔せ〕る事に致しますから、原稿の方はどうか御已めにならずに御繼續を願つて置く方が結構だらうと思ひます　先は右御返事迄　匆々不一

二月二十九日

大塚様　　金之助

七六〇

三月八日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目五番地春陽堂内本多直次郎へ

拜啓甚だ勝手がましくは候へども虞美人草再版印税來る拾壹日までに御屆け被下間敷や御願申上候也。

三月八日　夏目金之助

本多直次郎樣

七六一

三月十二日　木　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より　芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ〔はがき〕

拜啓野間の郷里の郡、村、番地御面倒ながら一寸至急御しらせ願候　以上

十三日

七六二

三月十三日　金　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

今日の俳諧師は頗る上出來に候。敢て一葉を呈して敬意を表す　頓首

三月十四日

七六三

三月十六日　月　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

藪柑子先生「伊太利人」と申す名作を送り候。木曜に御出なければ締切に間に合ふ樣取りに御寄こしか、此方より御送致す事に致候。小生演說は明日位から取りかゝる考に候。今夜御都合にて〔一字不明〕衣御懷中可然候

七六四

三月十六日　月　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館鈴木三重吉、小宮豐隆へ〔はがき〕

拜啓此次の面會日は休日に致候につき御光來被下間敷候。　頓首

三月十六日

七六五

三月十六日　月　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ〔はがき〕

拜啓此度の木曜は面會日を休日と致し候につき御出被下間敷候　以上

三月十六日

七六六

三月十七日　火　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ
〔はがき〕

拜啓講演をかきかけて見ましたら中々長くなりさうですがよろしう御座いませうか

七六七

三月十八日　水　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　小石川區原町十番地寺田寅彦へ
〔はがき〕

日曜の音樂會には行きたいと思ふ。フロックコートを着て新らしい外套を着て行きたい。切符御求願候。待合せる時と場所御報を乞ふ。ホトヽギスへ掲載の演舌書き直して見ると中々長くなり骨が折れさうな。萬一出られねば前日迄に斷はり狀を出し候。但し切符代はどちらにしても小生擔任の事

七六八

三月十八日　水　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ
〔はがき〕

ものうき爲め人間謝絶の處又々金を借せと申すもの出來候甚だ御面倒ながら銀行へ御出被下間敷や。

勝手のとき丈は御光來を仰ぐ次第に候　以上

七六九

三月十九日　木　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜復ページ數相分り候とよろしく候へども未だ判然不仕定めて御迷惑と存候が、いくら長くてもよしとの御許故安心致、可相成全速力にて取片附一日も早く御手元へ差出し度と存候。

御風邪未だ御全快無之由存分御大事に願候。本日の面會日は謝絶致候。近來何となく人間がいやになり。此木曜丈は人間に合はずに過ごし度故先達失禮ながら御使のものに其旨申入候。尤も謠の御稽古丈は特別に御座候。呵々

鏡花露伴兩氏の作只今持ち合せず。草迷宮は先達て森田草平持ち歸り候。玉かづらは最初より無之候。

近日來の俳諧師大にふるひ居候。敬服の外無之候。益御健筆を御揮ひ可然候。　以上

三月十九日

虚子　様　　金之助

七七〇

三月二十四日　火　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

出來るならば一欄に組んで頂きたいと思ひます
題は創作家の態度と致して置きませう。
拜啓多分明日は出來るだらうと思ひます。十九字詰十行の原稿紙で只今二百五十枚許かいて居ります。多分三百枚内外だらうと思ひます。明日書き終つて、一遍讀み直して、差し上げたいと思ひます。何だかごた〳〵した事が出來て、少々ひまをつぶします。頭がとぎれ〳〵になるものだから大變な不經濟になります　頓首

二十四日

虛　子　様

金之助

御風邪は如何で御座いますか。

七七一

四月四日　土　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

〔はがき〕

御病氣の由精々御大事に可被成候近頃の風邪はチフスに成る傾あるとか承り候。尤も東洋城の云ふ事故あまりあてにならず候。全快の上可成早く論文御片付可然候　以上

七七二

四月五日　日　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎へ

拜啓先日は失禮其節御話しの鹿兒島高等學校教師の件につき小生は文學士野間眞綱を推薦致し候がもし大兄の方へも聞き合せ參り居候へば何卒同人御周旋願上度本人は第五出身にて至極の好人物且篤學の人良教師として高等學校の先生として耻かしからぬ事は受合候。目下同人は鄉里鹿兒島へ歸省中。小松原氏へも其旨相通じ置候間右御含の上宜敷御取計願度候。一寸參堂の積の處毎日々々何か事が起りつい〳〵容易に出られぬ事に歸着致候　以上

四月五日

芥　舟　老　兄

金之助

七七三

四月五日〔四十一年?〕　牛込區早稲田南町七番地より　下谷區中根岸町三十一番地中村鉾太郎へ

拜啓其後御無沙汰無申譯候
偖小生知人二宮行雄より鄉里のものゝ碑文揮毫方を大兄に御依頼致度につき小生より紹介致し呉れ間敷やとの希望につきもし御寸暇も有之ば此手紙持參の人に御面會の上御高教賜はり度候右用事迄餘は拜顏の上萬々可申述候　以上

四月五日

中村不折様

座側

夏目金之助

七七四

四月十二日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内
中村蓊へ

尊書拜見ホト、ギスは五部程もらひたれど來る人がみな持ち去りて只今一部餘り居るものを昨日芥舟先生に進呈する約束をしたる故今は小生の分(誤植を正したる)ものゝみ手元に有之。折角故社の方へ申しつかはし可申然し殘部あるや否や分りかね候間其邊は御容赦を願候。夫から毎月送る事については是迄僕が二部宛もらつて居るから其一部を君の方へ廻す事にしたらよからうと思ひ候是も社の方へ依頼致し置候

森田先生は一昨日小生方を引き拂ひ下宿したり。牛込築土八幡前町二十四植木屋方に候。是は同學の高辻法學士の寓居にて同君が親切に自分の方へ來いといふからにて候。こんな時には趣味嗜好の友達よりも人間としての友達の方が有益なるものと被存候高辻氏は基督教のよし但し文學は一切知らぬ男なるべし

春雨蕭々日來小閑を得て二三無沙汰見舞をなし居候大阪の素川氏又々來阪を促がす中々上方の花抔を見て居る譯に參らず候

先達てある書生が書を寄せて漱石の小説はまとめて讀むべきものなり新聞にて日々讀めばつまらぬ故漱石の名を損するのみ早く退社せよとありたり。小生も至極御同感に御座候。然し退社して單行本ばかりでは食へないから矢張り新聞小説をかく積りに候。

同書生又曰くよろしく悠々自適の生活を送るべしと。是も至極贊成に候。然し金をやるからとも何ともなきのみならず本人自身大の貧乏書生にて文を賣る口を周旋してくれと云はぬ許りの口吻也。小生此人に朝日新聞の小説欄を讓るべきか。呵々

四月十二日　　夏目金之助

中村蓊様

七七五

月日不詳　牛込區早稲田南町七番地より　讀賣新聞社へ　〔四月十五日『讀賣新聞』より〕

好む飲料は別段無之候。只朝毎に鹽水をコツプに一杯飲み候。

人がやつて見ろと申した故に候。處がやつて見ろと申す程の効能も無之樣子故近々やめやうかと考居候。

夏目金之助

七七六

四月十七日　金　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　青森縣北津輕郡板柳村安田秀次郎へ

尊書拜見致候拙著御愛讀被下候趣難有存候御手紙の次第委細承知致候面白からんと思ふ人に逢へば却つてつまらぬものに候。然し折角の御希望御序の節は御立寄相成度候小生都合は毎木曜日

（面會日）よろしけれど遠方よりわざ／＼の御出ならばいつにても在宅の節は御目にかゝり可申候
此手紙到着の節は既に東京表へ御出立の後と存候へども仰せに任せ折返し御返事如此に候　以上
四月十七日夜八時半　夏目金之助
安田秀次郎様

七七七

四月十九日　日　午後八時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區金助町二十七番地清秀館安田秀次郎へ
〔はがき〕
御手紙只今拜見明日御出被下候て差支無之候右御返事迄　草々頓首
四月十九日八時

七七八

四月二十六日　日　午前（以下不明）牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豐次郎へ〔はがき〕
春色到吾家
おくれたる一本櫻憐也
南風故國情
逝く春やそゞろに捨てし草の庵

右御採用にはなりませんか

七七九

五月六日　水　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方
野上豐一郎へ〔はがき〕
端午の贈物難有存候。薫風南より來つて日々無腸の鯉をふくらます。天下の新緑又愁人の眼をよろこばしむ。多謝々々

七八〇

五月六日　水　午後六時—七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ
拜復
あの女はほかに行く處がきまつてゐる由御失望御察し申候へども一方にては大いに賀すべき事に候學校を卒業もしないうちからさう萬事が思ひ通りに運んでは勿體な過ぎますさうして人間が一生グウタラになります。勝者は必ず敗者に了るも〔の〕に御座候。ことに金や威力の勝者は必ず心的の敗者に了るが進化の原則と思ひ候。先は右御祝辭迄　草々頓首
五月六日　金之助
豐隆様

七八一

五月八日　金　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島縣重富村平松野間眞綱へ〔はがき〕

御令閨御安產のよし奉賀候愈おとつさんの責任を生じ候事大事件に有之候。造士舘の方の成功を祈る

七八二

五月十一日　月　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒へ

拜啓御手紙拜見致候先月中より御病氣の趣始めて承知ことに御輕症にてはなき御容子切に御加養を祈り候。新聞の方御心配に及ばず小生どうせ一兩日中に澁川氏へ參る積につき面會の上萬事同氏へ相談可致置候につき御介意なく御療養可然と存候もし御轉地先にて御徒然の餘り御執筆の運にも至り候へば好都合と存じ夫のみ祈り居候

そらだきは文章に御苦心の樣に見受申候趣向は此後如何發展致し可申や御完結の上ならではと存じ凡て差控申候

藤村氏のかき方は丸で文字を苦にせぬ樣な行き方に候あれも面白く候。何となく小說家じみて居らぬ所妙に候然しある人は其代り藤村じみて居ると申候。あれも長きもの故萬事は完結後ならでは兎角申しかね候

さし繪御氣に入らぬ由殘念に候。然し普通の新聞さし畫はまああんなものぢやありませんか。轉地はどこへなさいますか。あんまり小田原近所だと却つて肺病に危險だからよせと醫者から云はれた人があります。あなたのは肺炎だから左程傳染の心配はないでせうがまあ可成安全な所へ入らつしやい。

此手紙は候文と言文一致の相の子のであります　頓首

五月十一日

大塚楠緒子樣　　金之助

一週間に一返手紙をよこせとか毎日よこせとか云つて無花果を半分づゝ食ふ所がありましたね。あすこが面白い。今迄ノウチデ一番ヨカツタ

七八三

五月十六日　土　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒へ

拜啓今夜澁川君から別紙が參りましたから御參考の爲めに御目にかけます。もし御都合であとが書く事が出來れば私も結構社の方も大喜に候。只今主筆池邊氏被參無理に御執筆を願出御心の通りのもの出來ねば御氣の毒であり且それが爲め御病氣に障る樣な事があつては濟まぬと申され居り候へば決して御心配には及び不申只私共の希望丈を申上るのみでありますから其積で御讀を願ひます　草々頓首

五月十五日夜　　金之助

大塚楠緒子様

七八四

五月十八日　月　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

啓

飛んだ夢を御覽になつたものに候。あんな夢はかいてくるに及ばず候。近頃の樣になまけて居ては駄目に候。もう少し勉强をなさい。

坑夫の校正は大抵にてよろしく候。少し位誤植があつても平氣に候。讀む人は猶平氣に候。

大塚さんのそらだきが好評嘖々の由社より報知有之先以て安心致候。池邊主筆曰くあれは中々うまいですねと。池邊主筆すらうまいと云ふ。讀者の歡迎するや尤なり。

追々短篇をちよい〳〵かく積りに候。

筆はルイレキの由度々御面倒に御座候。うまいものを食はせて夏は海岸へでもやらうかと存候

妻君未だ臥床困り入り候。いゝ加減に死んで呉れぬかと相談をかけ候處中々死なない由にて直ちに破談に相成候

サランボーと云ふものを讀み居候。瑰麗無比のものに候。中々うまいものに候。フローベルは兩刀使に候。エラク候。今夜寐しなに御手紙をかき候是も入らぬ事に候。只筆が持ちたくなつたからに候　草々以上

五月十七日夜

金之助

豐隆様

七八五

五月十九日　火　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　神奈川縣小田原在早川村清光館林原（當時岡田）耕三へ〔はがき〕

先日は失禮大阪の日曜附錄には蕪稿掲載なし多分此つぎ位に廻したるならん。病氣御大事に御療養の事。小生無異

五月十八日

七八六

五月二十八日　木　牛込區早稲田南町七番地より　麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓

此手紙持參の人は宮澤銀一郎とて俳道執心のものに有之よし今般四年がゝりにて俳諧辭書編輯を了へ大倉書店より出版につき大兄の序文もしくは校閲願度旨にて參上仕候につき御面倒ながら御面會相願度と存候本人は小生未知の人に候へども大倉書店よりの依賴にて一筆申上候たゞし大兄には運座の節一兩度御目にかゝり候由先は右當用のみ　草々不一

五月二十八日

虛子先生

金之助

梧下

七八七

五月三十日　土　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ　〔はがき〕

拜啓木曜には雨天にて御出無之。俳諧師頗る面白く候。十風が北海道へ行つてからが心配に候。あともどうかあの位に御振ひ可被下候。

七八八

六月三日　水　牛込區早稲田南町七番地より　松根豐次郎へ　〔大正六年二月二十日發行『濤柿』より〕

昨夜御出の時には少々無言の業を修しかけ居候爲め定めて無愛嬌の事と存候。談話は如何なる場合にても埒なきものに候。時々は相對無言の方遙かに面白く候。貴意如何にや。

短夜を交す言葉もなかりけり

七八九

六月七日　日　午前（以下不明）　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拜啓今回の演說再應御依賴なれど胸中無一物にて發展致し様も無之甚だ我儘ながら此次へ御廻し被下度候戸張岩村兩氏へ露伴氏でも加へたらば丁度よき時間と存候大塚氏辭退は如何なる譯にや殘念に候。

御斡旋の御都合も有之べくと存じ折返し御返事申上置候　以上

六月七日　　夏目金之助

中村蓊様

七九〇

六月九日　火　牛込區早稲田南町七番地より　高須賀淳平へ　〔六月十一日『國民新聞』より〕

（前略）俳諧師十風夫婦の段は敢て江湖に推擧致し度候女郎上りの細君の性格をかいて斯様に活躍せるもの明治にあつて正に空前に候而して其夫の十風なるものも亦非凡の出來に候。世間に振はぬのは情なく候世間が讀まないかと存じ候。俳諧師は筋の纏つた讀物にてはあるまじく三藏一代記の様なものなるべくと存じ候。小生視る所によれば今日迄の出來榮は二葉亭の平凡以上と存じ候。但し十風夫婦北海道へ參りたる今日小光とか云ふ女義太夫が十風の細君の如くうまく描き出さるゝかゞ問題に候。もし小光が面白く寫し出されたらば又ゝ三藏一代記中の好波瀾と存じ日々樂しみに愛讀致し居り候　以上

六月九日

淳平様　　金之助

七九一

六月十四日　日　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市山下町四百四十番地上村清延方野間眞綱へ

久々にて御手紙拜見鹿兒島の方は其後どうなる事と思つて居つた處漸く落着是で君も當分安心御親父も御都合よく大に結構　小松原氏も居る事だから萬事便宜だらうと思ふどうか强勉して學校並びに自分の爲になる樣に働らかれる事を望む。小兒が大きくなつた由小兒の大きくなるのは實に早いものでおやぢは毎日の樣に驚ろかされるものだ。僕のうちは惣勢五人で今年の末か來年正月頃には又生れるさうだ。かう毎年多事になつてはたまらない。人口を繁殖して御上に御奉公をする割には收入が增さないから、いかに憂國の士でも御奉公は考へものである。皆川には其後二遍逢つた。畔柳は喉頭結核にかゝつた。君も身體を大事にせんといけない。野村は氣樂らしい。あの男はからだ丈は大丈夫らしい。マードツクさんは僕の先生だ。近頃でも運動に薪を割つてるかしらん。英國人もあんな人許だと結構だが、英國紳士抔といふ名前にだまされて飛んだものに引かゝる。櫻島の溫泉に這入つて見たい。此間橋口の弟が歸省したが君には逢へなかつたさうだ。人吉迄滊車がかゝつたさうだ。玖摩川の沿岸の景色は定めて好いだらう。おとつさんが硯を呉れると云ふなら是非もらひたい。但し急がないから忘れない樣に御父さんに話して置いてくれ給へ年寄は萬事忘れつぽくつて困る。僕は野村に新婚の御祝をやらうと思つていまだに忘れてゐる。又其うち小說をかき出すといそがしくなる。先は右迄　草々頓首

六月十四日

眞綱　樣　　金之助

七九二

六月十九日　金　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ

〔はがき〕

拜啓御惠投のぜんまい到着難有候あれは水につけてふやかすものかと存候　以上

十九日

七九三

六月二十一日　日　牛込區早稲田南町七番地より　府下靑山原宿二百九番地森次太郎へ

先刻は失禮御依賴の發句二つ程短冊に認め入貴覽候御氣に入らぬ方を御捨て可被下候

右當用迄　草々頓首

六月二十一日

森　樣　　夏目金之助

七九四

六月二十一日　日　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社

内中村蕃へ

拜啓陽炎拜見頗る面白く候はやく後篇を御廻附あり度候愚見は御目にかゝりたる時可申上候わるロも申上度候。然しあれは紙上にて大喝采を博す小説に相違無之ひそかに君の成功を祝し申候もう少しハイカラに書くか洗錬して「春」の後を飾り度心地も致し候。委細は御目にかゝりたる時に譲り可申右不取敢申上候　以上

六月二十一日　　夏目金之助

中村蕃様

七九五

六月三十日　火　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豊次郎へ〔はがき〕

悼亡

青梅や空しき籠に雨の糸

六月晦日

七九六

六月三十日　火　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

今日の北湖先生磊々として東西南北を壓倒致し候には驚入候欣羨々々

五月雨や主と云はれし御月並

六月三十日

七九七

七月一日　水　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜復小光はもつとさかんに御書きになつて可然候決して御遠慮被成間敷候今消えては大勢上不都合に候。鼠骨でも今日の彌次郎兵衛の處は氣に入る事と存候。「文鳥」十月號に御掲載被下候へば光榮の至と存候十月なれば東朝へ承諾を求むる必要も無之かるべくと存候。文鳥以外に何か出來たら差上べく候へども覺束なく候。ドーデのサツフオーと云ふ奴を一寸御讀みにならん事を希望致候名作に御座候。俳諧師の著者には大いに參考になるだらうと存候

今日の能樂堂例により不參に候。明日御令兄宅の御催し面白さうに候。ことによれば拜聽に罷り可出候。小生夢十夜と題して夢をいくつもかいて見樣と存候。第一夜は今日大阪へ送り候。短かきものに候。御覽被下度候。盆につき親類より金を借りに參り候。小生から金を借りるものに限り遂に返さぬを法則と致すやに被存甚だ遺憾に候。おれが困ると餓死する許りで人が困るとおれが金を出すばかりかなあと長嘆息を洩らし茲に御返事を認め申候　頓首

七月一日

鮟鱇や小光が鍋にちんちろり

虛子先生
座右

金

七九八

七月四日　土　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓又餘計な事を申上て濟みませんが小光入湯の所は少々綿密過ぎてくだ〳〵敷はありません か。小光をも描かず小光と三藏との關係も描かず、云はゞ大勢に關係なきものにて只風呂桶に低徊してゐるのではありませんか。さうして其低徊がそれ自身に於てあまり面白くない。どうか小光と三藏と雙方に關係ある事で段々發展する樣に書いて頂きたい。さうでないと相撲にならない。妄言多罪　頓首

四　日

金之助

虛子先生

七九九

七月五日　日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

前文御用捨御尋ねの豐彦は勿論豐國の間違に御座候どうか直して下され

七月五日夜

八〇〇

七月十一日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜復

御ふさ〔さ〕んは異存はなからうと愚妻が申します。然し松根がもらひたひのですかあなたが御周旋になるのですか伺つてくれと申します。

御ふささんは妻のイトコです貧乏です。支度も何もありません。　以上

七月十一日

金

虛子様

八〇一

七月十二日　日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

又啓

あなたが此事件で歩を御進めになれば自然松根に直接意見をきく事になります。さうすると公

平を保つ爲めに私の方でも御房さんに其事を話さなければなりません。卽ちあなたの思ひつきで松根に向つて御房さんをもらはないかと口をかける由と通知するのであります。それで本人が否だといふたら直ぐ無駄な御骨折を御中止を願ひます。又異存なしと答へたら何分にも御面倒を願ひませう。只今愚妻留守につき歸り次第御房さんの考を〔き〕かせますから左樣御承知を願ひます　頓首

七月十二日

虛子先生

金之助

八〇二

七月十三日　月　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より　廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

拜啓國元よりの御手紙にて御歸國の處御親父の御逝去に間に合はず御心殘り無此上事と存候諸事御片付方嘸かし御心配と遙察致候御身御大事に暑中御厭ひ萬障を排し御奮戰の義偏へに願候委細は東京にて拜眉の上萬々可申述不取敢御弔詞迄如斯に候　以上

七月十三日

三重吉樣

金之助

八〇三

七月十四日　火　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸へ

謹白

「私は無教育でありまして到底高等の教育を受けた人の奧樣になる資格はありませんが——もう一年も仕事でも勉强して——」

御房さんがこんな事をもしくは之に類似した事を愚妻迄申し出たさうです。これに由つて之を觀ると謙遜の樣にもあり。いきたい樣にもあり。一寸分りませんな。然し否ではないんでせう。さう手詰に決答を逼る必要もないから愚妻はよく御考へなさいと申したら、御房さんはよく考へて見ますと申したさうであります。

右は小生の直接研究に無之候へども大體の見當は間違つた愚妻の報知とも思はれません

右迄　草々

七月十三日

虛子先生

金

八〇四

七月十八日　土　午前六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より　京都市室町通今出川下ル高畠內中村翁へ

拜啓御令弟突然御死去の爲め御西下の趣拜承嘸かし御愁傷の事と遙察致候乍然例の病氣にて長びきては御本人は無論大兄も隨分御苦痛の事と存候へば天壽にて早世被致候方將來の爲には却つて御都合かとも被存候

玉稿「春」のあとへ出す烏の後に相成候趣御經濟の方は夫にてよろしきや。小生は阪朝鳥居君の依頼にて九月初旬より掲載の小説にとりかゝる筈なれども原稿料其他にて大兄の御不都合を招く事あらば「春」のあとへは寧ろ掲載を望まぬ方に候。何れ其うち御歸京とも存じ候へば御面會の上諸事御相談致度と存候

先は右御弔詞旁當用のみ申述候　頓首

七月十七日夜　　金之助

中村蓊様

八〇五

七月二十一日　火　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より　麻布區山元町三十六番地小島武雄へ

啓上御尋ねの伊藤政市君につき皆川正禧氏より別紙の如き回答有之候故爲御參考入御覽候

先〔は〕當用迄　艸々以上

七月二十一日　　夏目金之助

小島武雄様

八〇六

七月二十一日　火　午後八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

要するにプロフエソーの批評はプロフエソーの人物の如きものである。自分が知らない水練の批評を講堂ですると同じである。彼はかれの力學をすぐ實際に應用出來ると思へり。それすら亂暴也。況んや其力學の頗る覺束なきをや

只今春陽堂來る。十六頁程多しと云へり

獨乙のプロフエソーは葡萄問答の様ナ愚論ヲシテ居ルノデハナキカ。

八〇七

七月二十三日　木　午前八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓別封花物語は寅彦より送り越し候もの中には中々面白きもの有之出來得るならば八月のホトヽギスへ御出し被下度候

新旅行小石川同心町の住人代稽古に參り候中々上手に御座候何と申す人にや大藏省へ隔日に宿直する人の由

修善寺は如何に候ひしや　頓首

七月二十三日　　金

虚子先生

八〇八

七月二十七日　月　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より　愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎へ

酷暑の砌愈御清勝奉賀候小弟無異碌々消光御休神可被下候。拙作御所望にあづかり汗顔只今東朝に「春」と申す長編掲載了のあとを引き受ける事に相成九月初より兩新聞に又々顔をさらす始末にて只今腹案を調へ中三四日中に執筆に取りかゝり度と存居候へども何だか漠然として取り留めなく自分ながら恐縮の體に御座候。掲載の上は何かど御助力にあづかり度と存候

近來俳句を作らず作らうとしても出來かね候。道後の溫泉へでも浸らねば駄目と存候

まのあたり精靈來たり筆の先

七月二十七日

霽月老臺

座右

金

八〇九

七月三十日　木　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　佐世保市港町四十一番地石井内鈴木三重吉へ

御手紙拜見東京の暑は大變なもので此二三日は非常に恐縮して小さくなつてゐる。夫でも堪らないから時々湯殿へ行つて水を浴びて漸く凌いで見たがすぐからだがほてつて氣が遠くなつて仕舞ふ。そこへもつて來てエルドマン氏のカントの哲學を研究したものだから頭が大分變になつた。どうかトランセンデンタル・アイに變化して仕舞たいと思ふ。

小宮からも手紙が來て君と停車場で落合つたとかいてある。何でも洋服屋の小僧に逆鱗してゐたとかいてあつた。小說をかゝなければならない。八月はうん／＼云つて暮す譯になるが、まあ命に別條がなければいゝがと私かに心配して居る。君の手紙や小宮の手紙を小說のうちに使はうかと思ふ。近頃は大分ずるくなつて何ぞといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出來た。

小宮ノ婆さんは達者なのださうだ。風邪でも引いて寐てゐて與れなければ折角歸つた甲斐がないと云つて來た。

藩主の弟が死んで今日は市ケ谷から染井迄香爐持に屋はれたと東洋城から云つて來た。今日は君大變な暑さだ。東洋城が途中でひつくり返りはしないかと思ふ。大方神主の服裝を着て行つたのだらう。神主の服に夏服があるかな。

あまり暑いから是で御免蒙る。　艸々頓首

七月三十日

三重吉様

金

八一〇

七月三十日　木　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

拜啓　道中の手紙も着の手紙も到着拜見。御婆さん御無事の由結構に存じます。第一銀行の株は其後又下がつた樣だよ。東京は熱い事夥だしい水を二三度浴びてゐる。明後日あたりから小說をかく。君や三重吉の手紙もことによつたら中へ使はうかと思ふ。

家内無事妻君の御腹は段々擴張。筆はブツ／＼が出來て貧民の餓鬼の樣である。猫が無暗に反吐をはいて始末がわるい。森田草平横寺町正何とか院へ轉居。東洋城香爐を捧げて御葬に染井迄行く藩主の弟が死んだのださうだ。

割合に蚊が少なくて凌ぎいゝ。夜此手紙と三重吉への手紙とそれからもう一本かく。

珍らしく近所で義太夫を語つてゐる。何だか分らない。負けない氣で謠でもやらうと思ふが一人では心細いから虚子先生を待つてゐる。　艸々

木曜の晩

金之助

七月三十日

豐隆　様

八一一

八月三日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ〔はがき〕

小説はまだかゝない。いづれ新聞に間に合ふ樣にかく。中々あつい。田舍も東京も同じくわるい人が居るのだらう。此分では極樂でも人殺しが流行るだらう。僕高等出齒龜となつて例の御孃さんのあとをつけた。歸つたら話す。小供が丸裸でゐる。どうも天眞爛熳として出來ものだらけだ。驚ろいた。

八一二

月日不詳　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内澁川柳次郎へ〔封筒なし〕

題名――「青年」「東西」「三四郎」「平々地」「原」

右のうち御擇み被下度候。小生のはじめつけた名は三四郎に候。「三四郎」尤も平凡にてよろしくと存候。たゞあまり讀んで見たい氣は起り申すまじくとも覺候。

（田舍の高等學校を卒業して東京の大學に這入つた三四郎が新らしい空氣に觸れる。さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接觸して、色々に動いて來る。手間は此空氣のうちに是等の人間を放す丈である。あとは人間が勝手に泳いで、自から波瀾が出來るだらうと思ふ。さうかうしてゐるうちに讀者も作者も此空氣にかぶれて是等の人間を知る樣になる事と信ずる。もしかぶれ甲斐のしない空氣で、知り榮のしない人間であつたら御互に不運と諦めるより仕方がない。たゞ尋常である。摩訶不思議はかけない。）　以上を豫告に願ひます。

金

澁川様

八一三

八月十九日　水　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

御書面拜見朝日への短篇遂に御引受のよし敬承御多忙中嘸かし御迷惑と存候然し是にて澁川君は大なる便宜を得たる事と存候

今日「三四郎」の豫告出で候を見れば大兄の十二日の玉稿如何にもつなぎの様にて小生は恐縮致候。全く大阪との約束上より出でたる事と御海恕願候。「春」今日結了最後の五六行は名文に候。作者は知らぬ事ながら小生一人が感心致候。序を以て大兄へ御通知に及び候。あの五六行が百三十五回にひろがつたら大したものなるべくと藤村先生の爲めに惜しみ候

昨紅綠來訪久し振に候。絽縮緬の羽織に絽の繻絆(原)をつけ候。なか〳〵座附作者然としたる容子に候ひし大兄を訪ふ由申居候參りしや。暑氣雨後に乘じ捲土重來の模樣小生の小說もいきれ可申か　草々

八月十九日

虛子先生

金之助

八一四

八月二十三日　日　午前十時—十一時　牛込區早稻田南町七番地より　名古屋市島田町田島道治へ

拜啓御惠投の雅印難有頂戴篆刻は御地有名の鐵筆家の由材は御親父の吉野より御持歸りの櫻の趣いづれも興味深く覺候永く机上にそなへ愛玩可仕、現に今朝も新着の洋書へ藏書印として一顆試み候。字体其他恰も石材の趣に候

只今三四郎執筆中例により多忙を極め候

殘暑雨後一段の威を加へ候やに存候御地の炎威如何に候や御攝養專一に存候、秋來又御目にかゝるべく萬事は期其節候草〻頓首

八月二十三日

田嶋道治様

夏目金之助

八一五

八月二十四日　月　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より　麻布區山元町三十六番地小島武雄へ

拜啓大谷繞石君今般金澤高等學校へ赴任相成候については其あとが明く樣子に候。眞宗大學京北中學東洋大學の三所に候。大谷君は後任周旋の委任を受け居らぬ由にて各自學校にて人撰中との事に候。御運動如何にや。右一寸氣づき候まゝ御通知申上候　以上

八月二十四日

小島武雄様

夏目金之助

八一六

八月二十四日　月　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より　府下巢鴨町上駒込三百八十八番地內海方野上豐一郎へ

此間は御出の處謠の稽古中にて御歸りの趣夢十夜の畫大仕事と存候今日冷氣にて少々意外に候。今年は夏の方がいゝ心地に候。秋がくるのがいやに候。

社から月給をもらひたいに付ては御ひまな時封入の名刺を以て京橋區瀧山町四の社の會社原へ行つて御受取を願度と存候。二十五日の午後が渡す日なれど今月末迄のうちにていつにてもよろしく候　用のある時丈使つて濟まぬ事と存候。小説如何なり候や。小生も折角苦心中。八重子様へよろしく　以上

八月二十四日

豐一郎様

金之助

八一七

八月三十一日　月　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓森田友人にて高辻と申す法學士が謠がすきで今度の日曜に僕の宅へ來て謠ひたいと申すよしに候。所が先生非常の熱心家なれど今年の正月からやつたのだから僕と兩人でやつたらどんな事に相成り行くか大分心細く候につき音頭取りとして御出が願はれますまいか。其上高辻氏は何を稽古してゐるか分らず小生の番數は御承知の通り共通のものがなければ駄目故旁御足勞を煩はし度と思ひますがどうでせう。此人は城數馬のおやぢさんに毎晩習ふんださうです。きのふも尾上に習ひました。尾上は中々うまい。

溫泉宿完結奉賀候趣意は一貫致し居候樣に被存候が多少説明して故意に納得させる傾はありますまいか。一篇の空氣は甚だよろしき樣被存候

三四郎はかどらず昨日の如きはかゝうと思つて机に向ふや否や人が參り候。是天の呪詛を受けたるものと自覺しとう〳〵やめちまいました

右當用に添へ御通知申上候　草々

二百十日

虚子先生

金

八一八

九月五日　土　（時間不明）牛込區早稲田南町七番地より　麻布區山元町三十六番地小島武雄へ

拜啓明治學院講師皆川正禧氏今般鹿兒島高等學校へ赴任につき後任として大兄を推擧する樣野間眞綱氏より依頼ありたる旨につきもし御希望も有之候へば芝伊皿子三五番地皆川正禧宛にて履歴書至急御送り相成〔度〕由に御座候先は右當用迄　草々頓首

九月四日午後

夏目金之助

小島武雄様

八一九

九月十一日　金　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市下龍尾町百九十一番地野間眞綱へ

拜啓皆川は立ち申候鹿兒島中學の教師として副島は如何に候や三次には氣候其他の關係にて在

任希望せぬことに先頃より持病とかにて郷里に歸省中とか申來候が目下もはや歸任せるや否や存じ不申。同人かねての志願に海岸にて暖かき所と有之便利は大分あしき樣なれど郷里にも近ければ如何ならんかと存候

右用事迄申入候　以上

九月十日

夏目金之助

野間眞綱樣

郷里の所は忘れたり

八二〇

九月十二日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目二番地山口方松根豐次郎へ　〔はがき〕

御安着を祝す。繪端書無數頂戴一々所藏まかり居候。小說を書いてゐる爲め返事を出さず候。エイ子百日ゼキ。其他の小動物悉く異狀アリ。草合出來一部獻上致度候。小宮歸着。大イニ紳士ヲ氣取リ居候。三重吉未ダ歸ラズ。三四郎マダ書ケズ

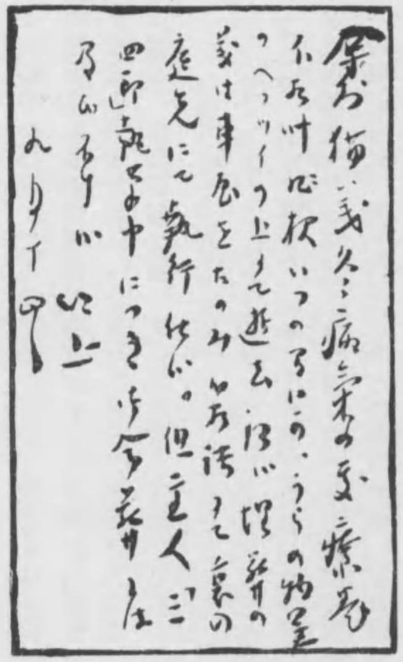
八二一

九月十四日　月　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目二番地山口方松根豐次郎へ　〔はがき〕

廣島市猿樂町鈴木三重吉へ　〔はがき〕

府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕



〔野上宛の端書には「……蜜柑箱へ入れて裏の庭先にて……」とあり〕

八二二

九月十六日　水　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　下谷區谷中清水町五番地橋口清へ

拜啓草合せ御蔭にて漸く出來御盡力奉謝候

表紙奇麗に且丈夫さうに見え候。結構に御座候
扉「坑夫」の方は甚だ面白く拜見致候へど野分の結婚の方は少々不出來と存候大兄御自身の御考は如何に候や。有體を申せばあの方は增版の時に何とか御再考を願はんかと我儘な事を希望致し候がどうでせうか
小説濟しだい參上御禮可申上候。
インキ壺の中の銀ツボ〔の〕義其道のものゝ説を承はり候處矢張腐蝕の憂有之由エナメルでも掛ける譯にはいかぬものにやもし御序も有之候はゞ御相談願上候。貢樣へよろしく　以上
九月十六日　金之助
橋口樣

八二三

九月二十一日　月　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　淺草區代地瓦町小山内薫へ〔はがき〕
啓先日は御親切に貴著「窓」御寄贈にあづかり難有存候拙作「草合」御禮のしるし迄に一部進呈仕度と存候小包にて差出置候間御落手被下度候　草々頓首
九月二十一日

八二四

九月二十九日　火　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　水戸市釜神町三番地菊池謙二郎へ

〔はがき〕
啓上
佳肴厨に來り青燈室を照す北人南人秋古今なり深謝
拙著草合春陽堂に托して御屆可申候御落手願上候
二十九日

八二五

十月〔?〕　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區本町三丁目博文館『中學世界』へ〔應問　十一月二十日發行『中學世界』より〕
小生の號は、少時蒙求を讀んだ時に故事を覺えて早速つけたもので、今から考へると、陳腐で、俗氣のあるものです。然し、今更改名するのも臆劫だから、其儘用ひて居ります。慣れて見ると、好も嫌ひもありません。夏目と云ふ苗字と同じ樣に見えます。

八二六

十月四日　日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕
Urban, Die Literarische Gegenwart 3,25
なるもの丸善ニ來レリ。

買フ氣ハナキカ

八二七

十月七日　水　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞文學部編輯へ　〔十月十日『國民新聞』より〕

啓、「專門的傾向」漱石氏談といふのを拜見致候處小生の話方惡かりし爲少し徹底せず何だかこんぐらかり候樣に存候が夫は迷惑にも無之候。唯其內に坪內さんは見當違ひの說を吐かれたといふ言語がある樣に候があれは坪內さんに對して失禮故御取消を願ひ度候。私は坪內さんとは少し反對だと申候。坪內さんが見當違だとは甞て申さず候。反對は小生の自由に候。先輩の考を見當違と言ひ放つは小生の敢てせざる所に候。それから序故もう一つ申候。イーツのものが危險だから出版せぬとあり候。イーツ程無害のものは無之候。出版少なきは賣れぬからに候。十月七日。

八二八

十月十二日　月　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ

先日は失敬御病人御變もなき由御大事に可被成候當分自炊の由隨分厄介な事と御察し申候
入院證御依賴の通捺印御廻送及候御受取可被下候
朝寒や自ら炊ぐ飯二合

十月十二日
豐一郎樣
金之助

八二九

十月十九日　月　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣成田町田中屋鈴木三重吉へ

愈御乘込のよし定めて御地は大賑の事と存候東京では成田へ行つたから成田屋あとみんなが申居候然るに住所は當分田中屋のよし。多分宿屋と存候。隨分酒を御飲過にならぬ樣願上候
小生八王子以來生活機能の降下を示し何にもたべる慾心無之。實は驚居候。然し每日一食位で事が濟めば結句難有ものに候。四十二の厄から生活組織一轉日々紅茶一碗を口にするのみ。それでも童顏ビン／＼して健康少年を凌ぐとか何とか後世の史家に書いて貰はうと思つて居る。エイ子熱が出て四十度になる四五日同じ事。何の爲の熱やら分らず。ゆふべは熱の爲の惡感を痙攣(クヰレン)と間違へて靑くなる。昨日は猫の三十五日に當る。細君鮭一切れと鰹節飯一椀を佛前に供す。筆子ヴイオリン入學。虛子近來木曜に來らず。文部省の美術展覽會は愚なり。和田三造の鐵工場見られざるぶる(原)なり。小說の方が畫より數等進步して居る。目出度／＼　草々

十月十九日
三重吉樣
金之助

いつか參らんと存候。御前樣(ゼンサマ)へ宜敷願上候。秋晴に印幡沼の鰻の居所を見てあるきたく候

八三〇

十月二十三日　金　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

啓寺田に聞いて見ました處小說集に名前を出す事はひらに御免蒙りたいのださうであります。序の事は本人は知らないらしかつた。然し厭でもないのでせう默つてゐました。一遍集めたものを讀み直した上の事に致したいと存じます　以上

十月二十三日

虛子　樣

金之助

八三一

十一月六日　金　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町紅養館林原（當時岡田）耕三へ

拜啓先日はわざ〳〵御來訪の處御遠慮にて玄關より御引取遂に不得御面語甚だ遺憾に存候其節の頂戴物正に拜受難有候御禮を申さうと思つた〔が〕君の宿所が分らぬ故其儘にして置き申候三女は腸チフスで一時は熱が高く弱つたれど只今は回復期に向ひまず安心に候家族が多いと始終何かある寧日なき有樣夫でも多數の人よりもまだ〳〵大分幸福の方ならん君も大分一身上の心配やらごた〳〵やらある由頭の具合近來は如何にや

草合せを上げやうと思つて居たが皆なくなつて仕舞つた。三四郎が本になつたら上げやうと思ふ。

右迄　草々

十一月六日

岡田耕三樣

金之助

八三二

十一月二十日　金　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區横寺町正定院内森田米松へ

〔はがき〕

今二十日の國民文學抱月君の談話を御覽下さい。君はブロツトを排斥してゐる。さうして「壁」に就ての自說を辯護してゐる。其辯護を煎じつめるとつまりブロツトが好いからと云ふ事に歸着しさうだ。どうぞ御覽下さい。

ロジカル先生閣下

八三三

十一月二十二日　日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　愛媛縣溫泉郡今出町村上半太郎へ

過日御來京の節はわざ〳〵御枉駕を辱ふし千萬難有候生憎例の多忙にて何の風情も無之失敬平

に御容赦被下たく候御惠送の砥部燒安着厚く御禮申上候。只今東京は日々好天氣にて小春の好時節に候。御地も定めて俳興多き空模樣ならんと遙察致候萬事期再會　以上

十一月二十一日　　夏目金之助

村上霽月　様

八三四

十一月二十三日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　千葉縣成田町横町黑川方鈴木三重吉へ

御手紙拜見仰の如く文學評論で大弱りの狀態しかもくだらぬ勞力故つく〴〵いやに成候此分には當分成田行も駄目に候。

東京は日々好天氣小春うれしき日向也。新小說は御見合せの由殘念に候。何でも書いたらよからうと思ひ候

草平氏相變らず煤烟に腐心。文壇の現況に憤慨來年は大いに評壇を賑はすと申居候、如何にや。横丁の先生もちと御奮發ありたく候。先日御能を久し振りにて拜見中々退屈のものにて候。其時秋聲君に紹介され候。子供まだ葬を離れず。細君の腹愈せり出せり。夫子フラネルの腹卷す。

右の條々迄

十一月二十二日　　金之助

三重吉　様

八三五

十一月二十九日　日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

今日は難有候ダヌンチオあらば買つていたゞき度候、紅葉狩は郵便で送り候

十一月二十九日

八三六

十二月十九日　土　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　千葉縣成田町吾妻屋鈴木三重吉へ

又々御轉宅のよし承知致候學校定めて御多忙の事と存候休みには泊りがけに御出京可然候。先達泥棒這入る。兩三日前赤ん坊生る。是にて今年も無事なるべきか。文壇紛々悉く是空洞の響なり。壇上の人亦遊戯三昧と心得て一生を了し得べし。馬鹿々々しき事を馬鹿々々しく思ひつゝ眞面目に進行さする事遊戯三昧の境に達せざる時は神經衰弱となり喪心失氣となる。天壽可惜。閑日月を抱いて離騷の計をなす。可ならずとせんや。　草々

十二月十九日　　金

三重吉　様

八三七

十二月二十日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

先達ての論文を出すなら新聞では到底載せ切れまい。雜誌がよろしからう。新らしく書くならば新聞でも差支あるまじ。

あんまり僕をたよりにすべからず自分の考を自分で書いて漱石何かあらんと思ふべし。早稲田のあるものゝ書いたものは驚ろくべく愚也。あれは生活難の爲に先輩の指導を受くる餘裕なきによる。あゝならぬ君は幸福なれど餘裕あるが爲に萬事僕に見せてからの何のと思案するは獨立心なき事なり。是でよいと自己で自己を極める分別ありたきものなり。

文壇に出る一歩は實際的ならざるべからず。今の愚なるものに分り易く、讀み易く、相手になる樣に見えて、侮りがたき思を起さしめざる可らず。從つて論旨は短からざるべからず、興味は時事問題ならざるべからず、其他色々の資格なかるべからず。之を重ねて行くうちに自から大いなる根底ある議論を出しても人が讀む樣にも耳を傾ける樣にも(今の樣に生活難と黨派心が盛では夫でも六づかしい)なる。始めから偉いものを書いたつて人は相手にしない。相手にするものは日本に五六人しか居ない。而して其五六人はみんな默つて相手にしてゐるのみである。

文壇に立つものはあらゆる競爭排擠に伴ふ墮落的行動に對して從容事を辨ぜざるべからず。もし清きを以て自ら居り高きを以て自から處せんとせば一日も留まるべからず。

文壇の諸公皆賢なるにあらず。又正なるにあらず。而して賢の如く正の如くに見せる術を日夜に講じつゝあり。憤るべからず。社會が胡魔化される程度にあるが爲なり。傍觀すべからず。社會は進む期なし。

今の文壇に立つものより生活難を引き去れ彼等の十中七八は喜んで文壇を引き上ぐべし。彼等は文壇に立ちながら苦悶しつゝあり。

君もし以上の諸件を承知の上ならば筆を執るも可なり。たゞ一時虚子の依頼にて出來心よりするは人魂のふわつく姿なり。夫にてもよし人魂を以て任ずるがいやならば始めから其覺悟をせざる可らず。

今の自然派とは自然の二字に意味なき團體なり。花袋、藤村、白鳥の作を難有がる團體を云ふに外ならず。而して皆恐露病に罹る連中に外ならず。人品を云へば大抵君より下等なり、理窟を云へば君よりも分らずや多し。生活を云へば君よりも甚しく困難なり。さるが故に君の敢て爲し能はざる所云ひ能はざる所を爲す。君是等の諸公を相手にして戰ふの勇氣ありや。君を此渦中に

引き入るゝに忍びざるが故に此言あり。　以上

十二月二十一日(原)

小宮豐隆様

夏目金之助

八三八

十二月二十二日　火　午(?)十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　宮崎縣宮崎郡宮崎町杉田作郎へ

拜啓御親父様御逝去の由遙かに御弔詞申上候。短冊切角とり紛れ今日迄其儘に致置候甚だ怠慢の至御容赦願上候。同封にて一句入御覽候久敷俳句をやめ居り句らしきものも出來不及候書は例の如くみくるしきものに候　以上

十二月二十二日

杉田作郎様

夏目金之助

八三九

十二月二十六日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓ホトゝギス昨廿五日と今二十六日をつぶし拜見諸君子の作皆面白く候。其中で臼川のが一番劣り候。あれは少々イカサマの分子加はり居候。他は皆眞物に候。

大兄の作先夜伺つた時は少々失敬致しよく分らず仕舞の處活版になつて拜見の上大いに恐縮あれは大兄の作つたうちにて傑作かと存候

猶向後もホトゝギス同人の健在と健筆を祈りて聊か茲に敬意を表し候。他の雜誌御覽なりや。どの位の出來か彼等の得意の處を拜見致度候　以上

十二月二十六日

金

虛子様

子供の名を伸六とつけました。申の年に人間が生れたから伸で六番目だから六に候。此間の旦は取消故併せて御吹聽に及候

ホトゝギスは廣く同人の小說を掲載すると同時に大いに同人間の論客を御養成如何にや。樂堂の舞踏談抔面白く候

八四〇

十二月三十日　水　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　名古屋市鳥田町田島道治へ

今度御上京以後不得拜眉殘念に候。過日は幸ひ小閑の處門口より御立歸り何とも失敬。其節の御短冊正に落手惡筆にて一枚書き損じ候故今日玉川堂にて似た奴を買つて參り候。發句は近來頓と作らねど何とも分らぬものを御望み通り書き可申候此間御贈印の御禮に草合せを差上度思ひしに御住所小石川と許にて一向分らず遂に其儘と致置候

目出度年を御取りなされ度候以上

十二月三十日夜

田嶋道治様

夏目金之助

明治四十二年

八四一

一月二日　土　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區市谷田町二丁目一番地馬場勝彌へ

〔はがき〕

恭賀新年

御病氣の由御大事に可被成候小生なまけてどこへも年頭に參らず、賀狀も返事を出す丈に留め居候。いづれ永日萬々

煤烟出來榮ヨキ様にて重疊に候

八四二

一月七日　木　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　青森縣三戸郡是川村市川文丸へ

拜啓御歸省中の由承知仕候定めて雪深き春を迎へられたる事と存候當地別に變りたる松飾もなく無事の正月に候

御惠送の山鳥一羽安着御芳志難有候先年の一夕を思ひ出し候來る人あらば又一椀の羹をわかた

んと存候

御用立申候金子については御心配御無用に候

寒氣烈敷砌隨分御自愛可然　草々頓首

一月七日

市川文丸様

夏目金之助

八四三

一月十日　日　牛込區早稲田南町七番地より　坂元三郎へ　〔うつし〕

病氣中長い手紙を難有う。長い手紙をかくのは難儀だが貰ふ方は面白いものだ。此間は妙な關係で敦賀に居る若い婦人から君の二三倍ある手紙を受取つた。是も面白かつた。昔し正岡抔と往來する時分には隨分ひまに任せて長い手紙のやりとりをした。今では忙しくてとても出來ない。此間も大阪から「原稿まだ出來ませぬか」といふ電報をかけられて大に狼狽した。新年の原稿さへ書けないのだから長い手紙は書けないのも無理はない。

高須賀が來たから君も病氣ださうだといふと何金病でせうと答へてゐたが矢張り本當の病氣の樣に見える一體どんな徵候なのかね。謠をうたふ位ならば大した事もないのだらう。がまづ〳〵用心し玉へ。高須賀が金山の話やら品川埋立事件の話やら何でも大分面白い話をして呉れたので新年に餘程變化のある世界を見た。そのあとへ僕の小學校の友達キーちやんなるものが何十年振かで尋ねて來て、是又鑛山の話をした。會津の奥で千二百萬坪の鑛區をかりて月々税丈納て居る。

時機を見て採掘をやるといつてゐた。扨から妙な石を出して是がその蛋白石だと敎へてくれた。隨分面白い人がやつて來る。一番陳腐なのは雜誌記者だらうと思ふ。主人公に何等の利益をも與へない。夫でもつて來て雜誌へ人のわるロを書く。會津の奥で蛋白石でも搜してゐる方が餘程氣が利いてゐる。

君の友達の話は中々面白い少し工夫したらば種になる樣に思ふ。わざ〳〵の御報知難有い。

水彩は全く廢止だから上げない。これで實は水彩に愛想をつかして書かないのぢやない。書くひまがないのだ。からだは病人の樣に机にばかりへばりついて、夫で頭丈火の車の樣に働らくべく餘儀なくされてゐる。文學も大きな世間を見渡すと窮屈千萬で人間がシミタレて、顏が蒼くなつて、胃病や腦病が起つてよくない樣だ。

今年は元日には謠はなかつた其代り大晦日に松根東洋城と二三番謠つた。八日に新が黑紋附を着て來て稽古初めをして呉れた。土車といふのはゆるしものださうだが是を少し敎はつた。

御產はあつた。母子共健全。申の年に生れた人間で六人目だから伸六とつけた。人間も半ダース子供がある樣では頗る時勢後れだ。一人が十分づゝ泣いても丁度一時間かゝる。八釜敷事甚しい。彼等の前途を考へると皺が寄りさうである。

申の年の子丈あつて頭に毛が眞黑に生えてゐる。四五年前生れた子は頭がはげて居た。姙娠中〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ちやないかと思つて大いに恐れを抱いてゐたら、漸く人間並に毛が生えて來た。妙なものだ。

雪が降るので火鉢を擁して此手紙をかく。夫から又原稿をかく。何でも夢十夜の樣なものとの

註文だから毎日一つ宛かいて大阪へ送る積りである。僕が原稿の催促を受けて書き出すと相撲が始つて記事が不足しない様になる。社の方では氣が利かないと思つてゐるだらう。　以上

正月十日　　金之助

坂元三郎様

八四四

一月十二日　火　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

拜啓昨夜寐る時下女が信書函からあなたの御手紙と雜誌を持つて來ました。手紙はすぐ拜見しました。坪内先生のも拜見しました。色々御事情のある事と御同情申します。私も別に主管してゐる雜誌のある譯でもなし夫から本屋に大勢力のある譯でもないから、こんな場合にはいつでも困つてゐます。然し御作を拜見した上で何とか御相談も致しませう。

只今は少々取り込んだ用事があつてゆる〳〵御作をよんでゐられません其上正月から用をしやうと思ふとはからぬ人に襲はれて無暗に時をつぶして仕舞ひます。是非やらなければならない大阪へ日々やる原稿をかくかかゝない位です。夫であなたのものを拜見するのももう少し待つて頂きたいがどうでせう

尤も木曜は面會日ですから何時でも御目にかゝります人がゐる時がいやなら朝のうちでも入らつしやい。

今日の午後御出の由だが右の譯だから出來るなら木曜にのばして下さい。木曜に入らしつてもまだあなたの作物は讀んでゐますまいが、兎に角御目にかゝつて御話丈は致します。御互に忙がしい切りつめた世の中に生きてゐるのだから御互に讓り合はなくては不可ない。隨分窮窟の至です。先は御返事迄　草々

十二日　　夏目金之助

飯田政良様

八四五

一月十三日　水　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓御預けの預金帳のうちで金五拾圓を明十四日受取り明後十五日高須賀君に御渡し被下度候

印形は封入致候

手紙は淳平氏持參致候

先は右御願迄度々御面倒相願恐縮致候　草々頓首

一月十三日　　夏目金之助

小宮豐隆様

八四六

一月十七日　日　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　神奈川縣小田原小峯梅林大久保神社内林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

暮から病氣がよくない由御大事の事。毎日人が來て時間を奪はれるので仕事をする事が出來ず閉口なり。胃病よろしからず。南方に旅寐して梅花を見たし

八四七

一月二十一日　木　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ〔はがき〕

拜啓石菖屋の婆さん拜見あれは破甕よりは數等上等の作、御進境、嬉敷存候。たゞ時々同材料を引つ張りスギテ、クドイ所あり。今少短カク隙間ナクスル方モ考ヘラルベシ。トニカク大體ニ於テ、此調子ハ本物也

八四八

一月二十四日　日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣成田町吾妻屋鈴木三重吉へ

御手紙拜見致候酒を御やめの事當然と存候、酒をのむならいくら飲んで〔も〕平生の心を失はぬ樣に致したし君の樣に一升にも足らぬ酒で組織が變つては如何にも安つぽくつてへら〳〵して不可ない。のみならずはたのものが危險不安の念を起す。

黑髮は何だか氣乘がしなかつた。君自身あきがきたといふ。夫が正しい所ぢやないかと思ふ。精々勉强して御互に書かなくては不可ない。

虛子へは序を以て貴意を傳ふべし　以上

二十四日

三重吉樣　　金之助

八四九

一月二十四日　日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社內中村蓊へ

拜啓煤煙が二三日出ない樣に候がどんな事情に候や。是迄朝日の小說は一回も休載なきを以て特色と致し候に森田草平に至つて此事あるは不審也。本人の不心得の爲とも存じ候へどもわけを一寸御報知願度君が一番森田に就て近い關係があるから御尋する。もし本人の不都合から出たなら僕は責任がある實に困る

中村蓊樣　　金之助

序に露國二葉亭の宿所を知らして呉れ玉へ

八五〇

一月二十六日　火　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

草平今日の煤烟の最後の一句にてあたら好小說を打壞し了せりあれは馬鹿なり。何の藝術家か

これあらん

八五一

二月三日　水　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎へ

〔はがき〕

拜啓文學評論原稿（活版に廻したるもの）413と414とつけたる中間一枚紛失致し居り。活版屋は夫に御構なく先を組み候。一先づ御とめ下さい。さうして搜して組直しを御命じ下さい。紛失と事が極れば新たに原稿を書いてあげます。（そこが片づかなければ、さきを直しても駄目だから校正を見合せます）

八五二

二月七日　日　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區横寺町正定院内森田米松へ

拜啓煤烟世間にて概して評判よき由結構に候。先日四方太は激賞の手紙をよこし候。然る所一から六迄はうまい。（其中要吉が寺へ行つて小供に對する所は少し變也）七になつて神部なるものが出て來て會話をする所如何にもハイカラがつて上調子なり。罵倒して云へば齒が浮きさうなり。どうか御氣を御付け下さい。病院の會話も然りあれでは病氣見舞に行つたよりもあゝ云ふ會話をやりに行つたやうなり否あゝいふ會話が出來る事を讀者に示す爲に書いたやうなり。頗るよろしからず。君もし警句を生かさんが爲に小説をかゝば顏の美を保存せんとて手術は御免蒙り夫が爲に命をとられる虚榮心強き婦人と同じ。警句が生きると同時に小説滅びる事あるべし。

切に注意ありたし。夫から田舍から東京へ歸りて急に御種の手を握るのは不都合也。あれぢや、あとの明子（原）との關係が引き立つまい。要吉は色魔の樣でいかん。

要吉は細君に對して冷刻なる觀察其他要吉の名譽にならぬ事をしたり云つたりする。五六行先へ行くと必ずそれを自覺して自己を咎めてゐる。是草平が未だ要吉を客觀し得ざる書き方なり。自己の陋を描きながら自から陋に安んずる能はずして一解ごとに辯解しつゝ進まば脈味にあらずして何ぞや。但し是は書き方にあらず寧ろ書き方の呼吸なるべし。御注意ありたし

四方太激賞の後二三日前出會す。彼曰く今迄大に擔いだが今更困ると。余曰く忠告すれば元氣沮喪しさうだし。忠告せざればます〳〵あんな風に會話をかくだらう困つたと。小宮もあの會話に不贊成なり。

たゞしあの會話も時と場合にて活きる事あらん。君の用ひたる時と場合にては全くうそ、その會話也。

右の條々御注意迄に申入候猶御努力可然候　草々

二月七日

草平　様

金之助

今日の所持ち直しの氣味なり

八五三

二月七日　日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信へ

拜啓其後は御無沙汰奉萬謝候當時不相變電車の如き生活毎日頭のみ忙がはしく御座候二三日來氣候も少々ゆるみ少しは春めき候〔へ〕ども氷はまだ張り候。北の方は嘸かしと存候。隨分御大切に御攝生可然と存候カキわざ〔〱〕御贈御厚意深く奉謝候。あれは先年も誰かゝら（四方太と氣がつき候。四方太のは鳥取の蟹で大兄のは金澤のかになるが味も鳥取と金澤との相違可有之か。風味の上批判可致候

御地仕事の模樣拜承外國人への御教授も面白きかと存候先日佐治秀壽の言にも其邊の消息有之。俳句は只今一句も出來ず。大兄は不相變御勉強。永日小品は面白いのと面白くないのと有之よしどうぞ參考の爲め面白いのと面白くないのとを指摘被下度候右不取敢御禮申上候　草々

二月五日　金之助

繞石兄　座右

八五四

二月八日　月　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

原稿は御希望通只今郵便にて春陽堂へ送り申候先方より其内諾否の返事をくれるやうにたのみ置候故其事がきまらぬうちは「町の湯」を外へ出す事は御控被成べく候。尤論の事なれど御注意迄に申上候。文章世界差上候

先は右迄　草々

二月八日　夏目金之助

飯田政良様

八五五

二月九日　火　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區青山南町六丁目百六番地坂元三郎へ

拜啓御尋ねの書物小生の記憶になしよく調べ又は聞き合せて御返事すべし。多分ないだらうと思ふ

死際といつても色々比較して何か一定の概括が出る樣なら面白いが到底出來まいそれに天才とはどんなものかきめてかゝらなければならない。それから死ぬ時の有樣の區別

(一)病氣　キーツ肺病。ニイチエ、モーパサン等氣狂、スキフオ同上輕病等

(二)天才使用の社會的結果。ナポレオン。ユーゴの島流し（是は死ニアラズ）。あらゆるマータヤ

(三)獨身　シオペンハワー（是も死際にあらず）

(四)楠正成、西鄕隆盛の類

(五)窮死チヤタートン

(六)放狂ゼルレーン等

其他色々になるべし。よく御考の上類別可然候。
煤烟のどこを見てそんな氣を起したものか。天才は塩原抔へは行かない方が多い樣なり。尤も
塩原行の天才もあるべしと云へど是は寧ろ例外ならん
御承知のロンブロゾーの「天才と狂氣」といふ本に特色が澤山かいてある但し死際はさう書い
てない　以上

二月十日

坂元　様

夏目金之助

八五六

二月十七日　水　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎へ

拜啓友人生田長江氏今般ニイチエの代表的作物ザラツストラ全部の翻譯を思ひ立ち候に就ては右出版の件につき貴堂を煩はし度旨依頼有之候につき御紹介申上候。どうぞ御面會の上御相談被下度候。此間の御話では翻譯ものはちと御迷惑の樣なりしもザラツストラは少部分竹風君によつて翻譯せられたるのみにてまだ何人も手を着けて居らぬ樣子故如何かと存じ一寸申上候　以上

二月十七日

本多直次郎様

夏目金之助

八五七

二月二十二日　月　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區元數寄屋町三番地太平洋通信サンデー發行所内安成二郎へ

昨日はサンデーへの談話の件につきわざ〳〵御來訪の處多忙中不盡其意遺憾に存じ候間あらためて手紙にて小生の考を申上候

近來雜誌に諸家の談話を掲載する事流行なれどあけて見るとつまらぬもの多く購買者は色々な名が行列して居るのでだまされて買ふと一般に候。甚だよろしからぬ弊風と存候。それからもう一つは青年子弟があんな馬鹿氣た談話を見て所謂文學者の談話意見とはこんなものかと思ひ込みたまはゞ骨の折れた研究に價する論文抔が出ても始めから面倒がつて眼さへ觸れぬ事に候。是は雜誌にも責任あれどはなす方にも責任有之小生は深く此無責任の談話をはづるの結果從來の行掛上不得已特別の關係ある雜誌にあらねばはなしを御免蒙る方針を立て候。それからもう一つは自分がいそがしくて一々雜誌記者に談話をして居る事が出來ぬのも源因の一つに候。時々談話に誤謬があつて人に迷惑を及ぼすのも源因に候。

右の諸事情からして一應御斷り致候譯なれど木曜に御出を願つて講釋をするがものはなく候故手紙にて右の主意を申上候。あしからず　馬場君へもよろしく　草々

二十一日

安成二郎様

夏目金之助

八五八

二月二十三日　火　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區元數寄屋町三番地太平洋、通信サンデー發行所内安成二郎へ

拜啓再應の御手紙拜見致候小生の特別の緣故ある雜誌と申すはホトヽギス其他二三從來の關係上已を得ざるものを指す意味に候。其他の雜誌はさきに申上たる理由にて今度より段々御斷わりを致さうと決心せる矢先故甚だ御氣の毒なれど談話は掲載の義は御容赦にあつかり度と存候。小生身心閑適にて充分自己の意見をまとめて一々訪問記者の御滿足に參る樣出來候へば始めよりかかる氣の毒な事は誰にも口外せずして濟む次第に御座候其邊は御承知被下度候　以上

二月二十三日　夏目金之助

安成二郎樣

八五九

二月二十四日　水　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

俳諧趣味とか俳句に對する君の考とかは默つてゐた方がいゝ。俳句を研究する人に任せべき事だ。夫より有益な大問題はいくらでもどろ〳〵してゐる。尤も特別の考あれば無異義。俳人何ぞ君の俳論ヲキクヲ要セン

八六〇

三月一日　月　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂へ　〔はがき〕

啓三四郎原稿校正は小宮氏に依賴の處都合により牛込區早稲田南町五十一西村誠三郎氏に依頼變へ致し候につき校正は同氏方へ御廻送願上候　以上

三月一日

八六一

三月三日　水　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市山下町三百六十五番地佐藤平藏方皆川正禧へ

拜啓御地は暖國だから梅抔もとうから咲いたらう。當地は今が盛なれど町内には一本もない樣也。見に行く所もないうちに散つて仕舞ひさうだ。今日は御節句で長閑で好い心持だ。然し風が強くて不可ん。小松原が今朝立つたので新橋迄送りに行つた。歸りに丸善へ寄つて佛蘭西の小說(英譯)を三四冊買つて歸つた。丸善の通は改正で見違へる樣になりつゝある。

ザボンの鑵詰濟難有う。細かに切つて食つてゐる。あれは甘ひものだが澤山食ふと胃の毒だね。近頃葡萄酒を食毎に呑んでゐる

此一週間程少々心地が閑適で生命が延びつゝある。それに春風が何よりの藥だ。鶯が時々鳴く、あれは好いものだ。西洋人は知らないものだ。文學評論が一週〔間〕位すると出來る。上げるから學生に紹介して與れ玉へ。

野間は不相變丈夫の事だらう。久しく無沙汰をしてゐる。よろしく。此間坂牧善辰が來て教師

を探してゐた。今日副島に逢つたら日本の美術を研究する男の顧問になつて鎌倉に居るさうだ。

草々

三月三日

正　禧　様

金之助

八六二

三月七日　日　牛込區早稲田南町七番地より　相馬由也へ　〔三月十三日『讀賣新聞』より〕

拝啓、讀賣新聞新築落成の紀念を御出しになるさうですが、一つ盛んなやつを出して、みんなを驚ろかしたら好いでせう。私は尾崎紅葉氏が小説を書く時分に讀賣新聞を愛讀したもので、其の時分は私ばかりぢやない、うちのものが、みんな讀賣でなくつちや不可ない様なことを云つてゐました。夫から全々御無沙汰をしてゐたが、何かの拍子で、三年許前から又拝見する事になつた。すると今度は日曜附錄とかいふものに、私の人身攻撃が堂々と出るには少々面喰ひました。それで厭になつて讀賣新聞はもう御免蒙らうと思つたが、今迄の惰性でのんべんだらりんに、つい此間迄取つてゐました所へ、あなたが來て自分が五頁を編輯するからしばらく見ろと云つて、送つて下さるものだから、又當分の間拝見する事になつて、一ヶ月許前迄は讀んで居りました。

それから以後『讀賣』の事は一寸忘れてゐましたが先達て外國へ立つ友達を送つて新橋迄行つた歸りに、丸善へ廻らうと思つて、圖らず御社の前を通つて始めて氣が付いて見ると成程新築の建物が落成しかゝつてゐる。同時に紀念號と、あなたの事が又頭の中に浮んで來た。

讀賣新聞は古い文學的な歴史を持つた好い新聞であります。新築と共に益々健全な發達を遂げらるゝのは私の切望する所で、あなたの編輯が、此健全な發達を助長せらるゝ事も私の大いに期待する所でありますから、一寸新築紀念號の御祝詞を申上ます。以上

三月七日

夏目金之助

八六三

三月十三日　土　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

〔はがき〕

アンドレーフをならひてより急に獨乙語趣味が出た様なれば此機に乘じて次の仕事に取りかゝる迄大いに勉強仕度、どうぞ日數を御ふやし下さい。尤も來月のホトヽギスに何か書くなら御掛念に及ばず

八六四

三月二十日　土　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上八重へ　〔はがき〕

鳩の話早速拝見。面白く候すぐ虚子の手許へ廻し候來月は附錄を出すとか出さぬとか申居候故都合によりては如何と思ひ候へども出來るならば掲載する様亟ひ置候

八六五

三月二十四日〔四十二年?〕 牛込區早稲田南町七番地より 幣原坦へ 〔うつし〕

拜啓其後は御無音奉謝候偖小生の友人森次太郎君朝鮮の事に關して大兄に御尋ね致し度旨にて此手紙持參御伺ひ可申につきもし罷り出候はゞ御都合にて御面會の上御高話願度と存候先は右用事迄 艸々頓首

三月二十四日　　夏目金之助

幣原坦様

八六六

三月二十九日 月 午前十時―十一時 牛込區早稲田南町七番地より 鹿兒島市下龍尾町百九十一番地野間眞綱へ

其後御無沙汰先達ては御親戚のものより御恵投の香爐御地産錫の盃一個と黒柿の杖正に拜受早速御禮狀を出す筈の處當時「文學評論」出版の砌にてそれを一冊添へて手紙を書かうと思ひ居りたるに「文學評論」春陽堂から小生の方へ獻本せざる先に悉皆本屋の方へ廻したる爲め再版來るを待ちとう〳〵御無沙汰をせりいづれ二三日中には君と皆川君へ宛贈り候間御ひまもあらば御一覽學生へ御紹介を乞ふ。先日寺田寅彦外國へ留學星岡茶寮にて送別會相開き傳四も參り候。過日皆川よりザボンの砂糖漬到來早速禮狀を出し候處もとの下宿へあてたる爲め屆かぬと覺え聞合せ

參候へども其内宛名の下宿より屆けて呉れる事と存じ打遣り置きたり御面會の節右御傳可被下候。春暖落梅鶯啼の好時節御地は櫻さへ咲たる事と察せらる。一年の佳節すべからく遊樂すべく遙かに御勸め申候 以上

三月二十九日　　金之助

眞綱様

八六七

四月二日 金 午前六時―七時 牛込區早稲田南町七番地より 千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

昨夜豐隆歸京君が醉拂ひになぐられて眼に創を拵らへたといふ警報に接し大に御氣の毒に思ひ居候。眼球の故障の方は心配なき由につき先々安心なれどわるくすると藪睨みの悲運に廻り合ふやも知れぬ由隨分精出して御療治可然かと存候。好男子惜むらくは遠近を知らず抔とあつては甚だ心細く候。

豐隆申候には「三重吉が眞面目くさつて、どうも私の不德の致す所だ……」といつたとて大いに笑ひ候。私の不德の致す所は近來の大出來と存候。

此間中より食傷の結果胃痛にて困難罷在候。三四日蟄居の體何か持つて御見舞に上り度れど、どうも其内には退院になりさうであるから一先づ手紙を以て御左右を伺ひ奉る。

草平大怪談を揚げてやに下り居候。大兄も何か一つ我黨の爲に御書き被成度候。豐隆アンドレーフ論をホトヽギスに送り候。小生は豐隆にアンドレーフを敎はり居候 以上

三月三十一日〔封筒の裏には四月一日とあり〕

三重吉様　　金之助

八六八

四月三日　土　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信へ

春暖の候愈御清適奉賀候。其後は存外御無音に打過申譯無之候。過日文學評論出來の節早速一部進呈の積の所初版は賣切とかにて漸く手元へ一部持參致したる迄にて其他は今日に至る迄いまだ納本仕らず從つて諸君へも未だ寄贈の運に至らざりし處御地にて態々御購求御一覽を賜はり候のみならずとくに御推奬の辭を辱ふし加之御叮嚀に誤植の表迄も御示しにあづかり感佩此事に候。萬事行屆かぬ事多く自分にも不滿足の箇所多く有之候へども若し御氣付の所も有之候へば御示教にあづかり度と存候

永日小品はなぜ東京へ載せなくなり候や小生にも分らず候。四月下旬より又大阪の方へ少し續くものをたのまれ執筆〔の〕都合につき御讀被下候へば幸甚に候。東京の方は煤烟のあとを與謝野鐵幹がかきそのあとを小生がかくべき役割の様に承はり候右御禮旁御返事迄　草々不一

四月三日　　金之助

繞石兄

座下

折角の御訂正二版には間に合かね候。もし三版も出る好機も有之ば御厚志を利用致し度と存

候

八六九

四月三日　土　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大塚保治へ

拜啓かねて大學在職中にやつた講義ののこりものを又出版したから御覽に入れる。もう是で大學に緣のあるものはなくなつた。大學は君の周旋で這入つた處だから夫が緣故で出來た著書は皆君が間接に書かした様なものだから記念の爲め一部机右に御備へ置を願ひたい。中は讀んでも讀まなくてもいゝが可相成は讀んでくれる方がいゝ。さうして批評をしてくれゝば猶結構である

帥々

四月三日　　金之助

大塚様

先達て奥さんが御出の節文學評論が一部欲しいと仰しやつたさうだがもし別に今一部御入用なら、まだ二三部あるから夫を獻上してもいゝ。然し君にあげれば大抵よからうと思つて一部にして置いた。よろしく

八七〇

四月十二日　月　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓御病氣漸次御回復結構に候入院其他の費用嵩み御困難の由承知御無心の五十圓ちと辟易な

れど外の事にも無之兩三日〔中〕に御送附可申につき御安心御療養可然候。大阪へ今月末から小說をかく約束あり何にも履行する了見起らず。花が咲く所爲と存候

小宮の評論中々タチよろしく候當地にても眞面目な人には評判よき方結構に候。森田のも世間では大分もてゝ居る由。

先は右迄　草々

十一日

三重吉様

金之助

昨今風にて上野の花大分散り候よしに承はり候澤山錢をもつて湯治に參り度と存候

今日散歩の歸りに鰹節屋を見たら亭主と覺しきもの妙な顏をして小生を眺め居候。果して然らば甚だ氣の毒の感を起し候。其顏に何だか憐れ有之候。定めて女房に惚れてゐる事と存じ是からは御神さんを餘り見ぬ事に取極め申候

右は序迄餘は拜眉に讓る

八七一

四月十九日　月　午後三時—四時　牛込區早稻田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社內

坂元三郎へ

御手紙の趣承知せり六月十日より掲載となつては大分切迫の感あり。出來る丈大塚さんを延ばす御運動を乞ふ

小生かくものは長短不定なり。(長い方の御注文なれど)短かければ年內に分量的に勘定の立つ樣に何遍もかく積之右迄　草々

四月十九日

坂元三郎様

夏目金之助

八七二

四月二十二日　木　午後六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社內

坂元三郎へ

拜啓森田草平の煤烟は社へ掲載の約束なりたる當時原稿料は大塚氏のそらだき同樣にてよろしきやとの澁川氏の問に對し承知の旨を答へ置候。

そらだき原稿料は一回四圓五十錢と記憶致し候が問違に御座候や

本日森田參り社へ稿料をもらひに行つたら煤烟は一回參圓五十錢なる故最早渡すべき金なしと山本君より言はれたる由

それで小生の考と原稿料の點に於て少々矛盾相生じ候。もしそらだきが一回參圓五十錢ならば小生の覺え違草平に對して小生の責任に候が小生は四圓五十錢と記憶致居候につき念の爲め御問合せ申候。御多忙中恐縮なれど一寸御しらべの上御一報願度候　以上

四月二十二日

坂本三郎様

夏目金之助

八七三

四月二十四日　土　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區菊坂町三十一番地雄集館林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

拜復急用なればいつでもよろし急がずば木曜の都合の好い時に御出可被成候文學評論を一部上げても好いが忙がしくて讀めないだらう

八七四

四月二十四日　土　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓病氣漸々御快復奉賀候當日麗日好風嚢中無一物にして何となく表をあるきたき心なり

草平一回分參圓五十錢のを四圓五十錢と間違へ朝日へ原稿料をとりに行つて拒絶を食ひ蒼く成居候是は實は小生の記臆違より出づ。滑稽よりも氣の毒なり。〆て百圓程の損

小宮のアンドレーフ論を御褒めのよし是から褒める時は可成公共の機關を利用して天下に廣告ありたし。國文の文學欄抔至極よろしからん。由來吾黨の士は内々で褒めてゐる許だから戰國亂世の今日には丸で無能力と一般に候。彼徒のなす所を見ると敵の機關を借りて迄傍若無人の法螺を叩き居候。あれ程押が強くなければ日糖事件の今日には文士として通用致さぬにて候

小説は大阪へ出すにて候。まだ一回も書かず候。何だか如是閑と申す男が？といふ標題で今しきりに書いて居り候。其あとへでも載せる氣にや一向催促も參らず候。然し小生ももう書き始める積りに候唯何を書いてよきか分らぬ丈に候

細君子宮内膜炎、エイ子肺炎、アイ子純一風邪、家内不安全　一時は當惑、小生も精神過勞にて陰莖内膜炎にでもなりさうな氣が致したり。現今諸人平癒に向ひ候。漸く安堵

遲櫻、山吹　若芽甚だ快適　以上

四月二十四日

三重吉　様

金之助

八七五

五月三日　月　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市第七高等學校野間眞綱へ

追々暖かに成候御機嫌の事と存候先日手紙にて御問合せの件松根東洋城に相談致候處御引受致してもよろしくとの事故玉稿同人方へ御廻付可然候住所は赤坂表町一丁目貳番地山口方に候先は用事迄　草々

五月二十五日

眞綱　様

金之助

八七六

五月三日　月　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎へ

拜啓先日御話申候文學評論誤植以序差出置候間改版の節何とか御工夫被下度候右用事迄　草々

頓首

五月三日

夏目金之助

本多嘯月　様

八七七

五月七日　金　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市長田町城ケ谷百二十一番地林久男へ

其後達者にて御暮し奉賀候時々は薩摩へ行つて櫻島が見度なり候ものゝ其日々々に追はれると是も夢に候砂糖漬わざ〳〵御送り被下難有拜受此間皆川からも貰ひ候あのザボンの砂糖漬の偉大なるには驚き候西郷隆盛の砂糖漬の樣なものに候「三四郎」不日出來につき出來たら御返禮に差上度と存候

右御禮迄　草々

五月七日

夏目金之助

林　久男　様

小宮は徴兵の件にて鄕里へ歸り候御婆さんは食物を食はず腹を下して可成からだを疲らして歸つて來いと云つて來た由さうして其手紙を書留にして小宮へ送つた由愛嬌に御座候

八七八

五月九日　日　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ

拜復安倍能勢原宇宙の評をかく由結構に候。あれはどこで〔も〕評をせず。不都合に候。帝文に内田夕闇といふ人有之あの人の方が天弦より理窟の云へる樣に御座候。序に御依賴如何に候や。美學に乙骨三郎といふ人有之時々書いてもらつたら面白い事があるかも知れないと存候。其他澤山あるべく候。親類にごた〳〵ある由御面倒御察し申候。小生愈小說にかゝらねばならぬと存じバザンの小說を二卷よみ候いづれも駄作に候。右迄　草々

五月八日夜

金之助

豐一郎　様

八七九

五月二十三日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　金澤市第四高等學校大谷正信へ〔はがき〕

拜啓「三四郎」出來につき一部進呈仕候御落掌被下度候　草々

五月二十三日

八八〇

五月二十五日　火　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區仲町十九番地橋口清へ

拜啓先達ては多勢まかり出御邪魔致候三四郎御盡力にて漸く出版難有存候

表紙の色模様の色及び兩者の配合の具合よろしく候

然し文字は背も表紙もともに不出來かと存候

小生金石文字の嗜好なく全く文盲なれど畫家にはある程度度此種の研究必要かと存候、尤も大作を以て任ずる大兄に對して插畫家もしくは圖案家に對する注文抔持出しては御叱りあるべけれど、此は研究のみならず娯樂としても充分面白き業かとも存候。

不取敢御禮旁無遠慮なる惡口申上候失禮御ゆるし可被下候　以上

五月二十五日　　夏目金之助

橋口清様

二伸　御令兄へよろしく御傳聲先達拜見の畫皆々面白く存じ候

八八一

五月二十八日　金　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信へ

拜啓三四郎の切拔態々御送被下難有御禮申上候あれは進呈本の代りに小生方に記念として所藏可致候又々小說に取りかゝらねばならぬ事と相成候。來月末より東京大阪雙方へ掲載の筈に御座候。先便中の下旬と申候は都合により延期致候ものに有之候

先不取敢御禮迄　草々頓首

五月二十八日　　金之助

繞石老兄

八八二

六月二日　水　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝へ〔はがき〕

拜啓御惠送のビツクルス二瓶着難有拜受致候右不取敢御禮迄申上候。文學評論御通讀被下拜謝此事に候

八八三

六月四日　金　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

舌代

菓子少々御目にかけ候につき御つまみ被下度候　以上

四日　　夏目金之助

飯田政良様

八八四

六月十二日　土　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社
内山本松之助へ

拝啓大塚女子のあとの小説掲載の日どり御報知奉謝候
小生の小説の名は「それから」と申候今月二十〔日〕前後に二三十回纏めて御送附可致候
「それから」は大阪と交渉まとまり東朝と同日より向ふにても掲載の筈につき右御含みの上可
然御取計願上候
豫告の文字必用なれば五六行相認め可申候さらずばたゞ「それから」丈を御豫告願候
右用事迄　草々頓首
六月十二日　夏目金之助
東朝社會部
山本様

八八五

六月十二日　土　牛込區早稲田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎へ

拝啓京都大學圖書館長島文次郎氏より別紙の如く申來候については甚だ御面倒ながら文學評論
一部御堂より同氏宛にて京都大學へ御寄贈被下度候右用事迄　草々頓首
六月十二日　夏目金之助
本多直次郎様

八八六

六月十二日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞
社内山本松之助へ

拝復
「それから」の豫告別紙認め候、可然御取計願上候。大阪へは小説の名前通知致し置かず候故
豫告文とともに御廻し願上候
原稿は十八九日迄に出來た丈可差出候　草々
十二日夜　夏目金之助
社會部主任
山本様

八八七

六月二十二日　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞
社内山本松之助へ

拝啓
別紙萬朝の召波〔写〕たまね君より參りました。御一覽の上差支がなければ都合の好い時に御載せ下
さい。

御手數を煩はして濟みません
此會には私もたのまれて關係があるから頼んで來たのであります　草々

六月二十二日　夏目金之助

山本　様

八八八

七月一日　木　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

其後は意外の御無沙汰益御健勝の事と存候横濱は開港五十年祭で大變な賑はひの由大分面白からうと只でさへ出掛て見たき心持に候

昨日は御招きの御手紙を頂戴御親切の段鳴謝致候家の書生のものは行つて御覽なさいと勸め候小生も行きたく候然るに例の如く只今小説起草の低氣壓を感じ新聞より肉薄を受け居る最中其上客抔參ると一日つぶされる。昨日抔も音樂の先生が朝から晩迄居つた爲め今日はせめて一回でも埋合せをせねばならぬと氣を焦ち候。

あなたの招いて下さる時は何か故障があつて何時でも快よく參上した覺がない私も甚だ遺憾に思つてゐます。が今度も右の譯故斷念します、もう一ケ月もすると小説を書き上げてしばらくは樂になります其時もし機會でもあつたら御目にかゝりたいと思つてゐます

あなたに歌舞伎へさそはれと事があるが此間とう〳〵行つて芝居を見ました。不折も行きました。不折も私も素人だから面白い。ツンボが蓄音機を買ふ樣なものですな。　草々

七月一日　金之助

渡邊和太郎様

八八九

七月五日　月　午前(以下不明)　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ

拜啓國民文學原稿料拜受
水上原齋の原稿をたのまれて虚子に紹介し置きたる處別紙端書到着につき一寸高濱君に御聞合せ願度候
あれは多分駄目と思ふ虚子多忙なら一寸見てやつてくれ玉へいけなければ水上へ返してやつて呉れ玉へ　以上

七月五日　金之助

豐一郎様

八九〇

七月六日　火　午後二時—三時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎へ

拜復
「三四郎」を包んで畔柳都太郎様といつもの如く書いて置いたら森卷吉が來て奪つて行つた事

は慥也本人をつらまへて御糺明被下たし。
實は拙著をやる所はいつでもやり、やらぬ所はいつでも遣らぬ故今度は少し方針を易へて今迄の人を拔いたる趣也。其故如何となれば。――
あまり小生の本ばかり貰つても持て餘す連中あるべし。引越の時厄介だ抔といふ人が出來てもつまらないから少々此方で遠慮しやうと云ふデリカシーなり。然るに大兄は御迷惑でなき由そこが明らかなれば是からの著書を必ず一部づゝ進呈仕るべし。其代り御保存の責任は無論有之候。
今一ケ所から君同樣の苦情を擔ぎ込まれたり。
若杉三郎なるものは、あなたの作つたものは屹度一冊宛下さいと約束を逼り候。此方がやる方では先方の意志明瞭にて都合よろしく候。
本屋に申付御送可取計候。もし又中に何か書く必要あらば序を以て認むべく候　草々以上

七月六日　　金之助

芥舟先生

八九一

七月六日　火　牛込區早稻田南町七番地より　日本橋區通四丁目春陽堂內本多直次郎へ

拜啓甚だ申かね候へども「三四郎」を赤坂區表町一丁目二番地松根豐次郎方と、夫から本郷西片町十畔柳都太郎方と、二ケ所へ一部づゝ御送り被下度願上候。毎度御手數恐縮致候　以上

七月六日　　夏目金之助

本多嘯月樣

八九二

七月八日　木　午前六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大塚保治へ

美學の會へは僕の方が傍聽に出たいと思つてゐる。御話し抔はとても出來さうもない。

拜復

文學評論を通讀して吳れて寔とに難有い。其上わざ〳〵批評を書いて貰つて濟まない。大變に過重な褒辭を得て少々辟易するが矢張り嬉しい。それから惡い所をもつと色々指摘してもらひたかつた。もつと無遠慮に僕の參考になる樣に云つてくれると猶よかつた。がそれは忙がしい君に望むのは僕の方の無理かも知れない。
國民の野上が君の所に文學評論の印象を聞きに行つたら君は斷はつた。其手紙を僕に見せた。僕も仕方なしにその儘にして置いた。
實はあれを國民文學へ出したい。君も別段異存もあるまいと思ふから、失敬だけれど專斷で送る。
何故送るといふと矢張り自分の書物を廣告したいといふ事に歸着するが、もう一つは君の意見を公衆の參考にしたい。（そこでもつと僕の缺點があげてあれば結構だと云つたのである。）
君の所に御產があつた樣に聞く。奧さんも赤坊も御壯健ならん事を祈る。菅の細君病氣長びき困却の樣子。僕其後未だ逢はず。

また小説をかき始めて多忙御目にかゝつたら萬々
不取敢御禮旁御願迄　草々

七月七日　　金之助

大塚様

書いて仕舞つて考へると私書を無斷で出すのもわるい樣だ。もし不可なら、端書を一本くれ玉へ。國民の方へ通知ヲ出ス

八九三

七月十五日　木　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助へ

拜啓別封の如きもの小生の手許へ參り候。大兄とは直接關係なけれど一寸面白き故御目にかけ候。封入の爲替は販賣部へ御廻し可然御取計の程本人の爲に願上候　草々頓首

七月十五日　　金之助

山本様

八九四

七月十五日　木　牛込區早稲田南町七番地より　岡山市古京町内田榮造へ

拜啓御手紙と玉稿到着致候直ちに拜見の上何分の御批評可申上筈の處只今拙稿起草中にて多忙

故夫が濟む迄しばらく御待被下度候
尤もホトヽギス掲載方御希望につき原稿は虚子の方へ一應廻付致し可申候虚子が適當と思へば此次位に載せるならんと存候へども其邊は編輯の權なき小生には何とも申しかね候
右御返事迄　草々

七月十五日　　夏目金之助

内田榮造様

八九五

七月十八日　日　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

拜啓
〇〇〇〇といふ人はいゝ人だけれども金の事は丸で當にならないさうである此間中村武羅夫に逢つたらあの人に頼んぢや駄目だといつて居た。其時德田秋聲なら好いと云つた。
もしつてがあるなら德田君にでも逢つて見給へ
ホトヽギスへも出來るなら周旋する事は出來る。が夫は物次第である。
金を五圓上げるから又湯にでも這入つて氷水でも呑み給へ　草々

七月十八日　　夏目金之助

飯田青凉様

八九六

七月二十日　火　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ〔はがき〕

秋骨先生僕の文學評論の評を二六へかいてくれた由二六はとつてゐず。御面倒ながら君の所にあるのを切拔いてくれ玉はぬか　以上。

今日は稍涼し大慶

八九七

七月二十六日　月　午後四時―五時　牛込區早稻田南町七番地より　千葉縣北條字八幡江戶屋畔柳都太郎へ

御手紙拜見

避暑結構小生書齋にて執筆中々暑い事に候。昨日齋藤阿具青木昌吉兩氏參り夕刻迄談話二人とも○○○○○○○○○○○○糞の如く申しゐたり。是はたしか大兄も御嫌の一人故とくに御吹聽に及び候。

「それから」の主人公は小生だとの御斷定拜承所があの代助なるものが姦通を致しさうにて弱り候。小生にもそんな趣味があれば別段抗議を申入るゝ勇氣も無之候

大塚の文學評論評は局部々々に小生の妙に思ふ所有之。然し大塚の樣な無精ものが書いてくれた事故大いに感謝の意を表し居候。秋骨は二六に書いてくれ候。

大塚は重箱の如くキチンとしたる頭の男に候。形式家としては整然たるものに候。面白い說を吐く人としては一寸推服致しがたかるべきか。尤も夫程大塚のものを讀まぬ故何とも申しがたし。一日も早く此說を正誤致し度考に候。

森卷吉は沼津に參り候。小生小供の爲にピアノを買はせられ候。ピン〳〵ボン〳〵中々好音を發し申候

七月二十六日　金

芥　舟　先　生

大學の英文に井上十吉氏入る由高等學校の方は如何

八九八

八月三日　火　使ひ持參　牛込區早稻田南町七番地より　牛込區早稻田南町十番地飯田政良へ

御手紙拜見

折角だけれども今借〔原〕して上げる金はない。家賃なんか構やしないから放つて置き給へ。僕の親類に不幸があつてそれの葬式其他の費用を少し辨じてやつた。今はうちには何にもない。僕の紙入にあれば上げるが夫もからだ。

君の原稿を本屋が延ばす如く君も家賃を延ばし玉へ。愚圖々々云つたら、取れた時上げるより外に致し方がありませんと取り合はずに置き給へ。

君が悪いのぢやないから構はんぢやないか　草々

八月一日　夏目金之助

飯田青涼様

紙入を見たら一圓あるから是で酒でも呑んで家主を退治玉へ

八九九

八月十六日　月　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣北條字八幡江戸屋畔柳都太郎へ

拝啓當地暑氣少々ゆるみ稍凌ぎよく相成候。御地は如何。菅の細君長々病氣の處十五日死去氣の毒に存候。小供澤山にて大弱りの體。小生漸く小説脱稿是から讀書が出來る事と樂み居候雜誌のたまつたものを片付ける丈でも一仕事に候。森は教授になり先々結構。

此近年避暑といふものをした事なく旅行を思ひ立つても時間の惜いのと金の惜し〔い〕ので成就せず。

大倉といふ爺さんが朝日新聞記者にめしを食はして常盤津を聞かして是が私の道樂で御座いといふ樣な事を實例で示したのは大倉の口振ぢやないが好うがすな。外の奴より餘程洒落てゐる。朝日の記者は恐らく常盤津も何も分らない奴で辟易したんだらうと思ふ。其分らない所を分つた樣に書いたり振舞つたりしてゐるから、大倉の爺さんに舐められてゐるのみならず、讀者も少々氷魂先生を踏み倒したくなる。私はあの實業家廻りを面白く讀んでゐるあれは下手な小説を讀むより可うがすよ。國民には先達てから文士の遊び振りといふのが出てゐる。笹川臨風、田岡嶺雲、

姉崎嘲風、樋口龍峡こと〴〵く生捕られ候。御覽にや面白く候。

エリスのセツクスの心理といふ本を二冊買ひ候。こんな本は讀んでゐるうちは面白くて讀んで仕舞ふと誰かに遣つても惜しくない種類のもの多く候。

關東に大地震が有之候。寺田が立つ時近いうちに大きな地震があるかも知れませんと云つたが、果して豫言適中なり先づ〴〵我々は厄逃の氣味に候。

ゆる〳〵御養生御歸京の上何れ御目にかゝり可申候　以上

八月十六日　金之助

芥舟先生

九〇〇

八月十九日　木　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　兵庫縣御影町前川清二へ

御手紙拜見致候御藏書小生の爲に御割愛被下候由難有仕合に存候頂戴可致候頂戴の上は御寄贈の御厚志に對し永く丁重に保存可致候右不取敢御返事迄　草々頓首

八月十九日　夏目金之助

幾原川清二様

二伸小生不日旅行の積につき留守中に御受取の際は自然御禮狀を忘るやも計りがたくにつき其邊は御容赦被下度候

九〇一

八月二十四日　火　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區市谷田町三丁目十一番地中島六郎へ

拜復小生病氣につきわざ〳〵御見舞狀を頂き難有存候。小生は御承知の通り年來の胃弱なれど今回の如く急性カタルを起したるは始めてにて一時は嘔吐烈敷自分ながら生きてるのが厭になり候處うまくしたものにて今日位から少々人間の慾望出來此手紙も寐ながら書ける樣に相成候まづまづ御安心被下度候。大兄も少々腸胃の御加減よろしからぬ由隨分御養生專一と存候然し大兄の如く强壯無比のものは少しは腸胃病に冒さるゝ方色氣ありてよろしかるべくと存候

偖諸先生御招飲の件最初は「それから」執筆中次には荊妻臥褥中第三には小生の病氣最後には滿洲旅行にて漸々順繰りに延引甚だ恐縮の至是はとくに此書面にて御詫を申上度と存候

滿洲旅行は友人の勸めて參る事に相成滯在日子も不定なれど歸京の上は天地神明に誓つて前約履行の覺悟に候へば天高馬肥の時期に乘じ諸君子腹を抱いて御來駕被下候樣あらかじめ願置候

右御禮旁御詫迄　草々不一

八月二十三日

中島樣　　金之助

九〇二

八月二十四日　火　牛込區早稲田南町七番地より　岡山市古京町内田榮造へ

御手紙拜見老猫批評の件頓と失念致居候甚だ申譯なく存候小說脫稿後種々の用事重なり居候處へ急性胃カタールに罹り臥褥の爲め何やら蚊やら取紛れ申候あしからず御海恕願候

褥中早速「老猫」を拜見致候筆ツキ眞面目にて何の衒ふ處なくよろしく候。又自然の風物の敍し方も面白く思はれ候。たゞ一篇として通讀するに左程の興味を促がす事無之は事實に候。今少し御工夫可然か。尤も着筆の態度、觀察其他はあれにて結構に御座候へば其點は御心配御無用に候。虛子の評によれば面白からぬ樣に候へども小生の見る所は虛子よりも重く候。猶御奮勵御述作の程希望致候

花筵一枚御贈被下候由難有候小生病氣全快次第旅行にまかり出候につき留守中到着候節は御返事も怠り可申につき其邊はあしからず

先は右御返事迄　草々頓首

八月二十四日

内田榮造樣　　夏目金之助

九〇三

九月二日　木　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞文學部編輯へ　〔はがき〕

是より出發す。風聞錄に出立とある時は在京、見合せとあるとき時は出京。噂と事實とは大概

此位の差違あるべきか。ホトヽギス到着臼川君の鶏飼面白く候

九月二日午後二時

九〇四

九月七日　火　午前十一時—午後一時　鐵嶺丸船中より　赤坂區田町二丁目一番地松根豐次郎へ〔繪はがき〕

胃病如何。小生健全。今晩大連着。伊香保より航海の方愉快なるべし。もう山から御歸りの事と存じ候

六　日

九〇五

九月七日　火　午前十一時—午後一時　滿洲大連大和ホテルより　牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕

只今大連着ヤマトホテルと云ふ旅館につく。

六　日

夏目金之助

九〇六

九月七日　火　午前十一時—午後一時　滿洲大連大和ホテルより　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

〔繪はがき〕

君の風邪如何。小生の胃病大分よし。只今大連のヤマトホテル着。隣の室で西洋人の女がしきりにピヤノを彈じてゐる。

六日午後七時

九〇七

九月十三日　月　午後十一時—十二時　滿洲大連大和ホテルより　牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき　滿鐵總裁官舍〕

九月十四日原

御前も無事。小供も丈夫の事と思ふ。此方にも別狀なし。毎日見物やら、人が來るのでほとんど落付いてゐられず。昨夕は講演をたのまれ今夜も演說をしなければならない。中村の御蔭で色色な便宜を得た。西村へよろしく。其他の人にも宜敷

〔裏に〕

是は總裁中村是公の家。旅順の戰場を見て二泊昨日歸り。明十四日北の方へ向け出發の豫定。其後胃が時々いたい。此地は非常に晴れ具合の奇麗な處。

九〇八

九月十九日　日　大連長春線車中より　牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕

今十九日湯崗子と云ふ溫泉發奉天に向ふ。同行舊友札幌農學校教授橋本左五郎氏
久々にて御面會致し毎日愉快に同行致居候　　橋本左五郎

九〇九

九月二十一日　火　午前十一時—午後二時　滿洲奉天瀋陽館より　千葉縣成田中學校鈴木三重吉へ〔繪はがき〕

是からハルビンに行く積り歸りには朝鮮へ出る。歸る頃に遊びに出て來給へ。かうしてゐると文學だの小說だのといふ事は丸で頭の中から消えて仕舞ふ。
〔裏に淸國女優二名の寫眞あり〕
こんなのは如何です

九一〇

十月九日　土　午前九時—十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆内より　牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕

三十日に京城に來て三四日で立たうと思つた所とう〳〵一週間程宿屋にゐた。七日の晩に穆さんの新官舍に移つてしばらく厄介になる。穆さんが切角親切に來い〳〵と云つてくれるからである。立派な淸潔な家だ。穆さんは馬を二頭持つてゐる。日本なら男爵以上の生活だ。其うち歸る。

十月九日　　金之助

九一一

十月九日　土　午前九時—十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆内より　京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ〔繪はがき〕

十月九日　　京城　夏目金之助

其後は御無沙汰去月三十日に來り未だ逗留二三日うちに立つ積り。雜誌屋に雜誌新着といふ赤いのぼりがあつたから這入つて見たら十月のホトヽギスと中央公論抔があつた。君の小說も小宮安倍抔の論文がある。讀まうと思つてまだ讀まない。朝鮮は好い天氣の國だ。

秋晴や山の上なる一つ松

諸君へよろしく

九一二

十月九日　土　午前九時—十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆内より　神田區錦町三丁目錦城中學校野村傳四へ〔繪はがき〕

君が鹿兒島から歸る前に僕は滿洲に旅行した。今京城に來て朝鮮人を毎日見てゐる。京城は山があつて松があつて好い處だ。日本人が多いので内地にゐると同樣である。

十月九日　　夏目金之助

九一三

十月十九日　火　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區下二番町三十番地野村傳四へ

〔はがき〕

僕は昨朝歸つた君は病氣の由大切に御養生をなさい。御見やげは何にもない。癒つたら來給へ。方々へ禮狀を出すので忙がしくて困る

九一四

十月二十二日　金　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　朝鮮京城通信管理局官舍矢野義二郎へ

矢野君京城では色々御世話になつて難有かつた御蔭で方々見物が出來て萬事好都合であつた。釜山では草梁から矢野君が瀧車へ乘つて船迄案内して呉れた。僕は此間一寸電報をかけた通り去る十七日歸つた。胃はまだ惡いことによれば一つ洗滌して見樣かと思ふ。

御禮といふ程のものでもないが今日小包を一つ出したから受取つて呉れ玉へ

奥さんによろしく

右口上迄　草々

十月二十二日

矢野義二郎樣

夏目金之助

九一五

十月末〔?〕　牛込區早稲田南町七番地より　大阪市北區中之島朝日新聞社内鳥居赫雄へ

〔初めの部分切れてなし、滋石山房原稿用紙第七頁より始まる〕

區劃をなして居る自治團の樣なものであります。夫から營口へ行つた時も捕まつて同所の倶樂部で講演をする事になりました何れも一時間位の長さのものです。奉天でも相談を受けましたが日取が一日狂つた爲めとう〳〵逃れました。京城でも切に望まれましたが、何しろプログラムが切り詰めてあるのと、少時でも宅にゐると人が來たり電話が掛つたり碌々飯も落ち付いて食はれない有樣だつたので、依頼者も斷念して歸りました。

講演以外に苦しんだのは字を書く事です。字は下手だと云つても承知せず句は作らないと斷つても容して呉れず。甚だ辟易しました。ある所では宿屋の御神さんに是非書いて行けと責められて已を得ず宿帳の樣なものに分らな〔い〕事を書いて置いて來ました。京城にそれから會と云ふのがあつて、其會員は娯樂の一法として歌留多をやるさうですが、百人一首を讀む前に何でも一首別の歌を朗讀して音聲を調へるんださうです。所が會の名がそれから會丈あつて、此會員は是非私に其空歌と云ふのを作つて呉れと云ふんです。私は生れて歌なんかよんだ覺はないが、何しろそれから會の名に對しても濟まぬ事と思つて、とう〳〵三首程短冊に書いて置いて來ました。其歌ですか歌は斯う云ふんです。名歌だから御聞きなさい。

高麗百濟新羅の國を我行けば

我行く方に秋の白雲
草茂る宮居の迹を一人行けば
礎を吹く高麗の秋風
肌寒くなりまさる夜の窓の外に
雨を欺くポプラアの音

ポプラアですか。えゝ彼地には澤山あります。

此度旅行して感心したのは日本人は進取の氣象に富んでゐて貧乏世帶ながら分相應に何處迄も發展して行くと云ふ事實と之に伴ふ經營者の氣概であります。滿韓を遊歷して見ると成程日本人は頼母しい國民だと云ふ氣が起〔以下缺〕

九一六

十一月六日　土　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社

内池邊吉太郎へ

拜啓先夜は長座失禮致候

鏡花子のあとの小説はまづ森鷗外氏を煩はしてみる積に候或は出來ぬかも知れず候へども其節は又何とか致す了見に候

滿韓ところ〴〵此間の御相談にてあとをかくべく御約束致候處伊藤公が死ぬ、キチナーが來る、國葬がある、大演習がある。――三頁はいつあくか分らず。讀者も滿韓ところ〴〵を忘れ小生も

氣が拔ける次第故只今澁川君の手許にてたまりゐる二三回分にてまづ御免を蒙る事に致し度候

右用事迄　草々

十一月六日

池邊様　　金之助

九一七

十一月七日　日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ〔はがき〕

虚子から催促された夢の如しの評入御覽候。願くは一日に御掲載願候先達停車場へ四方太に逢つたら同人よりも何か書けと云はれ候　以上

十月七日

九一八

十一月九日　火　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區市谷田町三丁目十一番地中島六郎へ

拜啓御手紙わざ〳〵病中に御認め御厚意難有候露語通譯の件は只今手紙にて中村へ申つかはし候處御推擧の人物はもし先方より何とか申來候節は慥かに申聞べく候

音樂會へは娘をつれてフロックで出掛ました。ソソツカシイので本郷の中央會堂へ行つて仕舞

ました。夫から又三崎町へ取つて返した處幸まだ開會に至らず。こと〳〵く拜聽の榮を得候。小生音樂の耳なく甚だ遺憾たゞ面白く聞いたには相違なけれど恐らく何を聞いても同程度に面白い位の耳なるべく寺田を連れて行かなかつたのを殘念に思ひ居候。いくら文學者でも此位の耳では音樂會を天下に吹聽するの勇氣乏しく候

西村はとう〳〵大連へ參り候在京中は色々御世話になりました。

音樂會の切符を三枚買つた處第三女が連れて行つて呉れといふので連れて行きました。切符が一枚足りないから斷つてゐるとそこへもと英文科で教へた人が出て來てなによろしう御座いますといつて入れてくれました。幸田、橘、頼母木等の諸先生が見えました。シーモアと云ふ異人もゐました。然しもう少し人を呼びたかつた樣です。然らずんばみんなよりぬきの鑑賞家丈をあつめたかつた。私の樣なものがあの中に交るのは何だか氣の毒ですが或は私同樣の彌次馬が這入つてゐるかも知れません。其彌次馬を勘定に入れてあの位の入りなんだから氣の毒です

粟餅で發熱したのは珍らしくて愛嬌がありました。私はいそがしいから是でやめますあなたの病氣見舞の代りに此手紙を書きます　頓首

十一月九日

夏目金之助

中島六郎樣

九一九

十一月二十日　土　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地大塚保治へ

拜啓其後は御無沙汰滿韓より歸りて一寸伺ふ筈の處不相變多忙にて失禮致居候

さて思ひも寄らぬ事と御驚きならんが實は今度朝日新聞に文藝欄といふを開店し二十五日頃より始めるに就ては僕の友人などより話をきゝ又は原稿をもらつて文藝の時事に關する事を記載しなければ立ち行かぬ事と相成たるにより、どうぞ御迷惑でも此男に逢つてやつてくれ玉へ是は森田草平といつて、僕自身拜趨萬事願ふ所を多忙だから代理に賴むのである。

委細は森田より御聞取、朝日文藝欄のスペシアル・コントリビューターとなる事を兎に角御承認を願ふ

いづれ拜眉萬々　艸々頓首

十一月二十日

夏目金之助

大塚樣

九二〇

十一月二十一日　日　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓左の如き端書が來たから面倒でも一寸行つて呉れ玉へ。二三日前同じく端書で月謝を納めろと云つて來たが、本人に一先づ聞き合せ樣と思つて問合せの手紙を出した。當人は唐津炭坑にゐるさうであるから少々ひまがかゝる夫迄埒を明けるのを待つてもらつて呉れ玉へ

第一、一學期の月謝未納とは何の事だか分らない。一學期が未納で卒業が出來るのかな　以上

十一月二十一日

豐隆様

金之助

九二一

十一月二十五日　木　午後八時―九時　牛込區早稻田南町七番地より　牛込區市谷田町三丁目十一番地中島六郎へ〔はがき〕

拜啓文藝欄を設けるため度々森田を以て御邪魔を致し不相濟候昨二十四日の音樂會の評難有存候淨書の上二三日中に掲載可致候右御禮迄　草々頓首

九二二

十一月二十八日　日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より　Bei Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W. 寺田寅彦へ

君が度々手紙を寄こして呉れるのにたゞの一度も返事を出した事がない。正直をいふともらふ度に今度は出さう〳〵と思ふが、あまり溜つてゐるから、書くなら長いものを書かう抔と贅澤を極めてゐるうちに、まあ手近な用を片付けなければならなくなる。實は御存じの通り坐つてする仕事がいくらやつても遣り切れない位積つてゐる。夫で失敬ばかりする。僕は九月一日から十月半過迄滿洲と朝鮮を巡遊して十月十七日に漸く歸つて來た。急性の胃カタールでね。立つ間際にひどく參つたのを我慢して立つたものだから道中非常に難義をした。其代り至る所に知人があつ

たので道中は甚だ好都合にアリストクラチツクに威張つて通つて來た。歸るとすぐに伊藤が死ぬ。伊藤は僕と同じ船で大連へ行つて、僕と同じ所をあるいて哈爾賓で殺された。僕が降りて踏んだプラトホームだから意外の偶然である。僕も狙撃でもせ〔ら〕れゝば胃病でうん〳〵いふよりも花が咲いたかも知れない。

夫からキチナーといふ男がくる。宇都宮で大演習をや〔る〕。中々賑やかな東京になつた。僕は新聞でたのまれて滿韓ところ〴〵といふものを書いてゐるが、どうも其日の記事が輻輳するとあと廻し〔に〕される。癪に障るからよさうと思ふと、どうぞ書いてくれといふ。だから未だにだら〳〵出してゐる。其所へもつて來て此二十五日から文藝欄といふものを設けて小說以外に一欄か一欄半づゝ文藝上の批評やら六號活字で埋めてゐる。君なぞが海外から何か書いてくれゝば甚だ光彩を添へる譯だが、僕は手紙を出さない不義理があるからヅウ〳〵しい御賴みも出來かねる。尤も文藝欄の性質は文學、美術、音樂、なんでもよし。ハイカラな雜報風なものでも、純正な批評でもいゝとして可成多方面にわたつて、變化を求めてゐる。あとで六號活字を愛嬌につける。今はハウプトマンだのゝエデキンドだのゝ逸話見た樣なものを載せてゐる。是は小宮が書いてくれるのだが、ぢきに種が盡きさうで困る。まあ食後に無駄な時間でもあつたら繪端書へでもいいから何か書いて呉れ玉へ。評論にしても一回讀切りを主としてやる、どうも長くなると弱るからね。

近頃はモミアゲの處に白髮が大分生えて御爺さんになつた。昔し敎へた御弟子が立派になるから恐縮だ。松根は式部官になつた。森田は文藝欄の下働きをしてゐる。社員にしやうと思つたら社長があゝ云ふ人は不可ないといふんだから弱つた。

今日は上野に音樂會がある。いゝ天氣だ。行つて見やうかとも思つてゐる。四五日前は有樂座でロイテル氏の御披露演奏會があつた。ピやノが旨いさうだ。エルグ原マイステルは君知つてゐ〔る〕ね。幸田の姉さんが僕の旅行中に休職になつて、すぐ外國へ行つて仕舞つたさうだ。神戸さんが歸つて來た。昨夜は同じく有樂座で森鷗外譯のイブセンのボルクマンを左團次や何かゞやつたさうだ。是は小山内薫が主宰してゐる自由劇場の興行である。

文部省の展覽會もある。此間見に行つたが、日本人も段々旨くなるね。前途有望だ。不折は不相變チゞイの裸をかいた。虎の皮の犢鼻褌をしてゐるからえらい。然し肉の色は甚だ可かつた。背景は拙惡極まるものだ。

僕の家は經濟が膨脹して金が入つて困る。然しまだ借金は出來ない。君の留守にとう〳〵ピやノを買はせられた。歸つたら演奏會をやりにき給へ。君が買へ〳〵と云つてゐたから、ピやノが到着した時は第一に君の事を想ひ出した。君がゐたら嘸喜ぶだらうと思つた。筆が稽古をしてゐる。それで來年の春は同じ位の年の人と一所に演奏會へ出て並んで何かやるんださうだからえらいね。さうして中島さん(筆の先生)が十時原の休息時間に僕に何か挨拶をしろといふんだから猶と驚ろく。

僕は此度「それから」といふ小説を書いた。來年の正月春陽堂から出るから送つて上げる。獨乙でハイカラな寫眞を撮つたら寄こし玉へ。今日は好い天氣だ。緣側でこれを書いてゐる。山茶花が咲いてゐる。もう何も書く事がなくなつたやうだからやめる　以上

十一月二十八日

金之助

寅彦様

九二三

十一月二十九日　月　午後八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區市谷田町三丁目十一番地中島六郎へ

拜啓文藝欄設立につき御援助を願ひ候處早速樂界の爲に御奮ひ被下難有既にロイテル氏披露會の御評を賜はり又秋季演奏會の御評も頂戴深謝の至に不堪候

然る處先日のロイテル氏の分はあれでは文藝欄の五號批評としては一般の讀者に通じがたきにつき森田に命じてあれをまとめて一篇の概括的批評文を作らしめ候、處が森田は音樂に對して零の智識を有し候事小生と同一につき遂に尊意を誤まり候箇所など相生じ候由實以て申譯なく恐縮致候。時間さへあれば一應御檢閲を仰ぐ處なれど取いそぎ候爲め事實大兄に對し失禮を敢てしたると同一の結果に陷り甚だ濟まぬ事に相成候わるい氣ではないのですからどうぞ御ゆるしありて、勇氣沮喪を御禁じ下さつて何卒御盡力を願上候

西村君の評は自分の義務と思つて書いた事と存候。元來編輯會議では文藝欄を設けないでも藝術文學の批評はやるのだからさう云ふ種類のものをまとめて小生の管理の下に該欄覽中に收めたらよからうと云ふ相談故、強く抗議を申込めばやめさせる事も出來候へどもあれはたゞ雜報の筆がすべつたもの位に見逃しても差支ないと存候是亦漸次改良の積故さう一時に御立腹なく完成の機迄御見屆願上候

秋季演奏會の御批評は都合上或は六號にて全部掲載するやも計りがたく候につきあらかじめ御含み願上候猶訂正の箇所(もしあれば)時間の都合にて一應入貴覽る積なれど萬一間に合はぬ時はすぐに出し可申間どうぞ御勘辨を願候其代り充分注意可致候

右御返事迄　艸々頓首

十一月二十九日

金之助

中島様

九二四

十一月三十日　火　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕

玉稿たしかに落掌御多忙中難有存候紙面の都合次第掲載可仕候

只今森田氏不在につき小生より御禮申上候　艸々

十一月三十日

九二五

十一月三十日　火　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

少々御相談申上度事有之明一日早く御出願はれ候や

右用事迄　草々

十一月三十日

九二六

十一月三十日　火　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區彌生町三番地新海竹太郎へ

拜啓過日は森田艸平まかり出御邪魔を致候朝日文藝欄に何か高説掲載の榮を得度旨申出候由の處早速御承諾難有存候實は小生まかり出最初より篤と御依頼可申上筈の處色々用事立て込み不得已森田に依頼致候譯に有之候間あしからず御容赦被下度候

目下開店早々にて、しかも森田事こつちの了見も知らず何だが編輯主任をしてまごつかせ居候御多忙中恐入候へども何か一般の文藝好に興味ありて分る樣な事御寄送願はれまじくや時下の問題に接觸致し候へば猶更好都合に御座候右御願迄艸々如斯　以上

十一月三十日夜

夏目金之助

新海竹太郎様

九二七

十二月三日　金　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　神戸市中山手通四丁目二十番地淺野方東新へ

拜啓御手紙拜見金圓御用立の件御申越の通御返却にてよろしく候其地の學校は萬事意外の事のみにて定めて面白からぬ事と被察候がまあ當分御辛抱可然かと存候只今多忙にて長い返事をかく譯に參らず候故是にて御免蒙り候。先達てはアナグマの皮一枚御惠投にあづかり深謝致候あれは何にしたらよきやチヤン／＼可然か序に御教へ願候先は右迄　草々

十二月三日　　夏目金之助

東　新　様

九二八

十二月三日　金　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

御手紙拜見かねての講演御催促にて恐縮致候が御承知の如く文藝欄開店の爲め事務不少其上滿韓ところ〳〵を今月中つゞけた上に、新年の阪朝に十日つゞき位のものを書く事に相成何とも思案の餘地無之甚だ遺約がましく不快なれどどうぞ事情御諒察の上御勘辨被下度候

右御詫迄　艸々頓首

十二月三日　　夏目金之助

阿部次郎様

九二九

十二月十五日　水　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

拜啓其後は打絶御無沙汰に打過不本意至極に候滿洲より歸朝後多忙日〔に〕加はり愈厄介と相成降參の體に候。大兄御變りも無く日々事務御勵精の事と存候不堪慶賀の至却說御親切にわざわざ御惠投の鑵詰御書狀と前後到着難有拜受致候東京は今日より頗る寒氣加はり手水鉢に氷が張り候。御地も段々冬となる事と存候御加養專一に存候右不取敢御禮迄　艸々頓首

十二月十五日　　夏目金之助

渡　邊　様

九三〇

十二月二十二日　水　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號增田方林原（當時岡田）耕三へ

拜啓其後は失敬試驗を休んだ由どうして休んだのか、無暗に缺席をしては不可ない。あとから受けられるのかね。

どこかへ行くなら行つて來給へ。正月に御出で　以上

十二月二十三日（原）　　金之助

耕　三　様

九三一

十二月二十七日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　麻布區廣尾町百五十九番地木村秀雄へ

今度御足勞の處不得面接爲に御立腹の由承知致候

觀自在宗御弘めの爲機關御入用の由なれど夫は觀自在宗の信徒の有したる新聞か雜誌でなければ駄目に候然らずば金を儲けて自身に機關を設くるより外に致し方なかるべきか

胃病を癒してやるとの仰せ難有候然し御心配御無用に候。小生の胃は過去の因緣にて起りつゝあるものに候。過去の因緣消滅すれば大兄の力を藉らずとも自然に全快可致候小生は妄りに人の力によりて何うかして貰ふ事がきらひ故御厚意を顧みずわざと辭退致候

右御返事迄　艸々

十二月二十七日

夏目金之助

木村秀雄様

明治四十三年　大患以前

九三二

一月二日　日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕

恭賀新年

能勢原が來て君に「それから」を評してもらへと申します。さうして本を一部送れと申します。本は便次第送ります。御批評は願ひます。（朝日文藝欄なら二三回以下にて）

九三三

一月三日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　鹿兒島市春日町三十九番地濱崎方皆川正禧へ

恭賀新年

忙がしいから端書で失禮當地も暖かな好新年である。謠は御勉强の由御出京の節御相手可致候

九三四

一月三日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　靜岡縣修善寺新井方林原（當時岡田）耕三へ〔はがき〕

恭賀新年

「それから」は一部上げる積で居たのに惜しい事をした

三　日

九三五

一月四日　火　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣成田町谷津鈴木三重吉へ〔はがき〕

謹賀新年

今年より御活動のよし大慶の至に存候

一月四日

九三六

一月十一日　火　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

古本御序の節御求めを乞ふ　代金はあとから御返上可致候　以上

九三七

一月十四日　金　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　京都市二條川東疏水西厨川辰夫へ

拜啓朝日文藝欄に御同情被下玉稿わざ〳〵御寄送被下難有御禮申上候小包は只今到着いまだ拜見不仕候へども慥かに落手致候。舊冬中よりの原稿少々たまり候上前日掲載ものゝ反駁やら何やら參り且つ其間に起る時事に就て少々は意見を發表する必要も刻々起り候故出來る丈早く掲載の積には候へども多少の時日を要し候事故其邊はあしからず御含置願度候

又雜誌の原稿も同時に着是も出來る丈早く御希望の通に取計ふ所存に御座候中央公論が不可なければ外の雜誌をも聞き合せ可申其節は今一度御問合可致候

「それから」御ほめにあづかり難有候

右不取敢御返事迄　草々頓首

一月十四日　　夏目金之助

厨川辰夫様

九三八

一月十九日　水　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

拜啓此間の池松常雄氏（赤城元町三十四）へ二十四日の會の番組とくる樣に案内とを出す樣にカ

ンノウさんか高野さんに電話で賴んでくれ。何か役をつける事も賴んでくれ。うまい人だから尊敬した役をつけるがいゝと云つてくれ

九三九

一月二十一日　金　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より　59 Airedale avenue, Chiswick, London　大谷正信へ

拜啓其後は御無沙汰御地着の上只今はもはや御落付御研究最中と存候

御出立後東京も別段の變化無之。正月も例年の通り。降雪二回。曇日は寒き方に候。倫敦抔防寒的に家屋の構造の出來てゐる處は却つて我々の書齋よりも遙かに暖國に候。芝居其他御遊覽に相成候や。倫敦ほど雜駁な處は世界中にこれあるまじく考へ樣次第にては內地よりもずつと呑氣なものに候へば久し振りにて老書生に立ち歸り勝手に世帶の苦勞なく御消光可然と存候

「それから」出版致し候につき一部此手紙と同便にて進呈致候。日本の小說抔却つて御歸りの時の御邪魔にも相成るべくとは存じ候へどもかねて御愛讀を辱ふせる御厚意に對する記念として差上候もの故御落手被下度候

昨年末より朝日(東京)紙にて文藝欄なるものを開始し、毎日一段もしくは一段半位の批評もしくは文藝上の論文抔かゝげ居候。其下に六號活字にて柴漬と申すものを置き是には西洋の雜誌抔より通信、消息、報道等人の面白がりさうなものをごちや〳〵にならべ居り候。大體一項十行內外に候。

御地御見聞上の事にてもし現下日本の文藝上の時事問題に直接もしくは間接に關係ある御意見もしくは報知も有之候はゞ時々御寄稿被下度幸不過之候。又どこかへ御遊覽の節(ハンブトンコート抔)繪端書の裏へ寫生文の樣なもの五六行御書き被下候へば消息として今申したる柴漬の後へ載せたき考に候。

どうせ新聞故大論文や長時間を費やすものに就て御迷惑をかける料簡にては無之。たゞ霧が降つて人の顏がぼんやり映るとか、ショーの脚本をどこ座で見たが面白くなかつたとか、何とか云ふ事を五六行にてよろしく。もし又一二時間の御閑も有之ば文藝欄の五號活字として載せ得るもの一欄か一欄半位にて讀み切りのもの……何とか蚊とか手前勝手のみ申し募り候。御笑ひ可被下候　草々

一月十九日

繞石老臺

座下

夏目金之助

九四〇

一月二十一日　金　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より　Bei Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W.　寺田寅彦へ

マクベスの芝居の報知とエニスからの端書が來た。エニスのを六號活字にして文藝欄のなかへ掲載した。時々あゝ云ふ通信がくると載せるに都合が好い。外國にゐる人は何でもないと思つて

もこちらでは面白い。異彩を放つ譯になるから時々五六行で好いから繪端書の裏へ何か書いて寄こして呉れ給へ。

御正月が來た。相變らずであるが今月はもう雪が二度降つた。僕のうちの小供は段々大きくなるさうしてあとが續て生れる。今は六人と9/10丈生きてゐる。家族が殖えると金も入る。中々厄介である。外國で遊んでゐるうちが余程氣樂だよ。

此間森田と小宮が主催で方々へ招待狀を出して僕の宅で新年宴會を開いた。まあ眞面目に七變人の茶番を演じた樣なものだ。其プログラムには松根式部官の一中節だの森田の關係のある婦人の藤間流の踊だの、行德醫學士の薩摩琵琶だのあつたが、まあ妙なものだつた。中にも松根式部官の一中の先生が生憎二階から落ちて頭を割つたとか云ふので來られなかつたのは妙だつた。夫から女連には大塚の奥さんや物集の御孃さん姉妹が來た。安倍能成が醉つて高架へ這入つて反吐を澤山はいたあとへ小供が入つて臭い〳〵と云つてゐた。

文部省の繪畫展覽會が去年の末あつた。日本の繪畫も年々上手になる。音樂ではロイテルだのエルグマイステルだの何とか夫人とかいふ獨唱家も來た。此間小山内薫の催しで有樂座でイブセンのボルクマンを遣つた。僕は見に行かなかつた。が譯は森鷗外のもので役者左團次君以下であるが面白かつたさうである。そこで早稲田文學では小山内君に推贊の辭を呈するとかいふ話である。

「それから」が出來たから一部此手紙と同便で送る。もう少しすると又小説を書き出さなければならない。又いそがしくなる。君がゐなくなつたので理科大學の穴倉生活抔が書けなくなつた。

慧星の知つたか振りの議論も出來ない。又赤坂の三河屋を思ひ出した。あの藝者はどうなつたらう。我々が變化する如く彼女も變るだらう。

只今兩國國技館で大相撲最中。人氣は悉くこれに集つてゐる。　草々

一月十九日

寅　彦　樣

金之助

九四一

一月二十一日　金　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より　府下大森八景坂上杉村廣太郎へ

拜啓本日御葬送とは存候へども本門寺ではちと遠方故失禮致候

此間中より毎々倶樂部の御馳走に相成好都合至極何か御禮と思へど大した思付もなし。幸ひ今迄拙著を進呈したる事なき故珍らしくてよろしからんと存じ近刊それからを一部座右に呈し候中に何か書かうと思へども本屋の方で小包用につゝんである故まづい字抔はと考へ直して其儘差出候

御葬式其他にて嘸かしの御混雜の際に閑言を弄し恐縮なれど氣の付いた時出さないと人が來てそれから夫へと奪つて行く故あるうちにと存じ敢て場合を顧みず。失禮御高免の事。猶萬事了畢後の道體保安を祈る　草々頓首

一月二十一日

楚人冠盟臺

金之助

座下

九四二

一月二十一日　金（時間不明）牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

御手紙拝見致候美學會の件につき何遍も御手數をかけ不相濟る事と存候が其後始終ごた〳〵致し毫も頭に餘裕無之甚だ殘念ながら「出來た時に」と云ふ條件にて延期を願ふより外に致し方なくと存候右不取敢御迷惑ながら御返事申上候　早々

一月二十日　夏目金之助

阿倍次郎様

九四三

一月三十一日　月　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ

拝啓八重子さんの赤ん坊の事で此間から心配してゐた處昨日の手紙で安産のよしを聞いて漸く安心した。男子の上發育も充分御産も輕かつた由何より結構の事無人で御困り嘸かしと御察し申候二日徹夜では定めし弱つたらう猶是からが大變だ中々八釜敷ものだよ　先ば不取敢御祝迄　草草

一月末日　金之助

豐一郎様

九四四

一月三十一日　月　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區市谷船河原町池内信嘉へ

拝啓霞寶會につき拝趨の上篤と御相談致したる上にて會費取極めたく存居候處申込書御郵送につき至急を要し候事と存じ不取敢五つ口丈擔當致す事に致し候間可然御取計願上候猶發起人としてもつと分擔の必要も生じ候へば御協議の上何とも可致候

右御返事迄草々

一月三十一日　夏目金之助

池内信嘉様

九四五

二月二日　水　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

拝啓「通盛」が君の所に行つてゐやしないか。もしあつたら明日の木曜に持つて來てくれ玉へ。此間七騎落を西神田倶樂部へ置いて來ちやつた

九四六

二月三日　木　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

拜啓森田へ御端書の所當人事文藝欄休刊多き故日々出勤仕らず御返事が後れ候ては不相濟と存じ小生より申上候

過日の原稿は難有頂戴。よせ鍋中癡郎と有之候處あまり匿名のみつゞきては面白からず本名の峙樓を名乘つては如何と小生案じ煩ひ候に森田差支なかるべしと申出候につき御本名を書き加へ候、それからよせ鍋では薩摩汁の前後に(編輯上)鼻につき候故何とか工夫なきやと相談致し候折勢成君一讀「自ら知らざる自然主義者」ではどうだと發意一同贊成右に決し候。次に肝心の御抗議の花袋咆哮の件は實を云ふと草平の提案にて改正致候もの〔に〕有之候。

右は僭越にも尊稿を改めたる個所及び事情に有之。偖右につき御申越の趣委〔細〕承知致候。さう眞正面から御切り込みになりてはたゞ叩頭罪を謝するの外に道なく候が、さう嚴肅に權利問題とせずに少々此方の開陳する所を御清聽に達し度候間御怒りなく御聽取被下度候

小生は大兄と今日迄左したる交際無之從つて玉稿を隨意にどうするのといふ考は(親疎の關係上よりして)起らぬ次第なれど、大兄と二三子(たとへば草平能成豐隆の如き)との間柄は此位なフリードムを敢てしても御氣にさわらぬ程の圓熟せる御交際かと承知致し候ため、其際は何の氣もつかず、許諾致候。是は小生の粗忽とも云ふべきか平に御高免にあづかり度候。其上花袋咆哮云々を改めたる所が貴論の本旨に殆んど大した影響を與へぬ程な些末な點と愚考致したる故左迄御氣にもかゝるまじと早斷致候次第に候。左れば個人としての大兄に侮辱を加へると云ふ了見は

毛頭無之又此方の便宜の爲に貴意を顚倒錯亂せしめたるといふ自覺も無之御手紙を頂戴する迄は至つて呑氣に構居候。小生の寧ろ難色ありしは題を勝手に改め匿名を雅號に修正する方に有之候ひき。其時小生は阿倍君が怒りやしないかと念を押したる位に候。

右は事情を申上げて幾分か此問題を法律的なる權利問題より遠からしめんとする辯護に有之候。又事實問題として修正の箇所(花袋咆哮云々)が左程貴論にヴイタルならざりしならんとの辯解に候。

辯護も辯解も只緩和劑に候。是にて大兄の御不滿が少しにても取れ候へば小生は難有仕合に存候

御承知の通原稿は先月末に出すべき筈の處議會にて始終休まれる爲め延々になり居候處昨日森田電話にて掛合此次に組込む筈に致候旨申來候につき時日切迫の爲め或は貴意の如く元の通りに致しかね候やも計りがたく候へども正誤の件可成早く何〔と〕か分別可致。御目にかゝり御話をすればよけれどかけ離れ居候爲め無重寶なる筆にて御詫を入れ申候あしからず御宥恕願候　草々

二月三日　　夏目金之助

阿倍次郎様

諸方より來る原稿中削除もしくは書改める事有之。是は原稿が文をなさゞる場合にのみ限り候。又は少し手を入れる事あり。是投稿者へ却つて敬意を表する場合にも致候。大兄のとは全然趣を異に致し候故是も序に申上置候

九四七

二月三日　木　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區大久保余丁町百六番地安倍能成へ

御手紙拝見致候先達ては失禮致候御來旨の趣は阿倍君よりも森田へ問合せ來り候處森田參らざる故小生より返事を出し置候

花袋云々の件は阿倍氏の書き方の前後より押して毫も全篇の主意に痛痒を與へざるものと見做したる故森田より相談を受けたる時夫でもよろしからんと申候。森田の考は阿倍君とあすこの處丈が違つた故に訂正を申し出したるならんとは其時存じ候。人の書いたものを一字でも手を入れる事に許諾を與へたるは阿倍氏は森田小宮抔と親交ありて、あの位の事はあとから斯う云ふ譯だと話せばあゝさうかと笑つて仕舞ふ位の間柄と思ひし故に候。權利問題を呈出されて事が六づかしくならう抔と想像し得る程の大關係の箇所とも思はず、又森田對阿倍の關係が夫程フオーマルに禮儀を盡さねば手落となりて後で抗議を受けるとも思ひ居らざりし故に候。

小生は文藝欄擔任記者として凡ての論文に對し自ら責任を負ふ積り故文章が意味を爲さゞる場合は森田に書き直させ候事も有之候。又長ければつゞめさせる事も有之。右兩樣共寄稿者並びに文藝欄の體面上雙方の便宜と思ふ場合に有之。從つて是等の場合は寄稿者に寧ろ尊敬を拂ひし爲の手續と考へ居候。阿倍氏のは右兩樣の場合とは異なり。却つて懇意づくより他の原稿を多少どうかし得るフリードムありと信じたる親密を森田阿倍兩氏の間に測定せるより起るものに候。

此測定が人を侮辱せるもの也との抗議ならば不敏を謝するより外無之候。謹んで大兄と阿倍君に御詫び可致候。

有體に申候へば今の所謂自然派(自然派をかたち作る人物)が嫌に候。是は其說が如何にも粗漏放慢にして相手の人格及び意見に對して毫も敬意を拂はざる表現法をのみ用ひるが故に御座候。かの人々自からのコンシートを撤回せざる限りは到底かの人々の議論に對し敬意を拂ひがたく候。敬意を拂ひ得る丈に議論は周到ならず、態度は士君子流ならざる故に候。この嫌惡の情の爲に左右せられて森田の提議に應じたるかの質問に對しては寧ろ然りと答へるの事實なるべきを公言致したき位に候。去れども徹底(原)に彼等兩人は自然派たり得ずと理智の判斷に支配(原)されたるも事實に候。最後に尤も多く余を動かしたるはどうでも好い所だと云ふ念と、懇意づくの間柄だからと云ふ心持とに候。夫が貴兄等の尤も癪に障つた所だらうと後悔致し候。論議は公正ならざる可らず、意見は不偏不黨ならざる可らざる事は御說の如くに候。小生が許諾を與へて訂正せしめたるも此公平と不偏不黨を傷けざる範圍内の出來事位に暗々の裏に思惟せるとしか自分には考へられず候。夫を然らずと御思ひありては只恐縮の外なく候へども致し方も無之候。小生はあの時大兄の題をつけかへて、匿名を峙樓に直したる森田の擧動を寧ろ不穩當と感じいさゝかためらひ申候へども、前述の通り是も懇意づく故君等がリバーチーを與へられたるものと信じ矢張り承諾致候

小生不行屆にて諸君子に煩を及ぼし慚汗不少候。右返事により幾分か小生の心意を致すを得ば幸に候。猶期御面會申候　以上

二月三日

夏目金之助

安倍勢成様

九四八

二月六日　日　午後二時—三時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ〔はがき〕

拜啓虚子轉地の由編輯御多忙ならんと存候。小生此間の謠會に七騎落を西神田倶樂部へ忘れし様なり、御序の節幹事に願つて取つてもらつてくれ玉はぬか右御願迄、　八重子さ〔ん〕赤坊共御健勝の事と存候

九四九

二月十日　木　牛込區早稲田南町七番地より　栃木縣芳賀郡山前村字道祖土高松甚一郎へ

御手紙拜見私のものを御愛讀被下るよし難有い事でどうぞ今後も御讀を願ひます。近頃の本でノンビリと氣の樂になる樣なものはあんまりありません。私の友人の高濱虚子といふ人の書いた俳諧師といふのがあります。民友社の出版で並製壹圓以下と覺えてゐます、あれでも讀んで御覽なさい右御返事迄　草々

二月十日

高松甚一郎様

夏目金之助

九五〇

二月十六日　水　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

柴漬難有頂戴明木曜日もし御光來なら本郷で掌中醫方と申す小冊子(壹圓程か)を御買求め被下度右願上候　草々

二月十六日

九五一

二月二十日　日　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

別紙の如き端書參り候御序の節御返事御出し被下度候當用のみ　草々

二月廿日

豐隆様

金之助

九五二

三月二日　水　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區第一高等學校寄宿舍東寮十一乙林原(當時岡田)耕三へ

拜啓三月記念祭にて切符わざ〳〵難有候小供生憎學校にて參るひまなく殘念に候いづれ拜眉萬

萬

本日の新聞には會の景況色々記載有之候大分賑かの様被存候小説執筆中にて多忙今度はゆるゆる書いて居候

三月二日　夏目金之助

岡田耕三様

九五三

三月四日　金　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　Bei Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W. 寺田寅彦へ

端書拜見其後御變りもなき事と存候。今度音樂家で山田といふ人が岩崎の金で伯林へ留學する幸田の所をたよる由。此人の友人で筆の先生の中島さんから君へも序に賴んでくれといふから一寸御報知する。何かの機會もあつたら世話をしてやつてくれ玉へ。

段々春めいてきて少しは暖かになつた。昨日湯に入つたら今朝始めて鶯をきゝましたよ。まだ下手ですねと云つてゐた。宅では簞笥の上に御雛様を飾つてゐる。山田といふ奥さんから虎屋の雛の菓子をもらつて飾つた。二日の夜明に又御産があつて大混雜。又女が生れた。僕は是で子供が七人二男五女の父となつたのは情ない。鬢の所に白髮が大分生えた。又小説をかき出した。三月一日から東京大阪兩方へ出る。題は門といふので、森田と小宮が好加減につけてくれたが、一向門らしくなくつて困つてゐる。小宮も森田も中々有名になつた。虛子が去年の末腸チフスをやつて漸く快復したがまだ衰弱してゐる。其他異狀なし　草々

三月四日御天氣のいゝ日

寅彦様　　金之助

九五四

三月十一日　金　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巢鴨町上駒込三百三十四番地

野上豐一郎へ

雜誌拜受玉稿面白さうなれど未だ讀ます。あの六號活字は誰が書くにや。僕と楚人冠と確執してゐる様に書いてある。僕が十五二十四兩日に幹部會議に出るため社へ行くと會議の濟むのが何時でも午頃になる。すると楚人冠が何時でもおい夏目君飯を食ふぢやないかと僕を誘つて表へ出る。さうしてつい傍の交詢社へ行つて會食する。僕は倶樂部の會員でないから費用は何時でも楚人冠の擔任だ。僕は楚人冠の誘を受けるとうん御馳走し玉へと云つて一所に出る。是ぢやあまり確執でもあるまい。

蒼瓶がジョナリズム(自然派攻擊)の非難を書いた時、楚人冠が新聞界で自分のやつてゐるジョーナリズムの意味にとつて反駁した事がある。其時僕はストーブの前へ君あんな事を書くと君と僕と喧嘩してゐる様に世間で思ふよ。かくなら文藝欄のうちへ書かないかと云つたら、楚はうんさうかと云つてゐた

六號抔はどうでも好いが是も一つの材料だから虛子が霞賓會の事を辯じた様に風聞錄か抔ぞへ

六號へ事實を書いて呉れないか。たゞし僕が自分で正誤する程なら自分の新聞でやるから、そこは君の取計で如何樣にも願たい。尤もこんな事は始終あるから別に氣にもならないから、君の方の都合が好かつたら材料として使つて貰はう位の所に過ぎない　草々

三月十一日　　金之助

豐一郎　樣

森田のやつこが楚人冠へ答辯をかいた時は僕に原稿を檢閲す〔る〕ひまを與へずにすぐ社へ持つて行つた。あれを僕は書き方がよくないと叱つた位だ

九五五

三月十二日　土　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓ルンドシヤウ一、二月號同時に着。瞥見するにあまり材料なき樣也。御序の節可差上候

草々

十二日

九五六

三月十三日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ　〔はがき〕

本日風聞錄で楚人冠記事拜見御手數難有候。ミナも拜見あれは面白く候此前の新小說のと共に佳作に候。「赤門前」よりはよろしく候

九五七

三月十三日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區第一高等學校寄宿舍東寮十一乙林原（當時岡田）耕三へ

御手紙拜見指が痛いつて云ふのは何の病氣かね醫者にはかゝつてゐるのかね、指が痛くつて筆が持てなくつては學生は出來ない位だ養生をしなくつちや不可ない

人世觀とか世界觀とかいふものは段々變るものだが其時其場合には誰にもしつかりした處があつて欲しい。何物にか逢着したのは君の仕合だ。

印は押し候　草々

三月十三日　　金之助

耕三樣

九五八

三月十六日　水　牛込區早稲田南町七番地より　大塚楠緒へ　〔封筒なし〕

先日は御光來の處何の風情も無失禮致候其節御話の竹柏園の演說の事一應考へ候へども何分餘裕無之甚だ御氣の毒ながら御斷り申上候佐々木氏へ左樣御傳被下度候

大塚氏神經衰弱未だ御回復なき由神經衰弱は現代人の一般に罹る普通のもの故御心配なき樣冀候。逢つて話をする男は悉く神經衰弱に候。是は金病とともに只今の流行病に候右御返事迄　草々

三月十六日　　金之助

大塚楠緒子樣

九五九

三月十八日　金　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區九段中坂望遠館松根豐次郎へ

〔はがき〕

御歸京の由、御父さんの病氣は如何。此間少々用事あり七時頃君の處へ行つたら、今御國へ御歸りと云つた。用事は今濟んだ。何れ其うち、御產は安產、性は女子、名づけてひなといふ三月二日朝三時の生れ。

九六〇

三月十九日　土　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓永井荷風氏より別紙の通申來候條件次第にて御引受可然か、小生より返事するか又は君が直接に荷風氏と交渉するか何れでもよろしく候

柴漬の參考の米國新聞いまだ机上にありどうぞ御序の節御返し願候　草々頓首

三月十八日　　金之助

豐隆樣

九六一

三月十九日　土　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

〔はがき〕

拜啓原稿頂戴致候。近頃文藝〔欄〕不規則にてすぐ出す譯に參らず。御氣の毒に候。上の方はすでに編輯へ廻し置き候御禮迄　草々

三月十九日

九六二

三月二十三日　水　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下西大久保百五十六番地戸川明三へ

〔はがき〕

今日能不參に候。御手紙昨夜着今朝披見御返事後れ申候。來月の霞寶會の能には壇風有之是には是非御招待致度と存居候　早々

九六三

三月二十九日　火　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣成田町鈴木三重吉へ

御手紙拝見春雨の候御地は如何。淋しい由。色々な意味にて誰も淋しく候。小鳥の巣毎日拝見隨分御苦心の事と存じ候へども書きかけたもの故是非共始末を奇麗に御付可被成候學校授業執務の外に小説を毎日書くのは定めて御難義とは存居候。小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲勞する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候、いづれ委細は御面晤　草々頓首

三月二十九日

三重吉様

金之助

九六四

三月三十日　水　午前八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區元園町一丁目武者小路實篤へ

〔はがき〕

拝啓白樺一號御惠送にあづかり拝受。卷頭の「それから」評未だ熟讀不致候へども直ちに一寸眼を通し候。拙作に對しあれ程の御注意を御拂ひ被下候のみならず、多大の頁を御割愛被下候事感佩の至に候。深く御好意を謝し申候。御批評の内容は未だ熟讀を經ざる事故何とも申上かね候へども所々肯綮に當り候所も多き樣に存候。中にも「それから」が運河だと云ふのは恐らく尤も妙なる譬喩ならんと存候。「それから」のとめ方の御辯護もあの通りの愚見にて候ひし。先は御禮迄　草々

九六五

四月六日　水　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區元園町一丁目武者小路實篤へ　〔はがき〕

拝啓「代助と良平」頂戴難有候都合次第掲載可致候間しばらく御猶豫願上候。右御禮迄　草々

（森田參るべき處多忙にて電話にて御迷惑願候事と存候御免被下度候）

九六六

四月十日　日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　清國湖北省沙市日本領事館橋口貢へ

拝啓御出發の際は御見送も不致海陸御無事御地に御着のよし大慶の至に候春雨濛々とか黄鶴樓とか申す言葉をきくと是非一遊致し度相成候當地も春景色にて諸新聞ともに花信を掲載致居候處生憎筆に祟られ外出不仕悶然の至に候。朝日文藝欄にては時々清君を煩はし盡界の事に關し御執筆願居候。御地にて何か面白き報知も有之候はゞ同欄のなかへ掲載致度考に候。どうも文藝欄を擔任してより商買氣多く相成困入候。

書畫骨董隨分御清賞不淺事と存候　草々

四月九日

橋口貢様

金之助

九六七

四月十一日　月　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區元園町一丁目武者小路實篤へ

〔はがき〕

御端書拝見致候あの文句を玉稿中に插入する事はどこかツギの出來る様な氣がして、どうも旨く行きませんから已めました。右あしからず。御旅行の由充分の御保養を祈る

九六八

四月十二日　火　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎へ

貴墨拝誦再度申上候。自然主義が滑つても轉んでも小生も毛頭異存無之候へども、自然主義を振り廻す人と同商買故何うでもよくなくなり候。それから自分は何うでもよいとしても斯ういふものに支配される若い人が澤山有之候故、矢張り何とか蚊と〔か〕誤(原)詫をならべて文藝欄を賑はし、且つ其人々にあまり片寄らぬ様な所見を抱かし度考になり候。

然し毎日自然主義がどうしたとか斯うしたとかにては小生も讀者も大兄も辟易故、たまには大兄の御得意の鳥獸草木も是非御紹介を願度候。然し根が新聞故講義體に堂々と例證ばかり出てきて何日もつゞくと困り候故、一般讀者並びに文藝好の人に興味のある様な事にて八十行位で一寸面白く讀まれ得るも〔の〕切望に候。然し此方から注文を出すと又六づかしく相成恐縮致候が、もし御閑もあらば御含置の上たまには御認め被下度あらかじめ願置候　艸々

四月十二日　　金之助

芥舟様

九六九

四月十六日　土　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より　千葉縣成田町鈴木三重吉へ〔はがき〕

拝啓小鳥の巣は題名の通り小鳥の巣に至つて始めて君の眞面目を發揮致し候。あゝいふ事の敍述は今の文壇無之。從つて甚だ興味深く候　草々

九七〇

四月二十二日　金　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より　佐賀縣神埼郡三田川村苔野行德二郎へ

拝啓其後は御無沙汰に打過候過日俊則君御歸郷の砌り一寸御近況を伺ひ候當時は學校をやめて御郷里にて御靜遊のよし奉賀候

兩三日前御恵投の苗木芽生數種到着幸ひ植木屋參り居候故直ちに適當の所を擇ひ植付來春に至り花頃に植かへる事と致候御多忙中御親切の段深く感謝致候不取敢右御禮申上度草々如斯に候

頓首

四月二十二日　　夏目金之助

行德二郎様

御兩親様ならびに御令兄へよろしく願上候

九七一

四月二十四日　日　使ひ持參　牛込區早稲田南町七番地より　池邊吉太郎へ

今日は日曜なれば會議如何あらんと存候へども念の爲め出社候までの處わざ〳〵御斷りにて恐縮致候明日に御繰延しの事も拜承致候實は小説手おくれの氣味にて多少狼狽の姿故ことによると欠席致すやも計りがたく候につき時間に參り不合候はば御構なく御開き願上候委細は拜眉の上萬縷　艸々

四月二十四日夜

池邊様

金之助

九七二

四月二十九日　金　午後三時—四時　牛込區早稲田南町七番地より　茨城縣結城郡岡田村長塚節へ

拜啓其後は御無沙汰に打過候偖先般は森田草平氏を通じて突然なる御願に及び候處早速御聞屆被下候段感謝の至に候其後草平君より再度の照回に對する御返事正に拜見致候小生の小説はいつ完結するや實の處本人にも不明に候へどもごく短かくても九十回にはなるべきかと豫想致居候只今六十回故今より御起草被下候へば小生も安心。萬々一の事にて夫よりも早く片付候ても毫も心配無之故失禮をも不顧伺候次第に候御返事の趣にて一旦御引受の上は不都合なき由御申聞難有候東京と茨木とは少々懸隔居候故自然懸念も相生じ杞憂相洩し候様の譯あしからず御高免願上候右御挨拶旁御願迄如斯に候　草々頓首

四月二十九日

長塚様

夏目金之助

九七三

五月二日　月　午後八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より　麹町區元園町一丁目武者小路實篤へ〔はがき〕

玉稿はたしかに入手致しました。都合つき次第掲載致します。毎度御迷惑をかけて済みませんこ後も時々願ひます。白樺も慥かに頂戴。右御禮迄　草々

九七四

五月三日　火　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より　本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔はがき〕

啓安奉線は御申越通りならんと思但しよく知らず、もう一つの方はあれで慥かに宜しい。君の時計らしいのが忘れてある。催促も探索もしないところがえらい。東さんにトルストイの御禮を云つてくれ

九七五

五月十一日　水　牛込區早稻田南町七番地より　鹿兒島市春日町三十九番地濱崎方皆川正禧へ

拜啓其後は御無沙汰奉謝候御手紙難有拜見致候近來は東京朝日に文藝欄を設け諸君子の文藝上の意見を紹介致し居候獨文の方は中々活躍英文の方は少々振はず候ちと御投稿如何に候や

謠は小生も熱心に候此夏御上京の節は御相手致度候

「門」御愛讀被下候よし難有存候近頃身體の具合あしく書くのが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入つて充分療治せんかと存候四十を越すと元氣がなくなり申候

野間君も健在の事と存候よろしく

御職業の事精々心掛可申候隨分困難につき御邊は御承知願上候

野村も一度は地方へ參る由申居候

先は御返事迄　草々

五月十一日　夏目金之助

皆川正禧様

九七六

五月二十二日　日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　清國湖北省沙市日本領事館橋口貢へ

拜啓其後は御無沙汰致候御地着後新らしき山川人情定めて御眼新らしき事と存候

當地櫻も散り若葉の時節。昨二十日は英國先帝の遙拜式有之大分盛大の模樣、白馬會と太平洋畫會と同時に開會賑やかに候。小生胃病烈しく外出を見合せ世の中を頓と承知不仕候

御送の寫眞數葉着御好意深謝致候日英博覽會記念繪葉〔書〕一組御目にかけ候スタンプは押してなく候へどもそれは差支なくと存じたゞ葉書のみ差上候

先は御禮迄　艸々

五月二十一日　夏目金之助

橋口様

九七七

五月二十二日　日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　佐賀縣神埼郡三田川村吉田行德源誠へ

拜啓未だ不得拜眉の榮候處愈御壯勝奉賀候御令息俊則様並に二郎様にはかねてより御近づきの事とて時々色々の用事抔相願ひ失禮のみ重ね居候

今度二郎君御出京につき保證人御依囑につき印形丈押し申候外別に何の御役にも立ち不申不本意の處わざ〳〵御禮狀被差遣却つて汗顏の至に候

二郎氏御出京の節は結構なる御土產頂戴是亦深く御禮申上候

右御返事旁御挨拶迄　艸々

五月二十一日　夏目金之助

行德源誠様

九七八

五月二十三日　月　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木三十三番地阿部次郎へ

拝啓「それから」に就き御丁寧なる御批評難有頂戴御多忙中甚だ恐縮致候實は「それから」が拙著なるの故にあの様に委曲なるものを三日もつゞけて文藝欄へ出して場所を塞げるのが少々面目なき心地致候。是は御論の内容とは丸で關係なき只小生の氣がねに候。種々配合の都合も有之候へば森田とも相談の上掲載の日取取極度しばらく御猶豫願候。玉稿最初の一句宿約云々は削除致しても差支なくや一寸伺ひ候。大兄の進まぬのをわざと書かして自己の文藝欄で吹聽する様にて恐れ候。實は新刊の書物ももつと澤山文藝欄で批評して居るとこんな時には遠慮が入らなくてよろしけれどついひまなく森田も多忙にて其方を怠り候ため一寸勇氣を失ひ候。

玉稿の内容は面白く候ことに會話などに作爲のあとあるところ御同感に候其他御説として伺ひても小生のしか思はぬ點も有之候。

消極的の衒氣のみならず積極的にも大分あるやに見受られ申候。だから小生は自分の作を本になつてから讀んだ事は無之候。近頃四篇のうちに文鳥と申す短篇を收め候を豐隆が校正致し大いに賞め候故こわ〳〵ながら讀み返し候處是は左のみ厭味も感じ申さず候ひし。何事も書いてゐるうちが花に候後を振りかへると冷汗のみに候

「四篇」もし御入用なら差上可申候

右御禮旁申述候いづれ拝眉萬々　艸々

五月二十三日

阿部次郎様

夏目金之助

九七九

五月二十四日　火　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より　府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ　〔はがき〕

御返事拝見致候。二葉亭の全集に就ては社と特別の關係もある事故是非何か書きたくと存候已を得ねば又魯庵先生でも煩はし度と思ひ居候が、大兄もし御閑なら其方を先にして「それから」の前に出して下さる餘裕ありや一寸伺ひ候。一存にては二葉亭と「冷笑」でもやつたあとに「それから」を廻し度と存候

九八〇

五月二十八日　土　牛込區早稲田南町七番地より　牛込區辨天町百七十二番地山田繁へ

拝啓先日は失禮其節御あづかり申上候玉稿あれからすぐにホトヽギスへ送り申候處早速同君より別紙の如き返事參り候間御目にかけ候

猶同君の意見向後御述作上の御參考になりて可然かと存候　草々